

新堂遺跡Ⅲ

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

2019年8月

奈良県橿原市教育委員会

序

ここに新堂遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第15冊 新堂遺跡Ⅲ』として刊行します。本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂遺跡において橿原市教育委員会が平成18年に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

橿原市の西部では近年、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査によって、様々なめざましい発見が相次ぎました。新堂遺跡はその代表格で、渡来系要素を有す古墳時代の集落跡が発見されるなど、多くの新知見が得られており、橿原市で今もっとも注目を集めている遺跡の一つとなっています。

本書で報告を行う橿教委2006-2次調査は新堂遺跡の南端部で実施した調査で、平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての成果が最も注目されます。河道とその河岸に広がる遺構群から多くの遺物が出土しました。川辺に生きる人々の暮らしが浮かび上がります。また、『新堂遺跡Ⅱ』で報告を行った同時期の屋敷地遺構群との関係も興味深いものです。

河道から出土した木製人形は現在、「歴史に憩う 橿原市博物館」において常設展示されています。その愛嬌ある姿が人気を博しており、目玉資料の一つとなっています。ぜひ足をお運びください。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げますと共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

令和元年8月31日

橿原市教育委員会
教育長 吉本重男

例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂（しんどう）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告を行う発掘調査は、京奈和自動車道（御所区間）建設に伴って実施している。国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所の委託を受け、奈良県教育委員会の指導のもと、奈良県橿原市教育委員会が発掘調査及び整理・報告作業を担当している。
- 3 発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所が負担している。
- 4 現地調査期間は平成 18（2006）年 7 月 3 日～同年 11 月 2 日である。
- 5 遺物整理・報告書作成期間は平成 28（2016）年度～令和元（2019）年度である。
- 6 現地調査時の体制は、橿原市教育委員会事務局 文化財課長 佐藤幸一、課長補佐 齊藤明彦、係長 竹田正則、主査 平岩欣太、嘱託 寛和也である。現地調査は平岩・寛が担当している。
また、遺物整理時の体制は文化財課長 竹田正則（平成 28～令和元年度）、課長補佐 濱口和弘（平成 28・29 年度）・露口真広（平成 30・令和元年度）、統括調整員 平岩欣太・田原明世（平成 28～令和元年度）、主査 石坂泰士（平成 28～令和元年度）である。整理作業は石坂が主に担当した。
- 7 発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、地元各位をはじめ、国土交通省近畿地方整備局奈良国道事務所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所より多大な御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 8 出土遺物報告のうち木簡の判読および写真撮影については、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・鶴見泰寿氏に御協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。
- 9 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会が保管している。遺物の一部は、歴史に憩う橿原市博物館にて常設展示を行っている。
- 10 本書所収の写真のうち、現場調査写真は調査担当者が撮影を行った。遺物写真は濱口和弘および株式会社地域文化財研究所が撮影を行った。
- 11 本書の編集及び執筆は、石坂が担当した。

凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。
- 2 写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。
- 4 土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、日本色研事業株式会社 発行）を使用した。
- 5 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は 0 である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 6 遺物実測図の番号は、本書全体の通し番号で示している。図版の遺物番号もこれと一致している。
- 7 土器の実測図については、時期を問わず須恵器は断面を黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。

目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
第1章 調査の経過	
第1節 調査に係る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	10
第2節 基本層序	11
第3節 遺構	14
第4節 遺物	31
第4章 総括	
第1節 調査成果のまとめ	76
第2節 周辺の遺跡と環境	77
報告書抄録	80
図版	

挿 図 目 次

図1	調査地位位置図	5
図2	調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は2019年度当初の内容)	7
図3	調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)	8
図4	調査区北壁 土層断面 (S = 1/50)	12
図5	調査区西壁 土層断面 (S = 1/50)	13
図6	上層遺構配置図 (S = 1/250)	14
図7	SE131 平面・立面図 (S = 1/20)	15
図8	中層・下層遺構配置図 (S = 1/250)	16
図9	中層・下層遺構配置図 調査区北西部拡大 (S = 1/150)	17
図10	中層・下層完掘状況図 (S = 1/250)	18
図11	河道内 木組み遺構出土状況図 (S = 1/50)	18
図12	河道内 木桶出土状況図 (S = 1/50)	18
図13	河道土層断面図 (S = 1/150)	19
図14	区画溝土層断面図 (S = 1/40)	21
図15	SD144 東半部平面・断面図 (S = 1/40)	22
図16	SD230 断面図 (S = 1/40)	22
図17	SE149 平面・断面図 (S = 1/40)	23
図18	SE150 平面・断面図 (S = 1/40)	24
図19	SX141 平面・断面図 (S = 1/40)	25
図20	SX148 平面・断面図 (S = 1/40)	25
図21	中層遺構 掘立柱建物・堀・ピット配置図 (S = 1/150)	26
図22	中層遺構 SK・SX・SP 土層断面図① (S = 1/40)	27
図23	中層遺構 SK・SX・SP 土層断面図② (S = 1/40)	28
図24	下層遺構土層断面図 (S = 1/40)	30
図25	上層遺構 耕作溝群出土 土器 (S = 1/4)	32
図26	上層遺構 SE131 出土 土器・石製品 (S = 1/4)	34
図27	中層遺構 河道1層出土 土器① (S = 1/4)	35
図28	中層遺構 河道1層出土 土器② (S = 1/4)	36
図29	中層遺構 河道1層出土 土器③ (S = 1/4)	37
図30	中層遺構 河道1層出土 土器④ (S = 1/4)	38
図31	中層遺構 河道1層出土 土器⑤・土製品・石製品 (S = 1/4)	40
図32	中層遺構 河道1層出土 金属製品・木製品 (S = 1/2・1/4)	41
図33	中層遺構 河道2層出土 土器・木製品 (S = 1/4)	43
図34	中層遺構 河道3層出土 土器① (S = 1/4)	44
図35	中層遺構 河道3層出土 土器② (S = 1/4)	46
図36	中層遺構 河道3層出土 土製品・木製品 (S = 1/4)	47
図37	中層遺構 河道4層出土 土器① (S = 1/4)	48

図 38	中層遺構	河道 4 層出土	土器② (S = 1/4)	49
図 39	中層遺構	河道 4 層出土	土製品・木製品 (S = 1/4)	51
図 40	中層遺構	SD140 上層出土	土器 (S = 1/4)	52
図 41	中層遺構	SD140 下層出土	土器 (S = 1/4)	53
図 42	中層遺構	SD145 出土	土器①・鉄滓 (S = 1/4・1/2)	54
図 43	中層遺構	SD145 出土	土器② (S = 1/4)	55
図 44	中層遺構	SD145 下層出土	土器・鉄滓 (S = 1/4・1/2)	56
図 45	中層遺構	SD146 上層出土	土器 (S = 1/4)	57
図 46	中層遺構	SD146 下層出土	土器・鉄滓 (S = 1/4・1/2)	58
図 47	中層遺構	SD147 出土	土器 (S = 1/4)	59
図 48	中層遺構	SD144 出土	土器 (S = 1/4)	60
図 49	中層遺構	SD251 出土	土器 (S = 1/4)	60
図 50	中層遺構	SD230 上層出土	土器① (S = 1/4)	61
図 51	中層遺構	SD230 上層出土	土器②・土製品 (S = 1/4)	62
図 52	中層遺構	SD230 下層出土	土器・土製品 (S = 1/4)	63
図 53	中層遺構	SE149・SE150 出土	土器・石製品・木製品 (S = 1/4)	64
図 54	中層遺構	SK260 出土	土器 (S = 1/4)	65
図 55	中層遺構	SX138・SX139 出土	土器 (S = 1/4)	66
図 56	中層遺構	SX141 出土	土器・石製品・木製品 (S = 1/4)	67
図 57	中層遺構	SX148 出土	土器・木製品 (S = 1/4)	68
図 58	中層遺構	SX151・SX203 出土	土器 (S = 1/4)	69
図 59	中層遺構	SP 群出土	土器・石製品 (S = 1/4)	70
図 60	下層遺構出土	土器・石器 (S = 1/4・1/8・1/2)	71	
図 61	遺構面出土	土器・石製品・鉄滓 (S = 1/4・1/2)	73	
図 62	重機掘削時・排水溝掘削時出土	土器 (S = 1/4)	75	
図 63	新堂遺跡・東坊城遺跡周辺の調査地と河道復元図	(S = 1/3,000)	78	

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に係る経緯

本書は、京奈和自動車道建設に伴って実施した新堂遺跡（榑教委 2006-2 次調査）の発掘調査報告書である。

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ自動車専用道で、国土交通省により各地で建設が進められている。奈良盆地内の京奈和自動車道は、平成 30（2018）年度末時点で、「大和区間」のうち郡山下ツ道ジャンクションから榑原北インターチェンジまで開通・供用している。その南にあたる「御所区間」では残されていた御所南インターチェンジから五条北インターチェンジまでの区間が平成 29（2017）年 8 月に供用され、榑原高田インターチェンジ以南の区域が全線開通となった。

榑原市域における京奈和自動車道建設に伴う本格的な調査は、国道 24 号線より南において昭和 63（1988）年より断続的に実施されてきた。当教育委員会では奈良県教育委員会の依頼を受け、榑原バイパスと国道 24 号線の接続部から南の御所インターチェンジまでの距離約 5 km の区間を対象に、平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にわたり発掘調査を実施した。同区間は大和高田バイパスと交差する榑原高田インターチェンジを境として、北が「大和区間」、南が「御所区間」となる。発掘調査を実施する区域の分担については、国土交通省、奈良県教育委員会、奈良県立榑原考古学研究所、大和高田市教育委員会、御所市教育委員会及び当教育委員会の協議の元で決定された。

当市域内における京奈和自動車道の建設予定地では、これまで本格的な調査が行われておらず、遺跡の詳細が不明、あるいは埋蔵文化財の包蔵地外とされてきた地域が大半であった。しかし京奈和自動車道建設を契機とする一連の発掘調査によって、遺跡の範囲・内容が変更される、あるいは新たな遺跡の存在が認識されるような発見が相次いだ。

当教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度-調査次数の形で示している。本書で報告を行う調査に対しては、榑教委 2006-2 次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。

新堂遺跡は、「大和区間」と「御所区間」にまたがる範囲に位置する。本書で報告を行う発掘調査は、現在の榑原高田インターチェンジから南に約 200 m の地点で実施している。新堂遺跡の発掘調査は平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にかけて、当教育委員会が実施している。調査開始時点では西新堂遺跡という名称の遺跡であったが、周辺における調査の積み重ねを受けて平成 17（2005）年 8 月に新堂遺跡への改称、及び遺跡内容・範囲の変更が行われた。なお、新堂遺跡の範囲は平成 26（2014）年にさらに北西へと広がっている。図 2 の遺跡地図では平成 30（2018）年度末時点での範囲を示している。

榑教委 2006-2 次調査地点は、新堂遺跡の南東端付近に位置する。調査時には、調査地の小字名・角田（すみだ）から採って新堂遺跡 角田地区との名称も用いているが、北隣で実施した榑教委 2005-4 次調査（榑原市教育委員会編 2017『新堂遺跡Ⅱ』で報告済み）も同じく字角田の範囲に含まれており調査時に角田地区の名称が用いられている。混同を避けるために本書では角田地区の名称は用いず、ここで触れるに留めることとする。

第2節 発掘作業の経過

本発掘調査は平成18(2006)年7月3日から同年11月2日までの期間実施した。実働日数は72日を数える。その間、作業員は延べ845人を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

平成18年7.3(月)

調査区設定。南から重機掘削開始。現況の水田耕作面から約60cmの深さで遺構基盤層と思われる灰色砂を検出。湧水があり、排水溝を掘削。

7.4(火)

昨日に続いて重機掘削。遺構基盤層は調査区北西部で、北側隣接調査地(2005-4次)と同様の褐色粘質土に変わる。この面には瓦器塊等を含む遺構が散見できる。調査区壁面整形、排水溝掘削。土嚢作り。調査区壁面養生。

7.6(木)

引き続き重機掘削。壁面整形、排水溝掘削。調査区北西隅の攪乱の掘削。調査区北部は瓦器塊、土師器等まとまって出土する。北側調査地(2005-4次)東南隅の斜行溝につながる可能性のある斜行溝あり。河道は調査区の広範囲に広がる。

7.7(金)

重機による掘削土移動。南から北へ。

7.10(月)

重機掘削、本日で終了。調査区北壁面整形、排水溝掘削。バルコン設置。調査区西側より検出面の鋤取りを行い、遺構検出作業を進める。

7.11(火)

調査区西側より昨日に続いて遺構検出作業。南側排水溝掘削。遺構面付近には瓦器塊が存在する。耕作溝が存在。調査区北西部には柱穴も多数。井戸と思しき土坑も。

7.12(水)

調査区北東部の遺構検出作業。北東隅から西南方向に向かって、河川の斜め堆積による縮状土層が複数認められる。

7.13(木)

調査区東半部の中央から南にかけて、遺構検出作業。調査区北東部では不明瞭であったが、南側では河川(中世か)埋没以降の耕作溝の存在を確認。北西部の耕作溝とは方位が異なる傾向あり。

7.14(金)

調査区南東部の遺構検出作業。シート養生。

7.24(月)

調査区東・南の壁面整形。排水溝掘削。遺構検出面の清掃開始。

7.25(火)

調査区西・北の壁面整形。排水溝掘削。検出面清掃。調査区北壁で確認したところ、河道埋土は東西で違いが見られる。堆積時期に違いか。別遺構である可能性も検討。

7.26(水)

引き続き遺構面清掃作業。

7.27(木)

引き続き遺構面清掃作業。バルコンを調査区外へ移動。

7.28(金)

写真撮影準備作業。調査区全景、上層遺構検出状況を撮影。撮影後、全体の養生作業を行う。

7.31(月)

バルコン設置作業。調査区南西部から順に、素掘耕作溝の掘削を進める。下層で瓦器塊を多く含む区画溝らしき溝を数条確認。

8.1(火)

素掘溝掘削。下層で瓦器塊を含む幅60cm程度の溝を確認。

8.2(水)

調査区北西部の素掘溝掘削。下層に土坑や柱穴、溝などが存在することを確認。

8.3(木)

調査区北東部の素掘溝の掘削。

8.4(金)

調査区東半部の素掘溝掘削。湧水が多いため、調査区南側の排水溝を再掘削。

8. 7 (月)
上層(素掘溝)完掘状況写真に向けての清掃作業。
8. 8 (火)
遺構面清掃後、上面遺構完掘写真を撮影。台風7号接近に向けて養生作業を行う。
8. 9 (水)
調査区北西部、柱穴等の遺構検出作業。
8. 10 (木)
調査区北西部の柱穴一段下げ。中世河道の断割。河道中央に流れと直交すると思われる方向で断割区を設定。
8. 11 (金)
中世河道の掘削。河道西端、調査区西壁沿いの位置に二つ目の断割調査区を設定。河道最上層から宋銭・元豊通宝が出土。お盆休みに向けての養生作業。
8. 17 (木)
お盆休み期間中の大雨のため、調査区が冠水、午前中は水抜き作業に従事。午後から河道の掘削を行う。
8. 18 (金)
調査区南壁の崩落部分の修復作業。河道の掘削。
8. 21 (月)
河道の掘削。河道南半で井戸(SE131)を検出。曲物の井戸枠が存在。河道埋没後の井戸であると判断できる。
8. 22 (火)
SE131の記録作業。北東部の遺構検出作業。
8. 23 (水)
調査区北東部の中層遺構検出状況を撮影。井戸、土坑などが存在。遺構同士に重複関係あり。調査区北西部の区画溝は河岸に並行する位置に掘られている。
8. 24 (木)
河道の掘削。河道から木製品が出土。
8. 25 (金)
河道の掘削。竹製笛が出土。写真撮影後、取り上げを行う。SX138・139の土器出土状況を写真撮影。SD140の掘削開始。
8. 28 (月)
SD140の掘削。北半部を完掘。SD140は南端で西に屈曲することを確認。SX141の西半部を半掘し、土層断面を記録。SX138・139内の土器の取り上げ後、完掘状況を撮影。調査区北東部では区画溝から河道へ向かう溝2条を確認。排水目的の溝か。
8. 29 (火)
SX141土層断面記録後、完掘。完掘写真撮影。SD145・146、SD140との接続部付近に畦を設定、断面記録。SD145は掘り直しが行われている。SX148の半掘。河道の掘削。
8. 30 (水)
SD145・146の掘削。SD145屈曲部で河道断割区を広げ、断面確認。SD145は河道がある程度埋没後に掘られている。河道の掘削。SX148完掘、記録作成。
8. 31 (木)
SD145の掘削。SD145・146西半部の写真撮影。SE149検出状況写真撮影。
9. 4 (月)
SX150の半掘開始。SD145の掘削。SX151の半掘、土層断面写真を撮影。
9. 5 (火)
SX151完掘写真撮影。SE149の断面写真撮影。SX150の掘削。雨天の為、午前中で作業終了。
9. 6 (水)
SX150北半部掘削後、断面写真撮影。南半部の掘削へ進む。南半部の底面で落ち込みを確認。SX145・146の断面記録後、完掘。調査区東・南側の排水溝の肩部掘り直し。
9. 8 (金)
SX150の完掘、記録作業。SD144の完掘状況記録作成。その後、SD144下に台状に残っていた河道埋土を掘削。空掘(中層遺構完掘状況)に向けて表面清掃開始。なお、河道および柱穴群の調査は撮影後も継続する。
9. 11 (月)
中層遺構完掘状況写真撮影に向けての清掃作業。
9. 12 (火)
空掘に向けての準備作業。午前11時より20分程度、ヘリコプターによる空中写真撮影および測量。午後から中層遺構完掘状況の写真撮影。
9. 14 (木)
前日の降雨の為、遺構面の再清掃を行った後、中層遺構完掘写真の追加撮影。

9. 15 (金)
中層遺構完掘写真の撮影。バルコン設置作業。
台風接近に備え、調査区周辺の養生作業。
9. 19 (火)
SE149の半截。河道の掘削を継続。柱穴の断削。
9. 20 (水)
SE149の土層断面記録作成。柱穴群の断削と断面記録作成。河道の掘削。
9. 21 (木)
河道の掘削。河道下層部から呪符木簡出土。
SE149完掘に向けて掘削を進めたところ、南半部で新たに曲物の井戸枠が出土、写真撮影。柱穴群の断削と断面記録作成。
9. 22 (金)
河道の掘削。SE149東南部の曲物井戸枠の図面記録作成。柱穴群の断削と断面記録作成。
9. 25 (月)
調査区北西部の平坦部で下層遺構（古墳時代か？）の遺構検出作業を行う。河道の掘削。
9. 26 (火)
河道の掘削。河道の西端部付近はほぼ完掘したが、それ以东は更に砂層が存在するが湧水が多く、崩落の恐れがあるため掘削を取り止めにする。調査区北西部、下層遺構検出作業。
9. 27 (水)
調査区北西部、下層遺構検出状況写真撮影。
SD230 検出状況を写真撮影。
9. 28 (木)
調査区北西部、遺構平面図作成。調査区北東部の河道下層部分の掘削。
9. 29 (金)
調査区北西部、遺構平面図作成。河道掘削。
10. 2 (月)
河道掘削。木簡出土。
10. 3 (火)
河道掘削。大群東側で杭と横板を組み合わせた木組み遺構を検出。
10. 4 (水)
河道の掘削。柱穴の断削、断面記録。
10. 10 (火)
河道の掘削。SD230の掘削。
10. 12 (木)
河道の掘削。SD230の掘削。上層（褐色粘質土）と下層（灰色粘土）に分けて遺物取り上げ。
10. 13 (金)
河道の掘削。SD230の掘削。
10. 16 (月)
河道の掘削。河道はさらに下層に続くが、調査区の制約の為、ここで掘削を取り止める。
10. 17 (火)
完掘写真撮影に向けての清掃作業。
10. 18 (水)
完掘写真撮影に向けての清掃作業。
10. 19 (木)
完掘写真撮影。
10. 20 (金)
引き続き下層遺構完掘写真撮影。河道大群の断面写真撮影。調査区北・西壁の土層断面写真撮影。
10. 23 (月)
調査区北・西壁土層断面記録作成。
10. 24 (火)
下層遺構の記録作成。河道内の木組み遺構の記録作成。河道断面記録作成。
10. 25 (水)
下層遺構の記録作成。
10. 26 (木)
柱穴の記録作成。
10. 27 (金)
重機による埋め戻し開始。
10. 30 (月)
器材撤収。重機埋め戻し。
10. 31 (火)
重機埋め戻し。
11. 1 (水)
重機埋め戻し。
11. 2 (木)
重機埋め戻し、終了。現地での作業が全終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は磯城郡田原本町・北葛城郡広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。新堂遺跡の所在する橿原市新堂町は、橿原市域の西辺沿い中央付近に位置しており、調査地点から西に数百mほど移動すると大和高田市域に至る。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から東南東に約2kmの地点には名勝大和三山のひとつ、畝傍山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中部に向かって、おおむね南から北に向かってなだらかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の上面標高は約64～65mである。調査地から東に約600mの距離には曾我川が、西に約1kmの距離には葛城川が、いずれも北流している。曾我川は龍門山地西部に、葛城川は金剛山地に源流をもつ。調査地一帯は現在、この二つの河川の間位置する微高地となっている。しかし、河川的位置も時代と共に大きく変化しており、かつては調査地近辺にも河川が存在していたことが現地形の観察や発掘調査によって明らかとなっている（詳細は次項）。

調査地は北西の新堂集落と南東の東坊城集落の間に位置する耕作地帯であったが、近年は京奈和自動車道建設を筆頭に造成工事が進められており、かつての景観は今まさに大きく変化しつつある。『大和国条里復原図』による調査地の小字名は「角田（すみだ）」である。

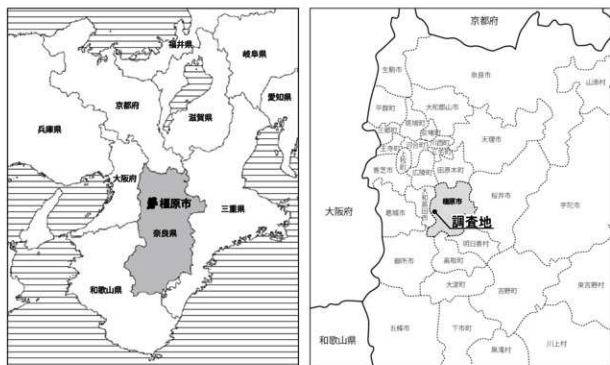


図1 調査地位置図

第2節 歴史的環境

橿原市の西部から南西部にかけての地域は、従来、遺跡があまり確認されていない地域であったが、京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、路線沿いに新たな遺跡が多数発見されている。路線沿いからさらに周辺への遺跡の広がりが想定される調査成果も挙げられている。得られた成果は主に縄文時代以降の各時代にわたり、奈良盆地南西の低地部における遺跡の様相が大幅に更新されたとと言える。調査地周辺は近年の開発行為によって遺跡地図が次々と書き換えられつつある地域である。

調査地の含まれる新堂遺跡の周辺に目を向けると、北に曲川遺跡、南に東坊城遺跡が所在する(図2)。これらの橿原市域の西部に位置する遺跡は、曾我川と葛城川に挟まれた平地に立地し、南北約2.0km・東西約0.8kmの範囲で南北に並ぶ。なお、京奈和自動車道路線沿いから東西に離れた地域については、現在のところ調査例に乏しく実態は不明である。しかし新堂遺跡の西方一帯など、遺物散布地は複数確認されており、今後、遺跡の範囲がさらに広がっていく可能性も高い。以下に、これらの遺跡の調査成果を軸に調査地周辺における各時代の様相に触れる。

調査地周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始めるのは、縄文時代後期以降のことである。曲川遺跡では晩期中葉から末葉にかけての土器棺墓が約80基検出されている。これは西日本有数の規模である。他、貯蔵穴や住居跡などの遺構も確認されている。新堂遺跡では遺構の数こそ限られるものの土器棺墓や貯蔵穴、流路に伴う水場遺構などがあり、後期から晩期にかけての遺物も出土している。一方、東坊城遺跡では縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土する河川や晩期の土坑の存在が確認されている。遺物については後前半に遡る土器も含まれる。京奈和自動車道沿線でさらに南に目を向けると、川西根成柿遺跡や観音寺本馬遺跡では後期以降の遺構が確認されている。観音寺本馬遺跡では人工的に管理されたと想定される晩期のクリ林も検出されている。また、この周辺の遺跡からは前期および中期の遺物も出土している。

弥生時代には曾我川流域や葛城川流域においては、多くの遺跡の存在が知られている。京奈和自動車道沿線でも前期の大規模水田や環濠集落、中期の方形周溝墓群などが確認されている。その中には、新堂遺跡の一帯は比較的弥生時代の遺構・遺物が疎な地域であると言える。ただし竪穴建物や土坑などの弥生時代の遺構は少量ながら存在するため、完全な空白であるというわけではない。また、曲川遺跡の北部や土橋遺跡においては中期や終末期の周溝墓群も確認されている。

弥生時代末頃から古墳時代初頭になると、新堂遺跡周辺では遺構・遺物といった活動痕跡が増加し始める。新堂遺跡では、この時期の水田や竪穴建物、土坑、溝などが確認されており、遺構からの出土遺物量も多くなる。河川及びそれに繋がる溝(水路)に設置された井堰も存在し、積極的な土地開発に乗り出していることがうかがえる。遺構は古墳時代前期を通じて見られる。曲川遺跡では前期後半以降、曲川古墳群が形成されていく。曲川古墳群は墳丘が削平されたいわゆる埋没古墳で、一辺10~18mの方墳18基が検出されている。古墳の築造は中期後半にかけて続く。

古墳時代中期は、調査地周辺での活動が非常に盛んになる時期である。東坊城遺跡では1991年度に実施した店舗建設に伴う発掘調査において中期の大溝から土師器、初期須恵器、韓式系土器に加え、鉄滓・輪の羽口・砥石といった生産関連遺物や鑄造鉄斧が出土しており、以前から注目されてきた。近年の調査によって新堂遺跡と曲川遺跡からも陶質土器・韓式系土器を含む多量の土器や金属器生産

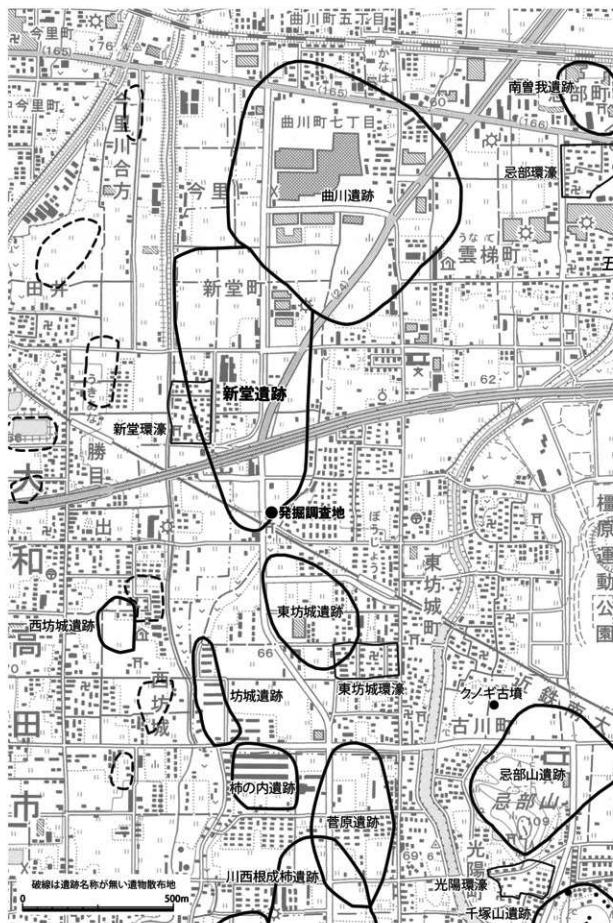


図2 調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は2019年度当初の内容)



図3 調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)

関連遺物、祭祀具などが多数出土し、渡来系遺物を多く含む中期（一部は数を減しながら後期まで続く）の集落が、この一帯に展開していることが明らかとなっている。中期の遺構は土坑や河川が主であり、居住域を示すような明確な建物跡の存在は確認されていない。その一方で遺構からの遺物出土量は非常に多く、近隣に集落の居住域が存在する可能性は高いと考えられる。橿原市中央部の四条遺跡周辺や、飛鳥地域の遺跡などとともに、古墳時代の奈良盆地南部の集落における外来要素の受容過程を知ることのできる重要な地域と言える。

近年の新堂遺跡の調査成果を見ると、新堂遺跡の北西部で実施した発掘調査（橿教委 2016-2 次調査）で河道から中期前半に遡る多量の初期須恵器が出土し、注目を集めている。また、今回の調査地の北隣における発掘調査（橿教委 2002-2 次調査『新堂遺跡』、橿教委 2005-4 次調査『新堂遺跡Ⅱ』）においても古墳時代の河道および河岸沿いの土坑などから中期後半～後期前半を中心とする多量の土器などの遺物が出土している。

曾我川の下流域では古墳時代中期後半から後期前半にかけての大規模な玉作り遺跡である曾我遺跡が形成される。曾我川の上流、調査地から南南東に約 2 km の距離に位置する新沢千塚古墳群も、この時期に造墓活動の最盛期を迎える。より広域な視点に立っても遺跡の形成が非常に活発な時期と言える。

古墳時代後期後半頃から古代にかけての時期には、新堂遺跡周辺では遺構の存在が希薄になる。その後、再び遺構が多く確認されるようになるのは 12 世紀頃である。

新堂遺跡では京奈和自動車道建設による複数の発掘調査で 12～13 世紀にかけての遺構の存在が確認されている。遺構から出土する遺物の量も多い時期である。この時期の遺構・遺物は新堂遺跡の南部に特に多く、区画溝を伴う屋敷地や井戸、土坑といった遺構の存在や耕作地としての利用状況が明らかにされている。出土遺物としては多量の瓦器や土師器の他、輸入磁器の存在などが知られている。新堂遺跡の南端では 13 世紀頃に埋没したと考えられる河道（先述した現地表に残る旧河道跡と同一）の存在が確認されている。河の両岸が発掘調査で検出されており、検出地点での川幅は最大で約 60m に及ぶ。本書で報告する調査では、その北西岸を検出している。屋敷地や耕作地としての利用も、この河道との関係の中での変遷が窺える。河道は発掘調査で確認されているほか、条里地割の乱れ、また堤防状の高台として現地地形でも確認することができる（図 3 右下）。その痕跡は、南は大和高田市根成柿、北は橿原市曲川環濠付近までの範囲で追うことができる。また、新堂遺跡の北部においても河道沿いに 12 世紀代と考えられる建物群や井戸、土坑などの遺構の存在が確認されている。井戸出土の鬼面墨書土器といった特徴的な遺物も見られる。

このような平安時代末から鎌倉時代前半にかけての遺構は曲川遺跡と東坊城遺跡にも存在するが、量は新堂遺跡がもっとも多い。これ以降の時期は、曲川遺跡において室町時代の建物跡がわずかに検出されている程度で、他は耕作地としての利用が主となっていったようである。

なお、調査地は『大和国条里復原図』によると高市郡路西二十七条五里（葛下部二十七条一里）三十坪にあたる。

第三章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区の位置と形状

調査開始時点の調査地は道路用地として盛土造成が行われた状態であったが、それ以前は水田として利用されていた土地である。調査区は、その東西2枚分の水田にまたがる位置に設定されている。東隣是水田面より約1m高台の畑地であり、これは今回の調査で検出している中世河道の痕跡である。調査地のすぐ南隣には近鉄南大阪線が西北西-東南東方向に通る。

調査区の形状は工事敷地の形状に合わせて台形である。調査区東辺が他よりわずかに長いが正方形に近い形状で、東辺と西辺はほぼ南北方位に沿う。調査区の規模は、南北長26~32m・東西長31~32m・面積900㎡を測る。

調査の手順

上層遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。調査区の北西隅には遺構面下にまで及ぶ現代の攪乱があり、これも重機掘削作業と並行して除去を行っている。調査地は全体に遺構面付近からの湧水量が多く、遺構面保護のため調査区壁面沿い四周に人力によって排水溝を掘削している。

詳細は後述するように中層遺構の調査に必要な掘削作業・記録作業の量が多く、調査期間内にすべてを十分に行うことはできていない。中層遺構のうちピットの調査については主要なものの掘削及び記録作業に限定し、並行して残る調査を進めている。

遺構名

遺構種と遺構番号は、その種別を示す通有の2字のアルファベット、数字の順で組み合わせて記録・報告している。遺構番号は遺構全体を通して1から順に付与している。主として遺構を認識した順に番号を付与しており、遺構面や時期との対応関係は無い。遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っているが、遺構に対する認識の変更や番号の重複などの理由で本報告段階で一部、変更や追加を行った遺構が存在する。それらの遺構については、各遺構の項でその旨を明記している。

写真撮影

調査写真の撮影は各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の土層断面や遺物の出土状況など、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。

撮影の際に使用したフィルムは、主に4×5インチサイズの白黒フィルムとカラーポジフィルムである。また、バックアップ用に35mmサイズの同フィルムを使用している。

第2節 基本層序

基本層序は以下のとおりである。以下に示す各層の状況は、主として調査区北西部において確認できる内容である。残る範囲では中層遺構に属す中世の河道によってIV層以下が消失し、河道埋土が厚く堆積している。各層序の上面は概して平坦であるが、周辺地形と同様、南から北に向かってわずかに低くなる傾向にある。

基本層序

- I層：水田耕作土（現代。上面高は標高約64.1～64.2 m。厚さ約0.2～0.4 m。調査開始時に上面を厚さ0.1 m程度削平しており、図4・5はその後の状態を記している）
- II層：旧耕作土（近世以降の耕作層。床土。上面高は約63.9～64.0 m。厚さ約0.2～0.4 m）
- III層：旧耕作土（13世紀以降の耕作層。上面高は約63.6～63.7 m。厚さ約0.2～0.3 m）
- IV層：遺構基盤層（上面が上層・中層・下層遺構面。弥生時代以前の自然堆積層。上面高は約63.3～63.6 m。厚さ約0.1～0.5 m。調査区西辺付近には存在しない）
- V層：地山（上面高は約63.1～63.4 m）

図4・5に調査区北壁および西壁の土層断面を示している。調査区南壁および東壁については、全体が河道の埋土であり、調査上の安全面の問題もあって詳細な記録は行っていない。

I層（図4-1・2層、図5-1～3層）上面が現代の水田面にあたる。褐灰色砂質土・黒褐色粘質土からなる。上面の標高は約64.1～64.2 mである。調査区の北西隅には耕作土直下から掘り込まれた現代の廃棄土坑攪乱が存在し、その一部は掘削がV層中にまで及ぶ。

II層（図4-3層、図5-4層）は近世以降の耕作層であると考えられる。出土遺物として近世の陶磁器片を含むがその量はごくわずかで、量的にはIII層以下に由来する中世以前の遺物片が多数を占める。黄褐色粘質土、浅黄色砂質土からなる。

III層（図4-4～10層、図5-5～12層）は13世紀以降の耕作層であり、主として中世のうちに堆積したと考えられる。いわゆる素掘り耕作溝の埋土もここに含まれる。褐灰色粘質土・砂質土、黄灰色砂質土、暗灰黄色土、灰黄色粘質土などから成る。III層直下に存在する河川堆積層に由来すると考えられる5mm程度までの砂礫層を一定量含む。上層遺構である耕作溝は、III層中およびIII層上面から掘り込まれたものも存在する。

IV層（図4-33～35層）は弥生時代以前の堆積層であると考えられる。IV層中から遺物は出土していない。IV層上面が後述する上層・中層・下層遺構の各遺構検出面となる。遺構検出面の標高は約63.4 m付近である。調査区北壁断面では部分的ながら約63.5～63.6 mにIV層の存在を確認できるが、調査区内の大部分の範囲においては後世の耕作活動等によってさらに削平を受けている。なお、調査区西辺沿いの一帯には削平を受けたためかIV層が存在せず、V層上面において遺構検出を行っている。

V層（図4-36・37層、図5-29・44・45層）は弥生時代よりも古い堆積層である。遺物を含まない、いわゆる地山層である。上面の標高は約63.1～63.4 mである。IV層直下が黄褐色～灰黄色粘土層で、その下に青灰色系の粘土～シルト質層が厚く堆積している。

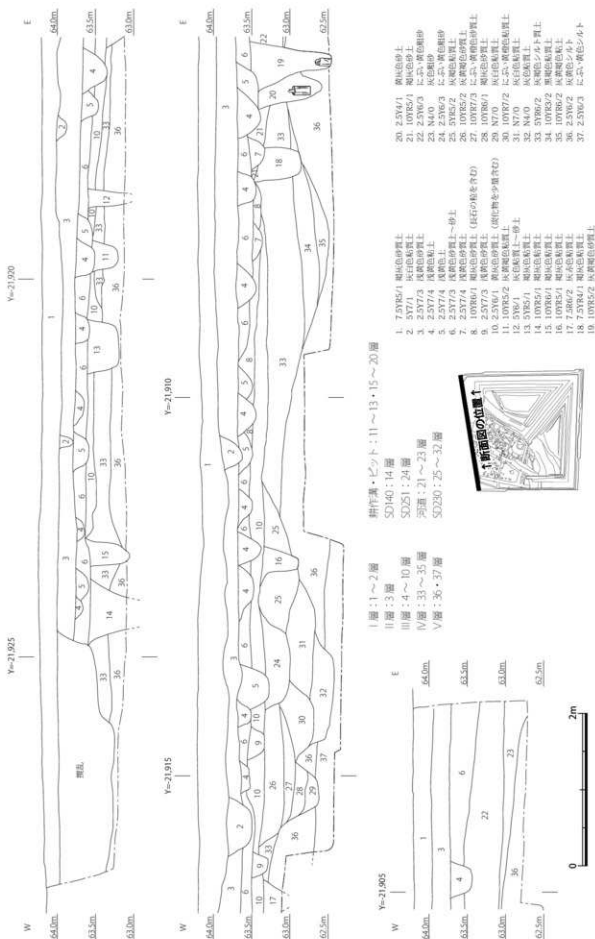


図4 調査区北壁 土層断面 (S = 1/50)

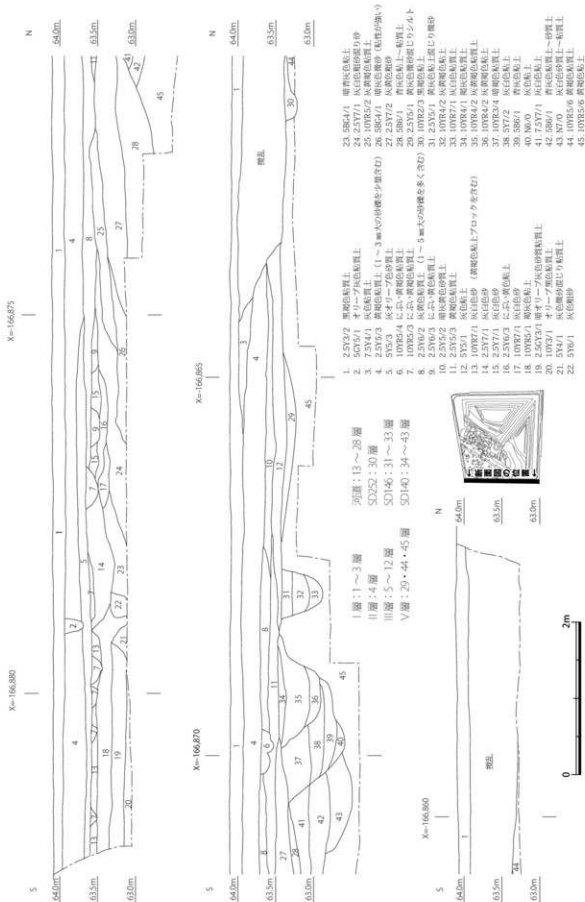


図5 調査区西壁土層断面 (S = 1/50)

第3節 遺構

遺構は大きく3時期に分けて認識され、便宜上、上層遺構・中層遺構・下層遺構としてまとめられる。いずれも検出面はIV層上面であるが、上層遺構の耕作溝群の一部にIII層中ないしIII層上面から掘り込まれた溝が存在する。

上層遺構は13世紀以降の耕作活動に伴う遺構群である。中層遺構は11～13世紀前半の遺構群である。河道と河岸沿いに築かれた区画溝や掘立柱建物などから成り、今回の調査の大部分を占める。下層遺構は弥生時代から古代にかけての遺構である。以下に上層から順に詳細を述べる。

上層遺構 (図6・7)

上層遺構は耕作活動によって形成されたと考えられる遺構群で、いわゆる素掘り耕作溝と井戸1基が存在する。時期は13世紀以降で、中世の範囲に収まると考えられる。それぞれの溝の規模は幅約0.2～0.4m、深さ最大約0.3mを測る。



図6 上層遺構配置図 (S=1/250)

耕作溝は調査区の中央部から西側にかけての範囲に密に存在し、調査区東側は数が限られる。また、東側に存在する耕作溝は、後述する比較的古い段階の一群が中心である。調査区東側は中層遺構に含まれる自然河道の埋没した地点であり、調査区内が埋没した後も調査区より東の位置を一定期間流れ続けていたと考えられる。その河道との関係において、調査区東側は土地利用の在り方に違いがあったものと推測される。

耕作溝は正方位（南北）に沿う一群と斜方向の一群が存在し、前者が新しい時期の遺構である。斜方向の一群は、さらに西北西—東南東方向の溝と北北東—南南西方向の溝とに分けられる。西北西—東南東方向の斜方向溝は、耕作溝群で最も古い一群である。斜方向溝は全体に座標に対して約 10°~20° 程度振れており、傾向として古い溝群ほど振れが大きい。

耕作溝からの出土物は、数的には中層・下層遺構に由来すると思われる土器の細片が主である。上層遺構の形成時期を示す遺物として、最も古い斜方向溝群から出土している 13 世紀代の瓦器片がある。

SE131 は調査区中央南寄りに位置する井戸である。平面形は円形で、規模は直径 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。曲物一段分を井戸枠として据え付けて利用している。調査区内の河川が埋没した上に構築された井戸であり、この深さでも湧水のあることが調査時にも確認できている。井戸枠内から 13 世紀前半の瓦器碗、羽釜、砥石がまとめて出土している。

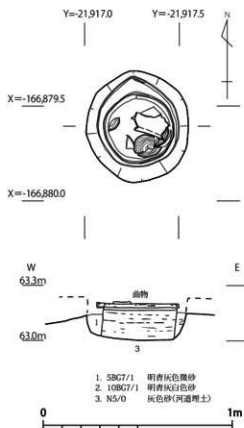


図7 SE131 平面・立面図 (S = 1/20)

中層遺構 (図8~23)

中層遺構は 11~13 世紀前半、とくに 12 世紀代を中心とする時期の遺構である。平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての時代にあたる。

調査区南半から東半にかけての広い範囲に、この時期の河道が存在する。調査区の北西部には河道沿いに築かれた区画溝を含む溝や掘立柱建物・塀、井戸などの遺構が存在する。これらの遺構からは土器をはじめとする遺物が一定量出土している。調査地北隣の敷地における発掘調査(榎教委 2005-4 次、『新堂遺跡Ⅱ』)では、これらと概ね同時期の屋敷地遺構群が検出されている。今回確認した遺構も、これらと関連性の強い遺構である可能性が高い。河岸に近接して存在する遺構上には、河道上層の氾濫層である微砂層が薄く堆積している状態であった。以下に河道を含む各遺構の詳細を述べる。

河道は調査区全体の約 4 分の 3 を占める範囲に広がる。左岸(西岸)を検出している。幅約 23 m 分を検出しており、さらに東側へと広がることを確認している。周辺に残る地割の乱れなどを考慮すると、河道幅約 50 m 以上にはなると推測される(図3・63)。調査区内での河岸ラインは、上流側(南西)では東西方向に近く、調査区中央付近で南西—北東方向へと緩やかに屈曲する。河道の掘り下げ

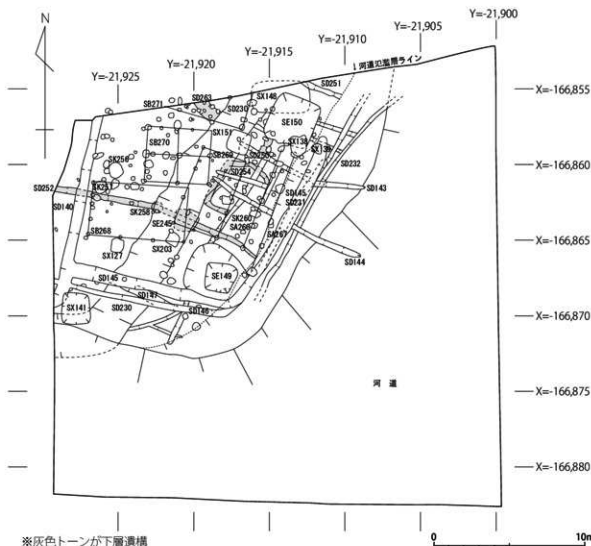


図8 中層・下層遺構配置図 (S = 1/250)

は検出面から約3mの深さを測る。それ以下の範囲については大量の湧水があり、調査区保護および安全確保のために掘り下げを止めている。また、調査区南東隅から調査区中央付近を結ぶ位置に河道断面記録用の大畦を設定している(図13)。河道の埋土は黄灰色・灰色・オリーブ灰色系の砂層～粘土層からなり、堆積は河道1層～河道4層の四段階に大きく分けられる。河道各層の堆積時期は、それぞれの出土遺物から、河道1層が13世紀前半、河道2・3層が12世紀後半、河道4層が12世紀中頃であると考えられる。河川堆積であり各層の土質にも大きな差異が見られるわけではないため、遺物取り上げ時に層序の混同による若干の混入も考慮する必要はあるが、概ね上記認識の時期変遷で大過無いと考えられる。なお、各層とも最終堆積時期よりも古い段階の遺物も一定量含んでおり、河道4層の場合、11世紀末頃から12世紀中頃の土器が出土している。出土遺物の種類は、中世に属す土師器、瓦器、須恵器、磁器、木製品(木製人形・木簡・下駄など)、温石、砥石、硯、宋銭のほか、古代の土師器や須恵器、古墳時代の須恵器や埴輪なども存在している。調査区内における河道の最終堆積である河道1層は、河岸が最も西に位置した時期よりも約2～3m東へ後退した位置に広がっている。深さは1m程度と浅く、緩やかに堆積したと考えられる微砂～粘質土層が中心である。調査範囲内においては、河道が緩やかに埋没しつつ東へと位置を変えていくことが確認できる。河道2層

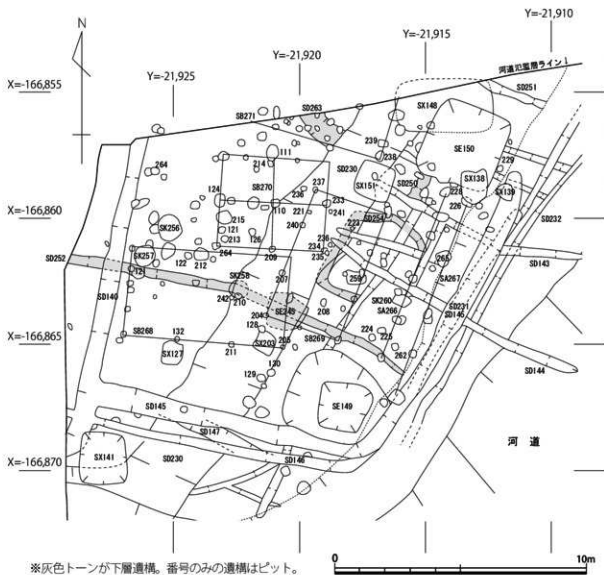


図9 中層・下層遺構配置図 調査区北西部拡大 (S = 1/150)

は、河道の範囲が最も広がった時期に堆積しており、その上層は薄く西側へと広がっている（図8・9の河道氾濫層破線は、その最も広がった範囲を図示している）。河道が最も広がった時期には、それ以前に河岸に存在していた一部の遺構が削平されている一方、SD145のように河道2層の堆積後に構築された遺構も存在している。図13に示す23層は、河道2層の最上層部分にあたるが、河川の氾濫層であるのか、あるいは河岸周辺の整地層であるのかは判別が難しい。河道3・4層は遺構検出面一約1m以下の範囲に厚く堆積している。堆積状況から河道1・2層の時期と比べて流水の多い状態であったと推測されるが、遺物の出土状況に大きな差異は見られない。調査区の中央部、河岸が蛇行する屈曲点にあたる付近で木組み遺構を検出している（図10・11）。木組み遺構は河岸斜面に据え付けられており、層序としては河道2層中に含まれる。平面的な規模は約1.8×1.5mを測る。構造は長さ1m、直径0.05m程度の本杭を3列に打ち込み、その間に長さ2m弱の横材を2列分挟み込み形である。横材の向きは河岸と並行する。この横材を段として利用する階段状の足場ないし作業場であったと考えられる。河道の中央部付近からは大型の木桶が出土している（図12）。河道3層上半部からの出土である。木桶の規模は長さ約1.9m、幅約0.25m、厚さ約0.2mを測る。丸太か

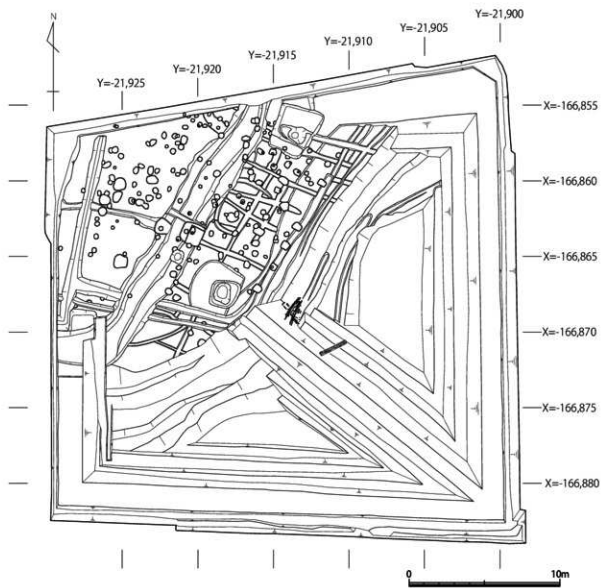


图 10 中層・下層完掘状況図 (S = 1/250)

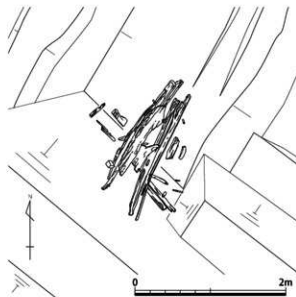


图 11 河道内 木組み遺構出土状況図 (S = 1/50)

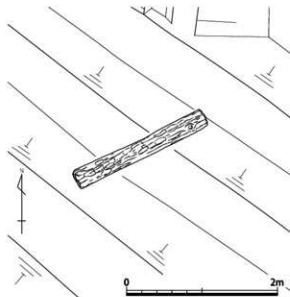


图 12 河道内 木桶出土状況図 (S = 1/50)

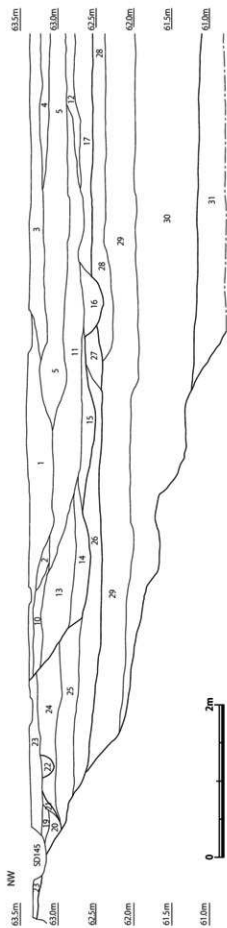
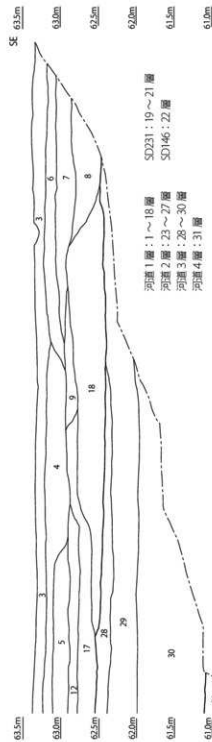
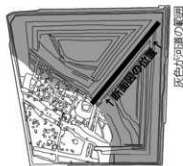


図 13 河道土層断面図 (S = 1/150)



河道 1 層 : 1~18 層 SD231 : 19~21 層
 河道 2 層 : 23~27 層 SD146 : 22 層
 河道 3 層 : 28~30 層
 河道 4 層 : 31 層

1. 10987/3 灰色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
2. 2594/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
3. 594/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
4. 7593/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
5. 7594/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
6. 939/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
7. 934/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
8. 934/2 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
9. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
10. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
11. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
12. 10987/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
13. 10987/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
14. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
15. 1097/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
16. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
17. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
18. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
19. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
20. 934/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
21. 1094/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
22. 2594/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
23. 2594/2 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
24. 598/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
25. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
26. 2598/2 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
27. 598/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
28. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
29. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
30. 2597/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)
31. 593/1 赤色土 (1~5m 水の浸透を多く含む)

ら削り出された一木構造で、断面の形状は内面はコの字状であるが外面は木材の丸みが残るU字状である。上流から流されてきた可能性もあるが、同様の大型木は他に出土しておらず、今回の調査地近辺で使用されていたものが投棄された可能性もある。

河道以外の遺構には区画溝を含む溝、井戸、土坑、掘立柱建物・堀、ピットがある。以下に遺構種ごとに詳細を述べる。遺構の時期や河道との前後関係については個別に述べることとする。

検出した溝の中には、いわゆる区画溝として理解されるものが存在する。SD140・145・146・147・231がこれに該当する。これらの溝は河岸沿いおよび調査区西辺沿いに位置し、土坑やピットの大部分は区画溝の内部に存在する。詳細は次に述べるが、区画溝の時期は12世紀後半から13世紀前半である。区画溝からは完形およびそれに近い瓦器碗や土師器皿が一定量出土している。

区画溝SD140は調査区西辺北半沿いに位置し、南北方向から北で東にやや振れる。溝の南端部で西側に屈曲する。規模は幅約0.9～1.1m、深さ約0.5～0.6mを測り、断面形状は上半部がやや開くU字状を呈する。溝の底面は南側に向かって低くなる。土師器、瓦器、須恵器が出土している。時期は12世紀中頃～13世紀初頭頃である。

区画溝SD145は河岸沿いの位置にL字状に伸び、敷地の南辺および東辺を画す溝であると考えられる。幅約0.4～0.6m、深さ約0.15～0.25mを測る。断面形状は弧状だが地点によっては台形状に近づく。SD145は西端部でSD140に接続する。出土遺物には土師器、瓦器、須恵器、鉄滓がある。時期は12世紀後半～13世紀前半である。SD145とほぼ重なる位置に、先行する区画溝SD231が存在する。SD231の掘り直しがSD145であると考えられるが、その間にSD146・147が掘られていることが断面で確認できる。なお、SD231は調査時には断面で確認できたのみであり、出土遺物はSD145の中に含まれている(図42～44)。

区画溝SD146はSD145の南～東、河道寄りの位置に掘られている。SD145と同様に調査区中央部付近で北東に向きを変えると想定されるが、河道やSD145との重複により詳細は不明である。溝の西端はSD140を越えて西側へ続いている。規模は幅約0.4～0.8m、深さ約0.25～0.35mを測る。断面形状はU字形を呈する。出土遺物には土師器、瓦器、須恵器、鉄滓がある。時期は12世紀後半～13世紀初頭である。

区画溝SD147はSD145とSD146の間に位置し、溝の向きは両区画溝とやや異なる。SD145・146よりも古く、SD231よりも新しい溝であることが土層断面で確認できる。幅約0.7m、深さ約0.25mを測り、断面形状は弧状を呈する。出土遺物は土師器と瓦器があり、時期は12世紀後半である。

これらを併せると区画溝は、西辺を画するSD140と河岸に接する南～東辺を画するSD145・146・147・231から成り、12世紀中頃から13世紀前半にかけて機能したと言える。河岸側の区画溝は、SD231→147→146→145の順に、位置をわずかに変えつつ掘り直しが行われたことが確認できる。SD140はこれらと併存したと考えられるが、最終的な埋没はSD145よりも早い可能性がある。

SD144は調査区北半中央に位置し、長さ約22.0m、幅約0.3～0.5m、深さ約0.2mを測る溝である。河岸と直行するような方向に掘られている。溝の東端部は河道埋土上に位置し、河道2層の堆積以降、13世紀前半の遺構であると考えられる。土師器と瓦器皿が出土している。SD143も同様の溝であると考えられる。

SD251は調査区北辺沿いに位置する溝である。SD144と似た方位、規模で掘られた溝であるが、

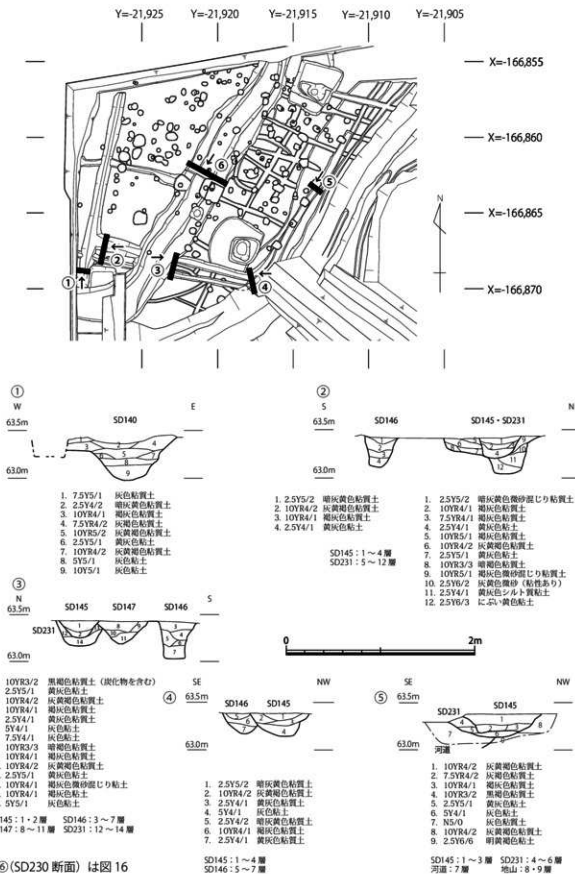


図14 区画溝土層断面図 (S = 1/40)

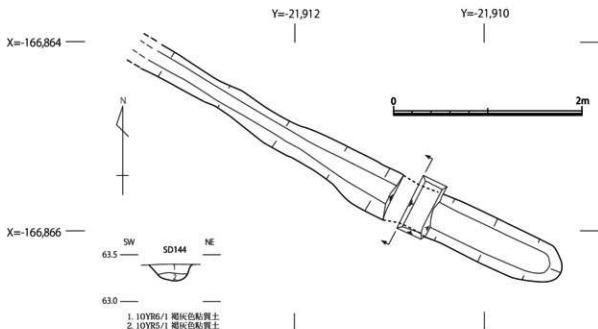


図15 SD144 東半部平面・断面図 (S=1/40)

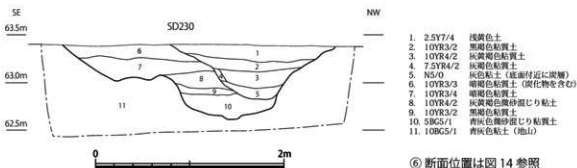


図16 SD230 断面図 (S=1/40)

河道2層より古い時期の遺構であり、12世紀前半の瓦器塚が出土している。

SD230は調査区北西部に位置する北東-南西方向の溝で、南端で西に折れ曲がる。幅約2.5~3.2m、深さ約0.7~0.9mを測る。先述した区画溝等の遺構群よりも古い段階の溝で、11世紀後半~12世紀前半の遺物が出土している。SD230は掘り直しが行われており、当初の断面形状は上半部の両側が大きく開く2段のU字状で、掘り直し後は深さ約0.6mの緩やかなV字状を呈する。溝の底面は北東に向かって低くなる。SD230よりも東側には、これと並行ないし直交する方向に掘られた浅い溝が複数存在する。いずれも出土遺物がほぼ無く詳細は不明であるが、位置関係や他の遺構との切り合い関係から、SD230と同時期の遺構である可能性がある。SD230からは11世紀後半~12世紀前半の土師器、須恵器の他に、古代の土器、古墳時代の土器や埴輪も一定量出土している点が特徴的である。検出段階でのSD230は下層遺構であると認識されており、中層遺構完掘状況写真撮影時には掘削が行われていない。なお、SD230は調査地北隣での発掘調査において検出しているSD157(稲教委2005-4次、『新堂遺跡II』)と同一の溝であると考えられる。

中層遺構には2基の井戸が存在する(SE149・150)。どちらも河岸からやや西の位置、区画溝の内側に近接する地点にあたる。SE149は調査区中央部、区画溝SD145の屈曲部内側にあたる位置に存在する。掘方の平面形は不整形で、直径3.0~3.6mを測る。深さは最大約1.8mを測る。中央か

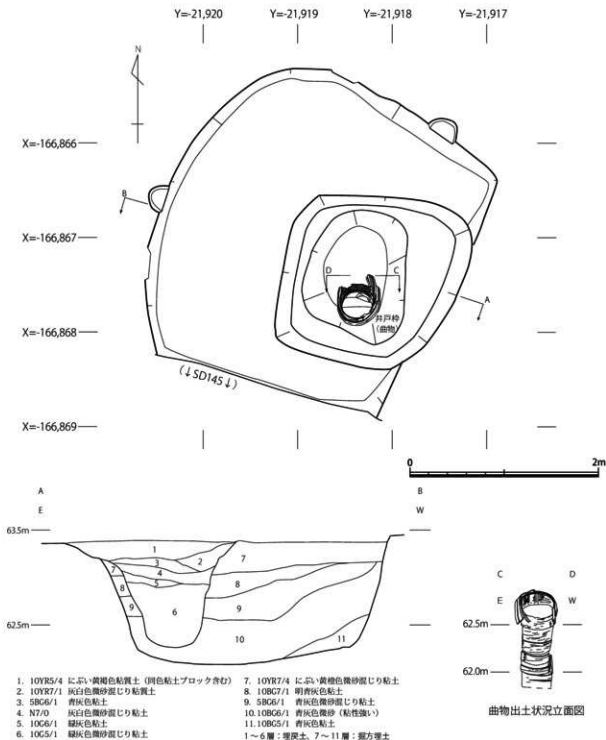


図 17 SE149 平面・断面図 (S = 1/40)

らや南東寄りの位置を深く掘り込んで曲物を利用した井戸枠を据えている。曲物は7段分が出土している。なお、図17の遺構断面図は調査時の認識違いにより井戸枠から外れた位置での断面となっており、調査の流れとしては土層断面記録後の完掘作業段階で井戸枠を検出している。枠周辺は最終的に埋め戻しが行われている。井戸枠内および埋め戻し土からは土師器、瓦器、砥石が出土しており、最終的に13世紀前半に埋められたと考えられる。掘方埋土からは少量の土師器皿片が出土している。構築時における区画溝SD145との明確な時期的前後関係は不明であるが、概ね同時期に利用されたものと考えられる。

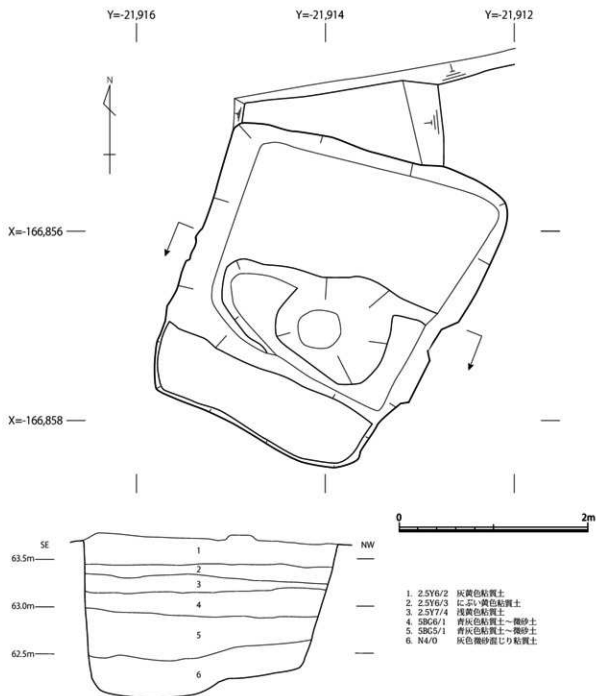


図 18 SE150 平面・断面図 (S = 1/40)

SE150 は調査区北辺中央に位置する井戸である。掘方の平面形は一辺約 2.5～3.5 m の方で、深さは約 2.0 m を測る。掘方中央部の底が一段低くなっており、井戸枠が存在していたと推測されるが抜き取られており遺存していない。出土遺物は少なく、わずかに土器の破片が出土しているのみである。重複関係をもつ遺構との関係から、時期は 12 世紀後半であると考えられる。なお、北側で重複する SX148 は SE150 よりも古い遺構であるが、調査時の認識違いにより、SX148 の掘り下げを先に行っている。また、図 18 に示す土層断面図の位置は、井戸枠があったと想定される中心部分からやや北に外れた地点にあたる。

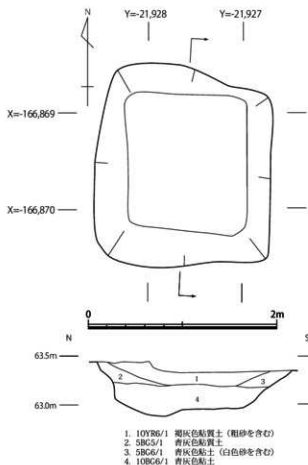


図19 SX141 平面・断面図 (S = 1/40)

区画溝内の範囲には複数の土坑状遺構が存在する。機能が特定可能なものは限られるが、一部にはいわゆる廃棄土坑を含むと考えられる。SK256 および SK257 は調査区北西隅付近に位置する円形土坑である。直径約 0.6~0.7 m、深さ約 0.3 m と同様の土坑が 2 基、近接して存在する。SK260 は直径 0.4~0.7 m の不整形円形土坑である。断面形状は砲弾形で、深さ約 0.5 m を測る。埋土上層からは炭化物とともに 11 世紀後半の瓦器塊が出土している。

SX127 は区画の南西隅付近に位置する不整形土坑である。直径約 0.9~1.2 m、深さ約 0.2 m を測る。中央部がやや落ち窪む形状である。土師器の細片が出土している。

SX138 および SX139 は調査区北半中央に位置する不整形な落ち込みで、SX138 は SE150 上に存在する。直径最大約 1.2 m、深さ約 0.05~0.1 m の浅い落ち窪みで、土

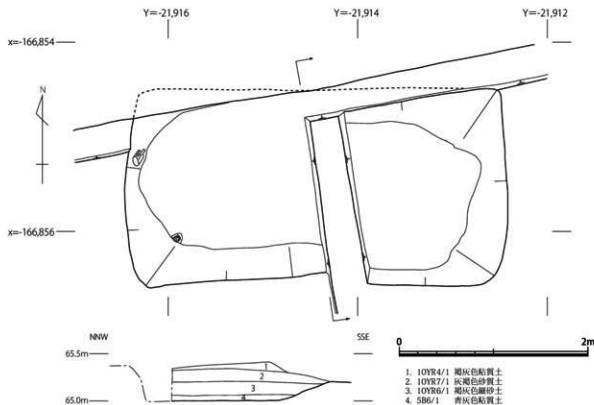


図20 SX148 平面・断面図 (S = 1/40)

師器皿と瓦器埴・皿がまとめて出土している（図版 13）。大部分が破片状態での出土であるが、完形もしくはそれに準じる状態に復元できるものが多く含まれる。時期は 12 世紀末頃であると考えられる。

SX141 は調査区西辺沿い中央に存在する方形土坑である。区画溝の範囲外にあたる位置である。概ね方位に即した形状で、南北 2.1 m × 東西 1.8 m を測る。断面形状は台形で深さ最大約 0.5 m を測る。土師器、瓦器の他に硯や複数の木製品も出土している。時期は 12 世紀末頃であると考えられる。

SX148 は調査区北辺沿い中央に位置する方形土坑である。平面形は東西 3.9 m × 南北 2.0 m と東西に長い長方形である。深さは約 0.3 m を測る。土坑の西半には土坑斜面裾付近に杭が打ち込まれている。土師器皿、瓦器埴、木製工具が出土している。時期は 11 世紀後半である。

SX151 は一辺約 1.2 m 角の方形土坑である。深さは約 0.1 m を測る。出土遺物には土師器と瓦器がある。出土遺物や周辺遺構との重複関係から 12 世紀中頃以後の遺構であると考えられる。下層に位置する SD230 埋土に由来するものと考えられる古代の土師器片も出土している。

SX203 は調査区中央からやや西に位置する不整形な落ち込みである。直径約 1.1 m、深さ約 0.6 m を測り、中央部が深く落ち窪む。12 世紀後半の瓦器や土師器が出土している。

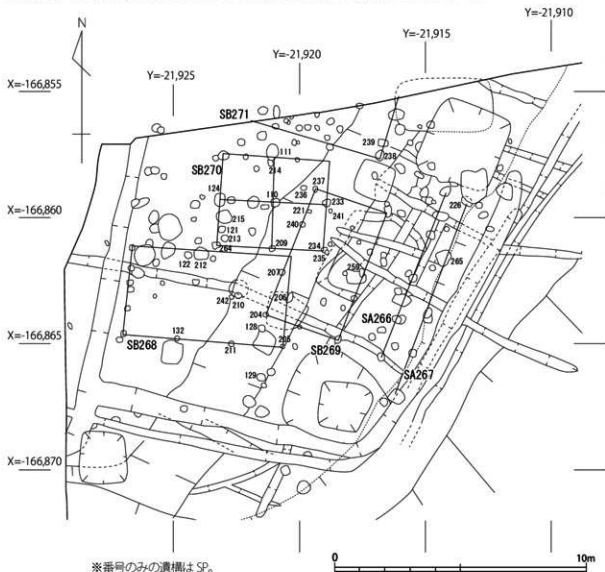


図 21 中層遺構 掘立柱建物・塀・ピット配置図 (S = 1/150)

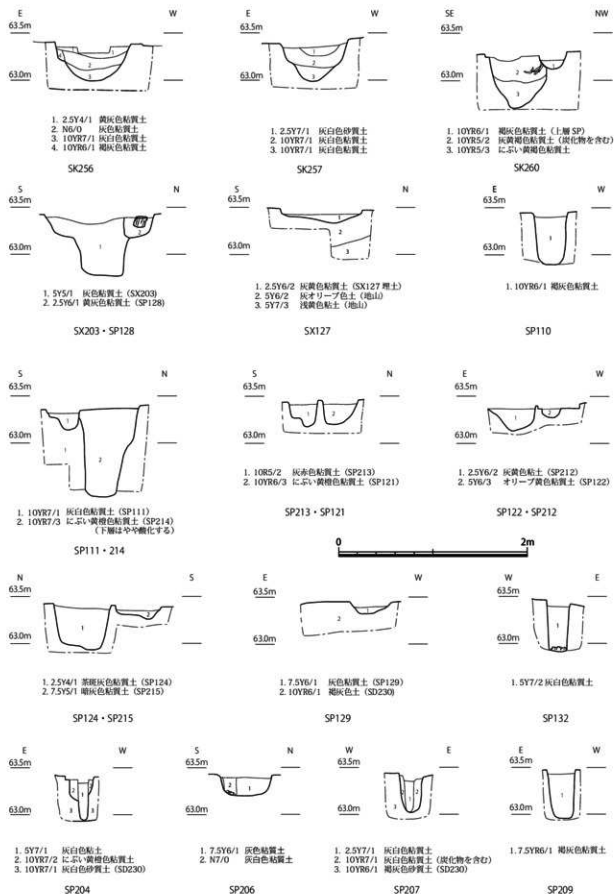


図 22 中層遺構 SK・SX・SP 土層断面図① (S = 1/40)

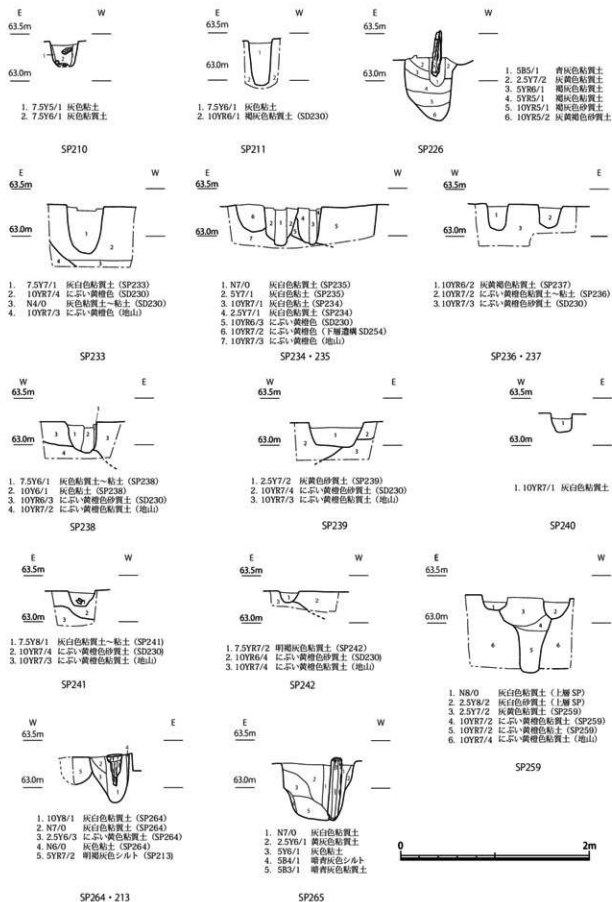


図23 中層遺構 SK・SX・SP土層断面図② (S = 1/40)

調査区北西部では約 150 基のピットを検出しており、この中に柱穴を一定量含む。大多数は先述した区画溝の範囲内に収まる位置にある。個々のピットの調査については、調査期間等の制限によって詳細な調査検討、記録作業を十分には行えていない。断面の記録を行ったピットについては図 21～23 に示している。

これらのピット群の中から、掘立柱建物 4 棟と掘立柱塼 2 条が復元できる。建物同士は重複する位置にあり、建て替えが行われたことがうかがえる。建物を構成する柱穴同士の直接の重複関係が無いため、建物相互の時間的前後関係は不明である。また、柱穴から出土している遺物も詳細時期が不明な土器細片のみであり、時期の特定は難しい。

SB268 は区画南西隅に位置する桁行 3 間 (6.3 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の側柱建物である。柱穴の掘方は直径約 0.3～0.5 m の不整形円形を呈する。建物の方位は正方位に近いが、若干のずれが認められる。なお、SB268 よりも南側にはピット、とくに柱穴と考えられるものはほとんど見られない。

SB269 は桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (3.0 m) の側柱建物である。桁行の柱間は両側とも中央の間隔がやや広い。建物の方位は北で東に振れる。東側に位置する SA266 および SA267 や区画溝 SD145 東半部とは概ね並行する位置関係にあり、同時期に存在した可能性が指摘できる。ただしこれらの遺構の方位は基本的に河岸の向きとの関係の中で決まったものと考えられるため、方位の一致が必ずしもセット関係を示すわけではない点には注意が必要である。

SB270 は SB268 の北隣に位置する桁行 2 間 (4.2 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の総柱建物である。柱穴掘方は一辺約 0.3～0.7 m の不整形円形で、他の建物より全体に大きい傾向にある。建物の方位は SB268 と同様に正方位からややずれる。

SB270 は調査区北辺沿いに位置する桁行 2 間以上 (4.3 m 以上) × 梁行 1 間以上 (1.8 m 以上) の建物である。SB269 と直交する位置関係の建物であると考えられ、その南東角を検出している。

SA266 と SA267 は区画内の東寄りに位置する掘立柱塼であり、河岸および区画溝 SD145 と並行する方位で構築されている。SA266 は 4 間分 (長さ 7.0 m) を検出した直線塼である。SA267 は SA266 から東に約 1 m の地点に位置する直線塼で、5 間分 (長さ 8.0 m) を検出している。

下層遺構 (図 8～10・24)

下層遺構は弥生時代、古墳時代、奈良時代の遺構である。それぞれの時代の遺構は相互に時間的な連続性は無く、中層遺構とした遺構群よりも古い時代の遺構を一括して下層遺構として扱っている。遺構は弥生時代および古代の溝、古墳時代の井戸と土坑がある。

SD252 は弥生時代終末期の溝である。西北西-東南東方向に伸びる直線的な溝で、東半部はやや南側に向きを変える。幅約 0.3～0.7 m、深さ約 0.15 m を測る。長さは約 14 m 分を検出しており、西は調査区外へと続き、東は河道によって削平されている。弥生土器が出土している。

SD254 は平面形が一辺約 3.5 m のコの字形を呈する弥生時代終末期の溝である。西辺・南辺は直線的であるが、北辺はやや湾曲する。幅約 0.3 m、深さ 0.1～0.2 m を測る。弥生土器が出土している。

SD263 は調査区北辺沿いに位置する弥生時代の溝である。幅約 0.9～1.1 m、深さ約 0.05 m を測る浅い溝である。完形の石躰 2 点と弥生土器の細片が出土している。

SE245 は中層遺構 SD230 の下層で検出した古墳時代中期後半の井戸である。掘方の平面形は一辺約 1.3～1.6 m の不整形な方形を呈する。深さは約 1.9 m を測る。井戸枠を抜き取った後に埋め戻さ

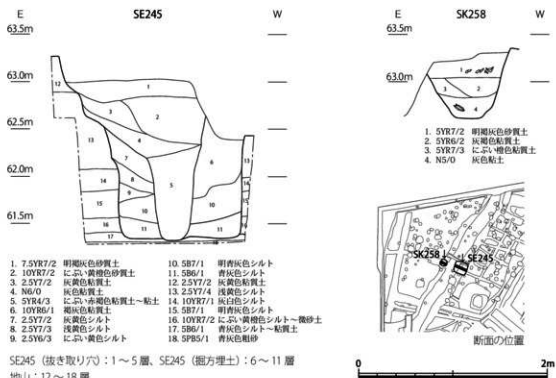


図 24 下層遺構土層断面図 (S = 1/40)

れている。抜き取り穴の規模から、井戸枠は小型のものを使用していたと推測される。抜き取り穴埋土および掘方埋土から土師器と須恵器が出土している。

SK258 は SE245 の西側に位置する、同じく古墳時代中期後半の土坑である。直径約 1 m の円形土坑である。深さは約 0.75 m を測り、断面形状は台形を呈する。土師器と須恵器が出土している。遺物の出土量が比較的多く、廃棄土坑である可能性が考えられる。

SD250 は中層遺構 SE150 の南に位置する奈良時代の溝である。幅約 0.4 m、深さ約 0.1 m を測る。長方形の土坑である可能性もある。土師器と須恵器が出土している。

第4節 遺物

出土した遺物には、土器（弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・磁器）、埴輪、土製品（土馬）、石製品（硯・釜・砥石）、石器、木製品（人形・笛・下駄・槌・木簡など）、銅銭、鉄滓などがある。

出土遺物の量は遺物コンテナ約110箱分である。弥生時代以降の各時期の遺物が出土している。量的には11世紀～13世紀前半の遺物が大半を占める。これらは中層遺構に対応する時期の遺物であり、当該期の遺構からの出土も多い。この時期の出土遺物には完形品およびそれに準じる資料も多い。13世紀より後の遺物は、上層遺構や基本層序Ⅰ～Ⅲ層中から細片がわずかに出土しているのみであり数は非常に少ない。古代以前の遺物については、下層遺構から出土したものが一定量存在するが、後世の遺構に混ざる形で出土しているものも多い。

今回報告を行う遺物は、概ね全体像の分かる遺物や、出土遺構・層序の時期や性格をよく表わすと考えられる遺物、そのほか特徴的な遺物を中心に抽出して図化を行ったものである。中層遺構の河道や区画溝群のように出土遺物量が多い遺構については、報告外にも一定量の土器細片などが存在している。

以下に各遺構、層序ごとに出土遺物について述べる。

上層遺構（図25・26）

上層遺構は13世紀以降の遺構で、耕作溝群および井戸からなる。図化可能な遺物は中層遺構および下層遺構に由来すると考えられる遺物が大部分を占める。耕作活動によって巻き込まれたものと考えられる。

耕作溝から出土した遺物（図25）のうち、42・43の瓦器埴は最も古い耕作溝の一群である西北西―東南東方向の溝からの出土である。他の遺物は正方位に沿う一群の溝からの出土である。耕作溝群より下層に位置する河道の最終堆積層からは13世紀前半の遺物が出土しており、上層遺構の形成はそれ以降の時期となる。

耕作溝（図25）

1～20は手づくね成形の土師器皿である。

1～16は小皿で、復元口径8.0～9.6cm、器高1.2～1.6cmを測る。内外面にナデ調整を施し、口縁端部は丸くおさめる。10は外面に底部との境に強いナデ調整による稜が存在する。1・6は底部に粘土紐痕が認められる。1は底部に黒斑が存在する。色調は橙色（2・3・8・11・13・16）と浅黄色（1・4・5・7・9・10・12・14・15）に大別される。

17～20は1～16よりも大型の一群（以降、大皿とする）である。復元口径12.9～14.6cm、器高2.0～2.4cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。外面は底部との境に稜が存在し、17・20は特に明瞭である。色調は浅黄色を呈する。口縁端部は丸く収めるもの（17）、面取りを施すもの（18）、上方につまみ上げるもの（19・20）がある。

21は土師器環であり、古代の遺物であると考えられる。復元口径18.2cm、器高4.5cmを測る。口縁は端部が外反し、外側に深い稜が見られる。内面に放射状のミガキを施すが、磨滅が激しい。外面

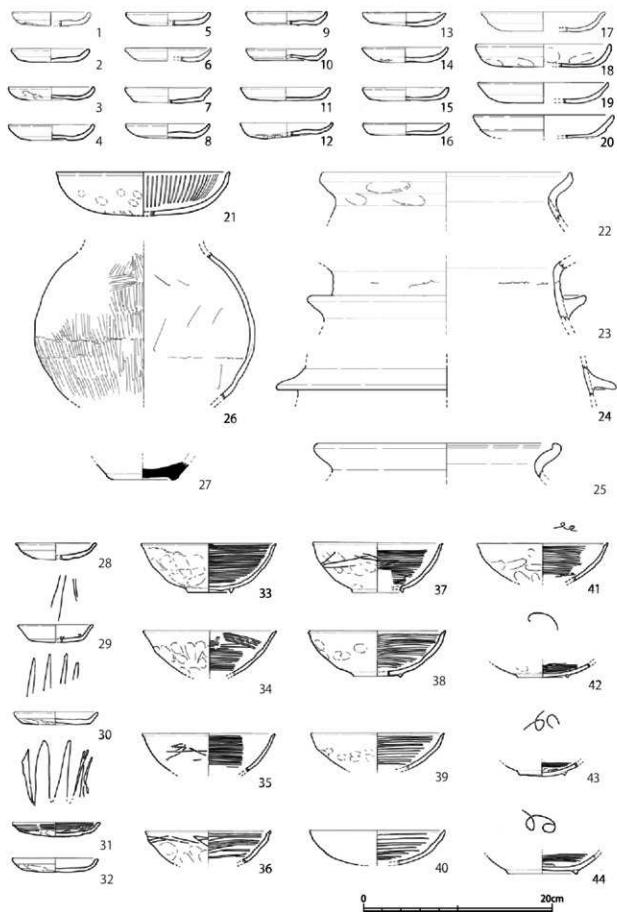


图 25 上层遺構 耕作溝群出土 土器 (S = 1/4)

に指頭痕と黒斑が存在する。底部にはケズリ痕が残る。

22～25は土師器羽釜である。22は口縁部から頸部にかけての破片で、復元口径26.1cmを測る。頸部はくの字形に屈曲し、口縁端部は軽くつまみ上げる。外面は強いナデ痕が残る。23は頸部付近の破片で、鈎の復元径は29.6cmを測る。鈎はやや上向きで貼り付けられているが、体部とのナデ付けが甘く、一部に剝離痕が明瞭に残る。24は鈎の破片で、復元鈎径36.0cmを測る。鈎は下垂気味である。25は復元口径26.0cmを測る口縁部片である。裏である可能性もある。口縁端部は内側に折り返し、丸く収める。頸部内面の屈曲は丸みを帯びる。

26は土師器壺の体部である。わずかに下膨れの球形体部であると推測される。復元胴部径23.3cmを測る。外面にはハケ調整を施し、下半には黒斑が存在する。

27は須恵器壺ないし鉢の底部である。直径7.0cmの高台が付くが、高さは0.1cmと低く、断面形状も全体に丸みを帯びる。

28～32は瓦器皿である。28・30～32は口径8.4～9.2cm、器高1.3～1.6cmを測る。口縁部は開き気味に立ち上がる。口縁端部は28が外反気味につまみ出し、30～32は丸く収める。底部外面は未調整で成形時の指・掌圧痕が残る。30・31は見込みにジグザグ状暗文を施す。29は口径7.7cmとやや小型であるが、器高1.8cmと他と比較して深い形状である。口縁部は開き気味に立ち上がり、端部を外反気味につまみ出す。底部外面は指ナデで丁寧に仕上げられる。見込みにはジグザグ状暗文を施す。

33～44は、いわゆる大和型の瓦器碗である。口径13.2～14.3cm、器高4.7～5.3cmを測る。内面の圏線ミガキは隙間が空き、外面は上半にミガキを乱雑に施すものが多い。この中でも36・39・40は、より新しい時期のものであると考えられる。高台が遺存するものは、いずれも断面三角形である。時期は12世紀中頃から13世紀初頭が中心で、これは中層遺構においても遺物の出土量が多い時期にあたる。

SE131 (図26)

SE131は曲物一段分を井戸枠としており、井戸枠内から図26に示す遺物がまとまって出土している(図版8上)。瓦器碗(45～47)は全体の1～4割程度が欠けた状態で、羽釜(48)は上半部が大型の破片として、それぞれ出土している。

45～47は瓦器碗である。45は体部が開き気味に立ち上がる。口径14.5cm、器高4.3cmを測る。内面の圏線ミガキは上半の隙間が大きい。見込みには同心円状暗文が、圏線の延長上で施されている。高台は低い断面三角形で比較的丁寧に貼り付けられる。46は主に上半部に歪みが見られ、口径13.9～15.0cm、器高4.7cmを測る。内面の圏線ミガキは隙間が大きく、線の幅も広い。見込みに同心円状暗文を施す。外面は口縁部下付近にのみミガキを施す。47は口径14.3cm、器高4.9cmを測る。内面に粗い圏線ミガキを施した後、見込みに同心円状暗文を施す。高台は断面三角形で、この時期としては比較的しっかりした形状であるが、粘土のひび割れが多く剥落も多い。

48は土師器羽釜である。復元口径28.6cmを測る。口縁部はくの字形に屈曲し、口縁端部は内側に軽く折り返して丸く収める。鈎は比較的薄く、端部は上方に肥厚する。鈎先端部を除いた広い範囲に煤が付着する。

49は板状の砥石である。白色の砂岩製である。残存長7.6cm、残存幅5.2cm、厚さ1.9cm、重量

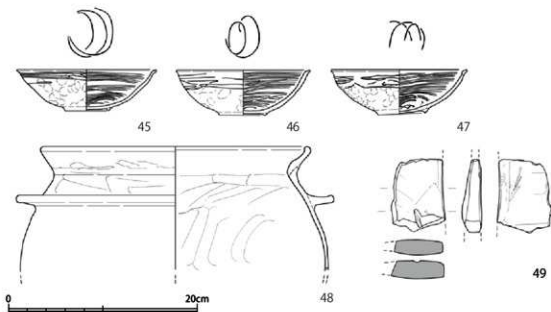


図26 上層遺構 SE131出土 土器・石製品 (S=1/4)

111.3 gを測る。利用面には細かな擦痕があり、うち一面には幅約0.6 cm、深さ0.2 cmを測る溝が存在する。

中層遺構 (図27～59)

中層遺構は11世紀～13世紀前半、とくに12世紀代を中心とする時期の遺構である。今回の調査では遺構・遺物ともに、この時期が最も多い。出土遺物は土師器の皿や羽釜、瓦器の埴と皿が最も多く、その他に須恵器や磁器、石製品、木製品、鉄滓などが存在する。また、下層遺構に由来すると考えられる古代の土器や土馬、古墳時代の埴輪や土器、弥生土器、石器なども一定量出土している。

出土地点としては、河道からの出土量が最も多い。その他にも区画溝や土坑、井戸から一定量が出土している。

河道 (図27～39)

今回の調査で最も多くの遺物が出土しており、量的には出土遺物全体の約半数を占める。出土遺物には土師器、瓦器、須恵器、磁器、土製品、石製品、木製品、銅銭、埴輪、弥生土器がある。

河道の堆積は河道1～4層の大きく四段階に分けられ、出土遺物も層別的に報告を行うこととする。河川堆積の性質上、遺物の取り上げ時の土層認識に若干の取り違えもあると考えられるが、時期的変遷は概ね捉えることができると言える。各層の最終的な堆積時期は、河道1層が13世紀前半、河道2・3層が12世紀後半、河道4層が12世紀中頃であると考えられる。ただし河道1層からも12世紀以前の遺物が一定量出土するなど、各層とも下層の遺物を多く巻き込むような形の堆積であったと考えられる。

河道1層 (図27～32)

河道の最終堆積層であり、出土遺物の量が最も多い。

50～149は土師器皿である。

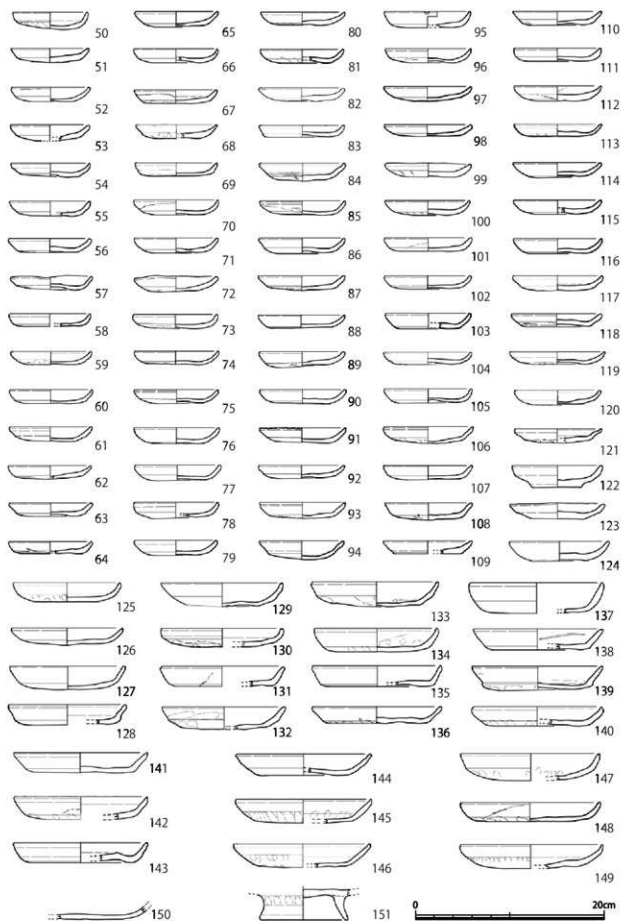


圖 27 中層遺構 河道 1 層出土 土器① (S = 1/4)

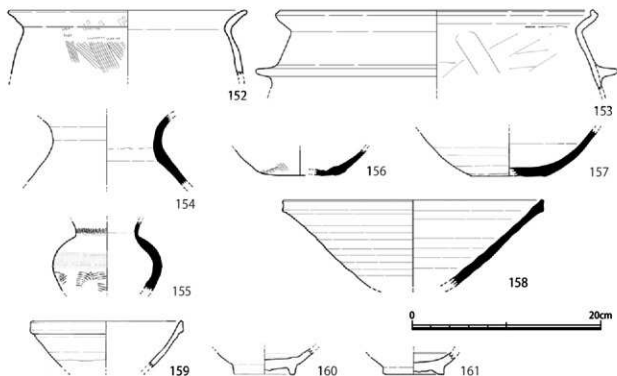


図28 中瀬遺構 河道1層出土 土器② (S=1/4)

50~121は手づくね成形の小皿である。復元口径7.8~9.8cm、器高1.1~1.9cmを測る。内外面ともナデ調整で仕上げる。外面には底部との境に強い稜をもつもの(50・53・54・57~60・67・71・73~78・83・86・87・93・94・104・110)が一定量存在する。口縁端部は丸く収めるものが最も多いが、面取りしているもの(52~54・57・61・70・75・85・86・91・93・94・96・99・106・117・118)や上方に引き上げるもの(66・69)もある。底部外面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残るもの(51・52・54・63・66・68・70・74・77・80・87・96・100・103~108・112~116・118・120)も多く存在する。灯明皿として利用されたと考えられる皿も存在する。立ち上がり部が黒化している102や、芯棒を置く凹みが口縁に存在する95がそれにあたる。91は口縁の約1/4の範囲に鋸歯状の刻みがあり、これも該当する可能性がある。色調は浅黄色が大半を占めるが、橙色を呈するものも全体の1/5ほど存在する。

122~124はロクロ成形の小皿である。底部には右回転の糸切り痕が顕著に見られる。復元口径9.4~10.5cm、器高1.8~2.4cmを測る。手づくね成形の小皿と比較して、器全体が厚く作られている。122は底部と体部の境が特に明瞭で、あたかも低い高台を付けたかのような形状である。124は内外面に煤が多く付着する。

125~149は手づくね成形の大皿である。復元口径11.2~14.8cm、器高1.8~3.1cmを測る。内外面ともにナデ調整で仕上げるのが基本である。口縁端部の形状は丸く収めるもの(126・127・129~132・134・136・138・139・143・144・147~149)、面取りを施すもの(125・133・135・141)、上方に引き上げるもの(128・137・140・142・145・146)がある。底部外面は指頭でナデているが、立ち上がり部分に指押さえが巡るもの(133・139)や製作時に使用したであろう敷物痕がのこるもの(148)もある。138の内面には回転ナデに伴って付いた深い傷がそのまま残る。147は内外面には大きな黒斑がある。色調は浅黄色と橙色に二分される。

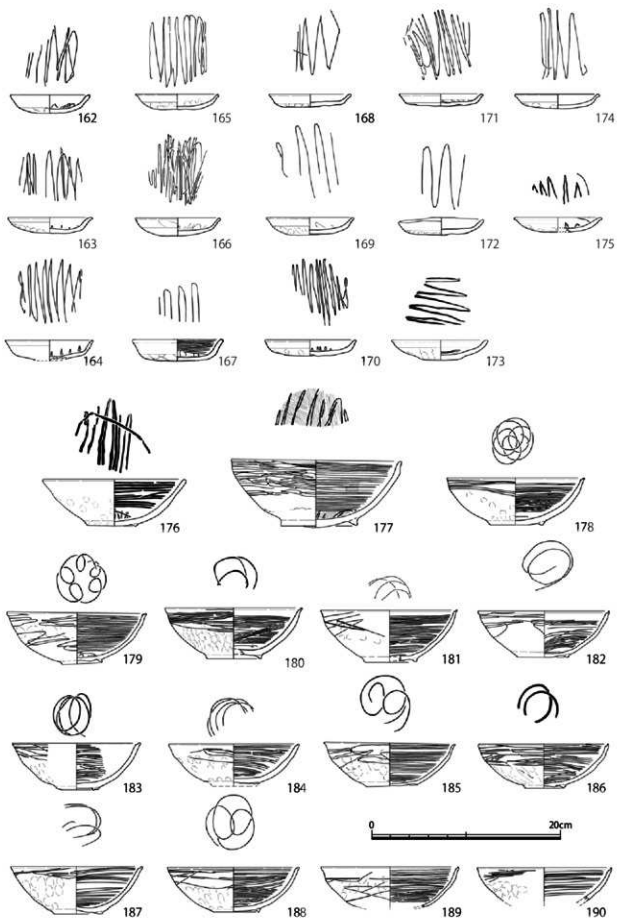


图 29 中层遗構 河道 1 層出土 土器③ (S = 1/4)

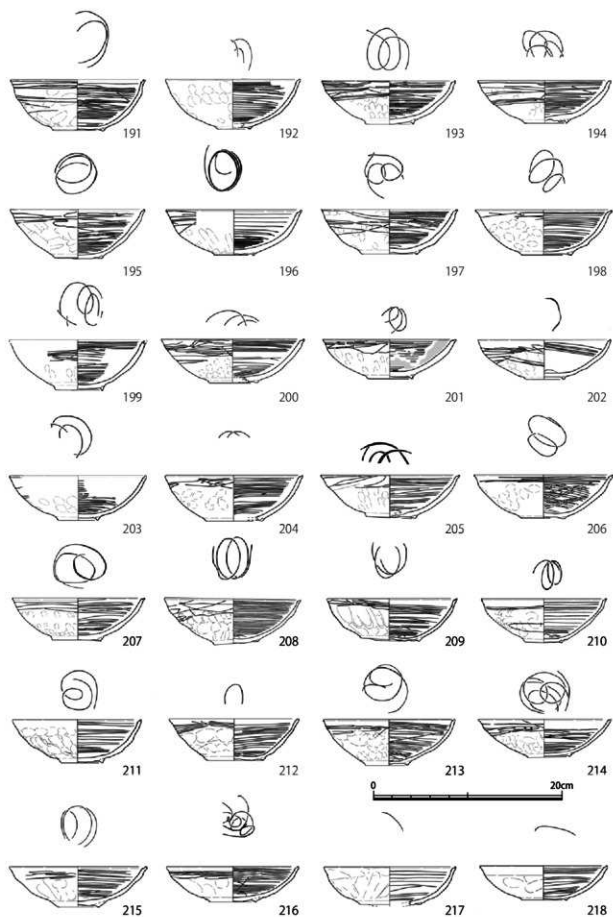


圖 30 中層遺構 河道 1 層出土 土器④ (S = 1/4)

150は土師器の大皿である。下半部の破片であるため全体像が不明であるが、口径15cmを超える可能性もある。内外面ともナデ調整を施す。151は土師器の台付皿の台部であると考えられる。底部径9.0cm、台部高2.8cmを測る。台部と皿部をナデで貼り付けており、外面には指頭痕が残る。

152は土師器甕の口縁部である。復元口径25.3cmを測る。口縁部は外反し、体部は長胴気味の形状であると推測される。体部外面はハケ調整を施す。153は土師器羽釜である。復元口径33.0cmを測る。口縁部はくの字形に屈曲し、端部は内側に折り返して丸くおさめらる。内外面全体に煤が付着する。

154～158は須恵器である。154は壺の頸部である。外反する短い口縁部をもつ。内面体部はケズリを施し、他の範囲はナデ調整で仕上げる。155は壺ないし甕である。外面と内面頸部、底部付近には自然軸が付着する。156は東幡系の鉢の底部である。外面底部は乱雑な糸切りである。体部は内外面ともにナデ調整を施す。見込み部分には同心円文が存在する。内面は使用により滑らかになっている。色調は他の須恵器より灰白色が強い。157は鉢の底部である。底部は糸切り後、粗雑なナデ調整で仕上げる。体部下半は丸みを帯びて立ち上がる。158は東幡系の鉢である。片口鉢であると考えられるが、口部分は遺存していない。復元口径27.2cmを測る。口縁部は直線的だが、ごくわずかに外反する。内外面ともに回転ナデ調整を施す。内外面ともに1～7mm大のガラス質黒斑が点在する。

159～161は磁器である。いわゆる輸入白磁である。159は白磁碗である。復元口径16.4cmを測る。口縁部は幅0.9cmのやや肉厚の玉縁をもち、その下に凹線を巡らせる。軸葉は外面下半には及んでいない。色調は灰白色を呈する。160は白磁碗の底部であり、底部径6.4cmを測る。見込みには蛇の目軸剥ぎが見られ、離れ砂も少量残る。内面は全面に、外面は高台の直上付近まで施軸されている。161は白磁碗の底部で、底部径6.3cmを測る。高台の外面は垂直に削り出し、内面は斜めに削り落とす形状である。内面の底部中央から約4.0cm外側に一条の圈線を巡る。内面は全体に施軸されているが、外面は遺存する範囲に軸葉は見られない。

162～175は瓦器皿である。口径8.3～10.0cm、器高1.3～2.2cmを測る。口縁部は開き気味に立ち上がり、端部はわずかにつまみ出す。見込みはジグザグ状暗文を施し、乱雑なものや折り返しの少ないものを含む。底部外面は未調整で、指・掌圧痕が残る。167は内面に細かな圈線ミガキが施される。167・169は他より器壁が厚い。168・171は他より平底気味である。172・173は全体に歪みが大きい。

176～225は瓦器碗である。

176は口縁端部を丸く取める和泉型瓦器碗で、口径15.2cm、器高4.8cmを測る。内面はやや隙間の空いた太い圈線ミガキである。見込みには平行線状暗文を施す。断面三角形の高台を雑に貼り付ける。外面のミガキは確認できない。

177は口径17.8cm、器高6.0cmの大型碗である。内面は圈線の隙間から施文前のハケナデの痕が鮮明に確認できる。見込みはジグザク状暗文を施す。断面台形で裾広がり的高台を丁寧に貼り付けるが、底部中央が突出しており座りはやや悪い。

178～225は大和型の瓦器碗である。口径13.0～14.6cm、器高3.6～5.4cmを測る。見込みに施される暗文は、179の連結輪状暗文と224のジグザク状暗文以外は、同心円状暗文である。時期は12世紀中頃～13世紀前半を中心とするが、一部に12世紀前半に遡ると考えられるものを含む。

226は瓦質土器の甕である。内面には体部と口縁部の接合痕が残る。口縁部は外向きに立ち上がると推測されるが上半部は失われている。体部外面には細かなタタキを施す。肩部には右肩上がりの

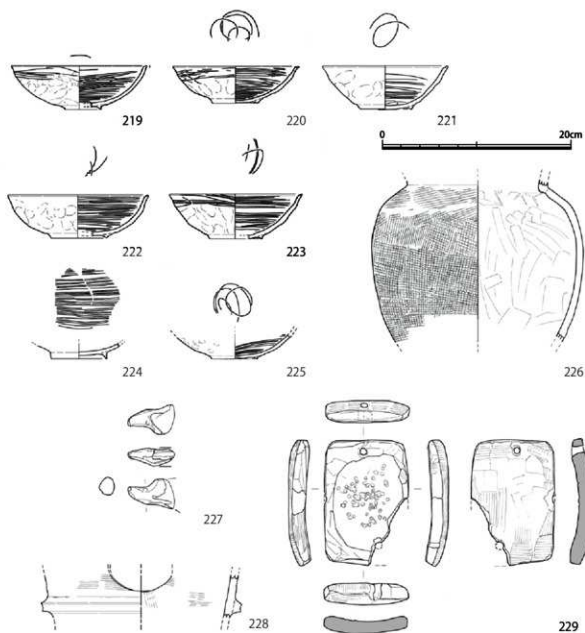


図31 中層遺構 河道1層出土 土器⑤・土製品・石製品 (S = 1/4)

平行タタキを、体部には平行タタキを格子状に施す。体部内面は強めのナデ調整で仕上げる。

227は土馬の頭部である。頭部から剥離したものと考えられる。両目は竹管状工具の刺突で表現されている。鬣の表現も見られる。

228は円筒埴輪である。円形のスカシ孔をもつ。突帯の断面は台形で、頂辺は窪む。外面には横ハケを施す。残存範囲に黒斑は認められない。時期は古墳時代中期であると考えられる。

229は滑石製の温石である。長さ13.2cm、幅8.8cm、厚さ1.0~2.2cmを測る。重量は約350gで、一部を欠くことから当初の重量は400g前後であったと考えられる。全体が湾曲する形状である。側面は面取りがなされるが、稜は全体に丸みを帯びる。内面には縦10.2cm、横7.6cmの窪みが存在し、窪みの中央付近には直径0.3cm大の刺突痕が多数存在する。また、上部中央と下部の二ヶ所に径0.9cmの穿孔も存在する。片側の孔の位置は、やや偏る。色調は黒灰色で、外面のほうが色が暗い。外面

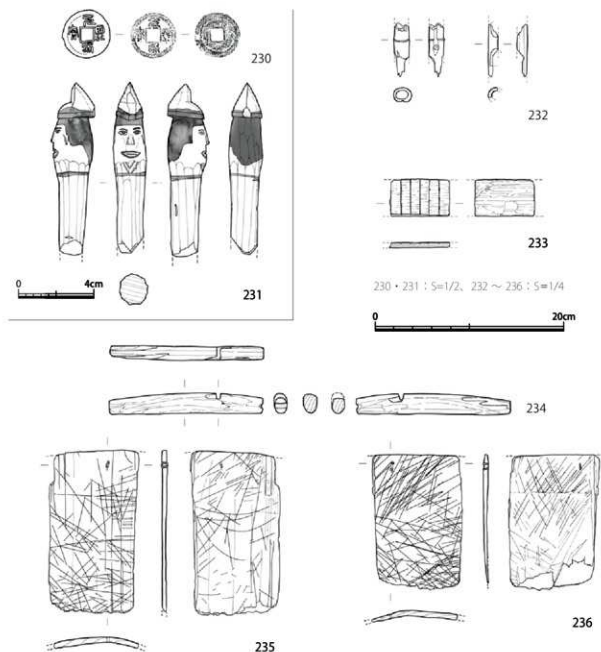


図32 中層遺構 河道1層出土 金属製品・木製品 (S = 1/2・1/4)

には加熱時に付着したと考えられる炭化物も見られる。鍋や硯からの転用品である可能性がある。

230は北宋銭・元豊通宝である。直径2.5cmを測る。表裏とも腐食が進んでいる。

231～236は木製品である。

231は木製人形である。烏帽子を被った男性の頭部であると考えられる。本品単体で成り立つのか、あるいは別の場所に挿入して完成品としたのかは不明である。高さ9.0cm、直径1.3～1.8cmを測る。棒状の柁目木材を削って首から上の形を作り出した後、髪・眉・目・鼻・口・髭・首下に墨入れを行って仕上げている。顎下の線は線は髭ではなく着物の襟である可能性も考えられ、その場合上半身を表現していることとなる。顔の前面および側面は、他の部分よりも細かな整形を施して滑らかに仕上げている。烏帽子は下部に墨入れを行った後に、上部を再度削って成形している。

232は竹製の筒状具であり、小型の横笛である可能性が考えられる。遺物の遺存状態が悪く細片

となっているため、相対的に状態の良い破片2点分を図化している。それぞれ直径約1.7cmを測り、人為的な切込みが確認できる。

233は残存長6.3cm、幅3.9cm、厚さ0.5cmを測る。薄板状木製品である。柁目材を利用し、片面には幅約1cm間隔で深さ0.1~0.2mmの切込みが並行して刻まれている。両端は切込み部分で割れており、当初はさらに長い板材であったと考えられる。

234は長さ16.3cm、直径1.5~2.2cmを測る棒状具である。形状から、紡績具である可能性などが考えられる。中央部が膨らむアーチ状に加工されている。中央からやや寄った位置に幅0.4cm、深さ0.6cmの溝状の切込みがある。両端付近の片面が磨滅している。板目取りで、木目は長軸方向に走る。

235は残存長17.2cm、残存幅9.0cm、厚さ0.7cmを測る板状製品である。端部近くに小孔が2つあり、部材を結束するためのものか、樹皮紐が小孔内に遺存している。桶などの一部である可能性も考えられる。両面に細かな切込みが乱雑に多数認められ、まな板として転用されたものと考えられる。板目取りで、木目は図の縦方法に通る。236も235と同様の板状製品で、残存長14.1cm、残存幅9.5cm、厚さ0.6cmを測る。同様の小孔、樹皮紐が存在する。

河道2層(図33)

237~246は土師器皿である。

237・238は口クロ成形の小皿である。底部には糸切り痕が存在するが、238は不鮮明である。復元口径8.6~9.0cm、器高1.5~1.6cmを測る。どちらも底部は厚い。色調は橙色を呈する。

239~244は手づくね成形の小皿である。復元口径8.8~9.8cm、器高1.2~1.8cmを測る。内外面ともナデ調整を施し、底部には指頭痕が存在する。243は外面に回転ナデによる強い稜がある。口縁端部は全体に丸く収めているが、243は面取りを施す。色調は243・244は灰白色、他は橙色を呈する。243は薄手だが胎土は緻密で堅牢な作りである。

245・246は手づくね成形の大皿である。245は復元口径12.6cm、器高3.0cmを測る深い形状であり、坏・埴に近い。246は復元口径15.8cm、器高2.0cmを測る薄く広い皿である。どちらも内外面ともにナデ調整で仕上げる。

247~251は瓦器皿である。復元口径8.4~9.4cm、器高1.5~2.5cmを測る。口縁部は開き気味に立ち上がり、口縁端部を外反気味につまみ出す。底部外面は未調整で、249~251には指・掌圧痕が残る。247・248は中央が上方に窪む。247の見込みは十字状に暗文を描いて区切り、各区画内に小さな連結輪状暗文を施す。248~251はジグザグ状暗文を施し、248は特に密である。

252~258は大和型の瓦器埴である。復元口径13.6~14.4cm、器高4.9~5.5cmを測る。内面の圏線ミガキはやや密であるが、外面のミガキは体部上半のみに粗く施されるものが多い。高台は断面三角形で比較的丁寧に貼りつける。見込みに施される暗文は、252・253が連結輪状暗文、255・257・258が同心円状暗文である。時期は12世紀後半と考えられる。

259・260は弥生土器である。259は蓋で、復元口径11.2cm、器高2.9cmを測る。つまみの頂点と紐穴の穿孔の位置は中心よりずれていると推測される。胎土は0.2cm大の砂粒を多く含む。表面は磨滅しており調整は不明である。260は甕の底部である。外面には斜め方向のタタキを施し、一部にミガキ状の浅い溝が縦に伸びる。内面は細かなハケ調整である。内外面に黒斑を有する。

261は用途不明の木製品である。約2cm幅の脚状の板に、厚さ約0.7cmの薄い天板が付くような形状である。天板には上方から直径1.7cmの孔がくさび状に2ヶ所に穿たれている。割り抜き式の下

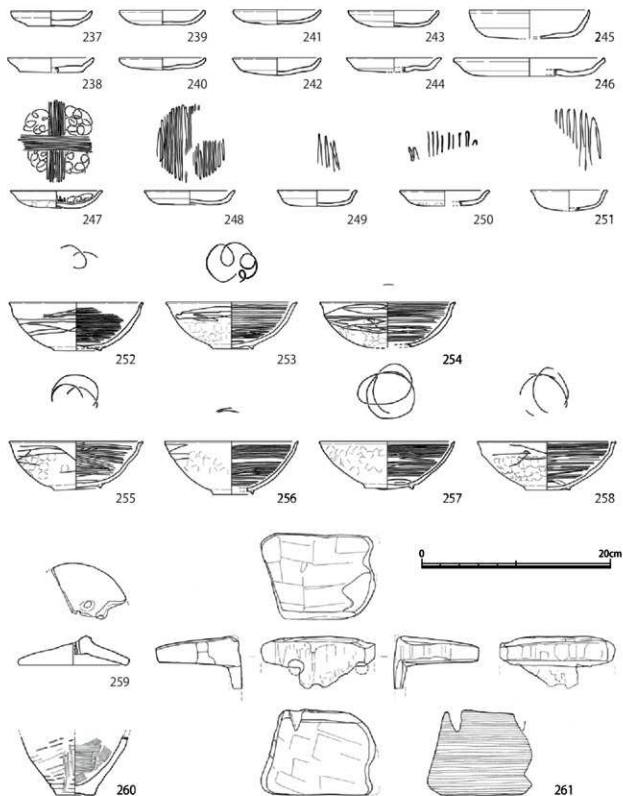


図33 中層遺構 河道2層出土 土器・木製品 (S = 1/4)

駄かとも思われるが、脚が約9 cmと高く、天板も脚より先に伸びないことから疑問も残る。

河道3層 (図34~36)

262~324は土師器皿である。

262~296は手づくね成形の小皿である。復元口径8.1~10.2 cm、器高1.2~2.3 cmを測る。この

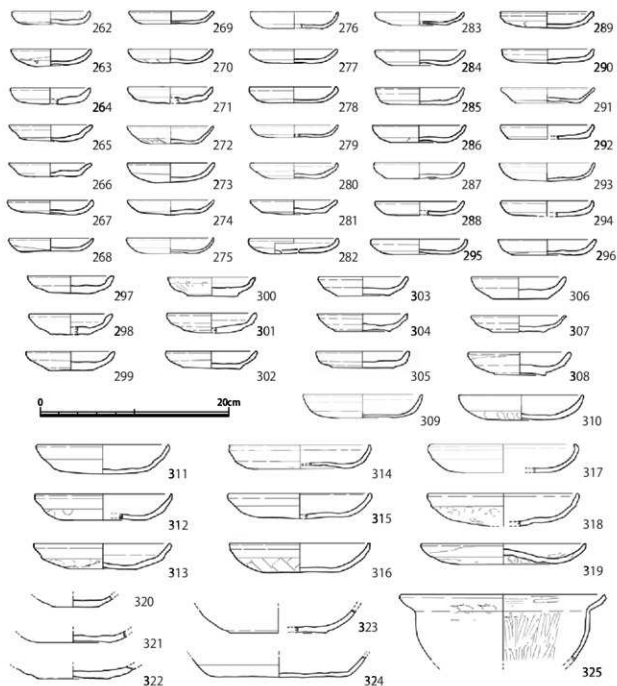


図34 中層遺構 河道3層出土 土器① (S=1/4)

うち 295・296 は口径が 10 cm を越えるやや大型であるが基本的な作りに差異は無く、ここに含むこととする。ナデ調整で仕上げ、底部外面には指頭痕が残る形が基本である。一部に外面の底部との境に強い稜を有するものが少数存在する (265・271・275・283・289・292)。266 は底部に指ナデと 0.8 cm 幅の板状のナデを併用する。277 は布目の痕跡が残る。272 は底部外面に粘土のひび割れが目立つ。282 は底部中央付近に焼成後の穿孔が存在する。293 は色調が淡赤灰色を呈し、他と様相が異なる。底部には複数の工具痕が残る。296 は底部外面に米粒大の圧痕が 5ヶ所に存在する。圧痕は底部中心から約 2 cm 離れた場所に放射状に並んでおり、欠損部分にも存在していたとすれば 8ヶ所程度になると考えられる。口縁端部は丸く収めているものが主で、面取りを施すもの (267・271・289・290・294)、上方に引き上げるもの (264・285) も存在する。色調は浅黄色と橙色が

同程度存在する。

297～308はロクロ成形の小皿である。底部には右回転の糸切り痕が明瞭に残る。復元口径8.8～10.8 cm、器高1.7～2.4 cmを測る。全体に厚手の作りであるが、302・307のように口縁部が薄いものも存在する。303は内面に筆で擦り付けたような形で漆が付着する。

309～319は手づくね成形の大皿である。復元口径12.3～17.4 cm、器高2.1～3.5 cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。317は口縁端部を内側に折り返す。色調は全体に淡赤灰色を呈する。318は全体の歪みが大きい。319は他と比べて器高が低く皿に近い形状であるが、底部中央は大きく盛り上がる。

320～324はロクロ成形の皿ないし坏の底部である。右回転の糸切り痕が残る。いずれもナデ調整で仕上げる。色調はいずれも橙色を呈する。324は大皿の底部である。底部径13.2 cmを測る。

325は土師器鉢である。復元口径21.8 cmを測る。口縁部は内湾しつつ外へ広がり、口縁端部は外側に小さな面をもつ。内面には細かなミガキを施す。

326・327は瓦器皿である。326は口径9.7 cm、器高1.6 cm、327は口径10.6 cm、器高1.6 cmを測る。見込みにはジグザグ状暗文を施す。326はやや厚手である。

328～340は瓦器壺である。

328は口縁端部を丸く収める和泉型の瓦器壺である。口径14.3 cm、器高5.1 cmを測る。内面は見込みにジグザク状暗文を施した後、やや粗い圏線ミガキを施す。外面は磨滅によりミガキが確認できない。断面方形の低い高台を貼り付ける。

329～340は大和型の瓦器壺である。329～335は全体に丸みを帯びた深い形状で、口径14.0～15.1 cm、器高5.1～5.7 cmを測る。内面はやや密な圏線ミガキを施し、外面は体部の2/3程度を磨く。高台は断面三角形を基本とするが、一部に台形に近いものも存在する。見込みの暗文は連結輪状暗文である。336～340は底部から直線的に開く、やや浅い器形で、口径14.2～15.0 cm、器高4.6～5.0 cmを測る。前者の一群と比べて内面の圏線ミガキの密度は疎で、外面のミガキは体部上半のみに施される。見込みの暗文は同心円状暗文である。時期は12世紀中頃～後半であると考えられる。

341は白磁碗の底部である。底部径6.4 cmを測る。高台内側は回転ケズリで掘り込まれているが深さは浅く、底部は分厚い。内外面とも底から2.5 cmの高さに一条の圏線が巡る。内面は全体が施釉されており、外面の残存範囲には施釉が及んでいない。見込み部分には、多量の離れ砂が付着する。色調はやや暗めの灰白色である。

342は須恵器甕である。復元口径17.5 cmを測る。口縁部は短く、上部が大きく外反する形状である。体部は、外面にはタタキ後カキ目を施し、内面には当て具痕が存在する。頸部には↑字状のヘラ記号がある。343は須恵器甕の体部である。体部最大径は上半部に位置し、復元径9.6 cmを測る。孔より下にはヘラケズリの痕が明瞭に残る。

344は円筒埴輪もしくは形象埴輪の円筒部である。突帯は破損しているものの幅約3.0 cm、高さ約1.5 cmと比較的大型であることが確認できる。

345～354は木製品である。345は長さ4.1 cm、直径2.5 cmを測る円柱状製品である。端部は丸く仕上げられる。詳細な用途は不明だが栓として利用された可能性などが考えられる。346は筆軸の可能性のある中空の筒状製品である。残存長2.9 cm、直径0.7 cmを測る。細枝の皮を剥いて磨いている。347は孔付釘である。残存長10.8 cm、幅1.0 cm、厚さ0.4 cmを測る。頭部上面は1.2 cm×0.8 cm大

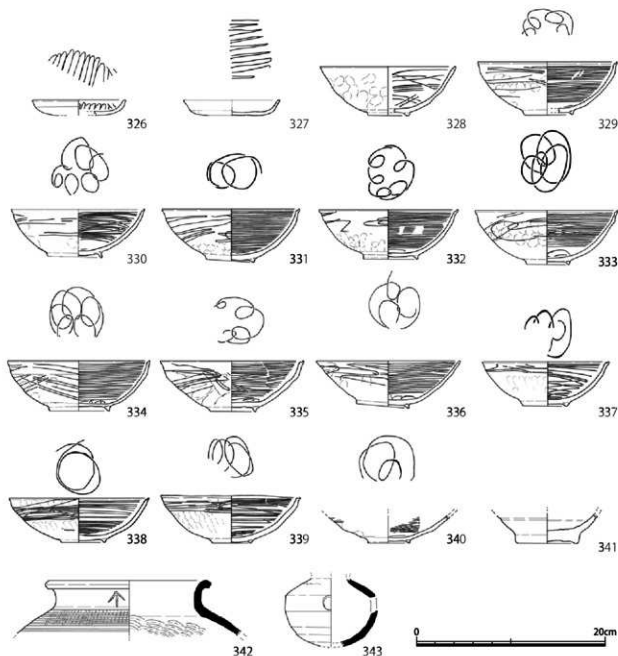


図35 中層遺構 河道3層出土 土器② (S=1/4)

の方形を呈する。頂部から6.8cm下に0.5cm角の孔を穿つ。348は鼓形の木製品で、木錘であると考えられる。残存長10.3cm、径2.7~4.1cmを測る。心持材を削り込んでくびれを作成している。端部は丸く仕上げる。349は燃えさしである。残存長17.4cmを測る。先端部のみが炭化している。350は板状木製品である。残存長20.7cm、幅6.4cm、厚さ0.6cmを測る。片側の長辺中央部に小孔があり、孔の中に樹皮紐が残る。折敷や曲物底板などの可能性がある。片面の一部に細かな切込みが見られる。まな板に転用されたものと思われる。板目取りで木目は縦方法に通る。

351~354は木筒である(図版39)。351は横方向に墨書した横材木筒で、各行に1~2字ずつ11行分が残る。見・則・番と推測される文字も確認できるが判別可能なものは少なく、記載内容については不明である。残存長22.3cm、残存幅5.8cm、厚さ0.5cmを測る。352は下端が欠損するものの、他は原形を留めると考えられる。残存長14.1cm、幅2.5cm、厚さ0.5~0.7cmを測る。表側に

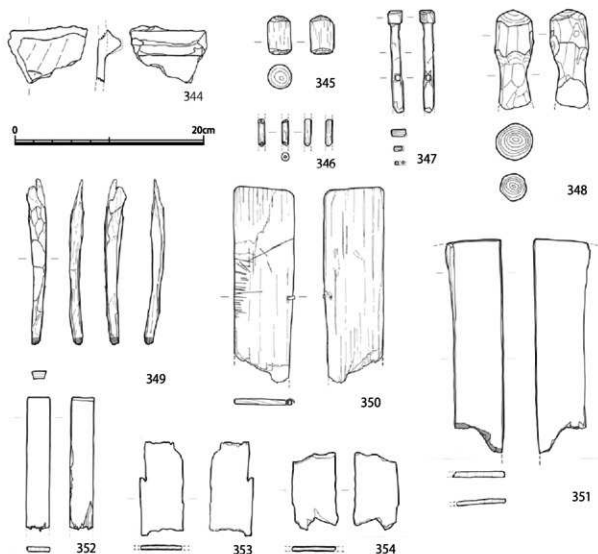


図36 中層遺構 河道3層出土 土製品・木製品 (S=1/4)

3文字分、裏側に2文字分の墨書が存在するが文字としては判読できない。353は板状の木簡であると考えられるが、左辺下半以外は端部が欠けている。残存長9.8cm、残存幅4.5cm、厚さ0.4cmを測る。片面に左下方向へ払うような文字の一部が確認できる。354は周囲全周が破損しており、当初の形状は不明である。残存長7.6cm、残存幅4.6cm、厚さ0.4cmを測る。片面に墨痕の薄れたような痕が認められるが判然としない。

河道4層 (図37~39)

355~398は土師器皿である。

355~360はての字状口縁の小皿である。口径9.3~10.0cm、器高1.2~2.3cmを測る。359・360はての字状口縁の形状退化が進んでいる。底部はやや丸みを帯びる。355・356・359の底部には粘土紐痕が残る。色調は全体的に浅黄色を呈する。

361~383は手づくね成形の小皿である。復元口径8.9~9.9cm、器高1.3~1.9cmを測る。ナデ調整で仕上げる。底部との境に強い稜を有するもの(365・367)が少量ある。口縁端部は丸く収めるものが最も多く、面取りを施すもの(361・362・379・380)、上方に引き上げるもの(370・383)も存在する。363は口縁部外面に横ナデ後の工具痕が斜めに複数存在する。368は口縁端部に内傾

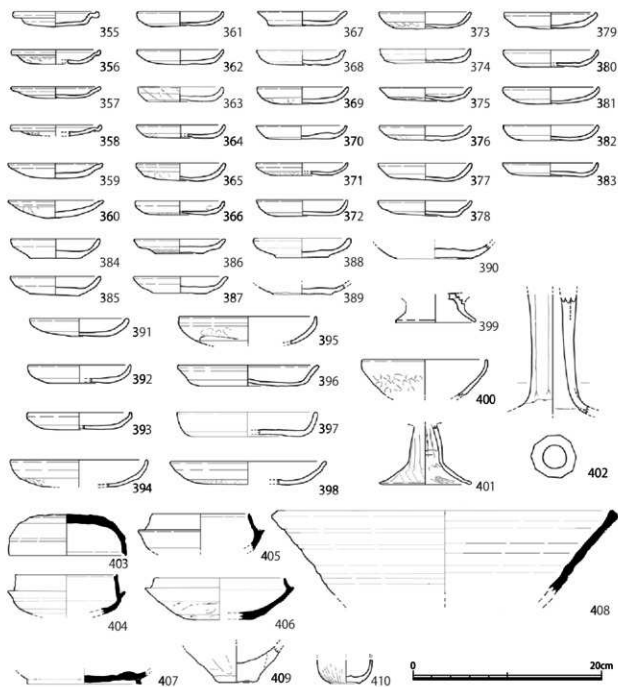


図37 中層遺構 河道4層出土 土器① (S = 1/4)

する面を作り出す。

384～389はロクロ成形の皿である。復元口径9.2～10.2 cm、器高1.5～2.0 cmを測る。底部には右回転の糸切り痕が残り、底部は厚い作りである。口縁端部は丸く収める。390はロクロ成形の大皿ないし坏である。口縁は残存せず、底部径8.0 cmを測る。

391～398は手づくね成形の大皿である。391～393はその中で小型に分類され、復元口径10.3～10.7 cm、器高1.8～1.9 cmを測る。形状からも小皿の延長として捉えるべき可能性もある。色調は浅黄色を呈する。391は内面に炭化物が付着する。394～398は復元口径14.2～16.2 cm、器高2.2～2.9 cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。口縁端部は丸く収めるものが基本である。395は側面に面を作り出すように上方に引き上げる。396・397は底部に粘土のひび割れが多く、396はそれ

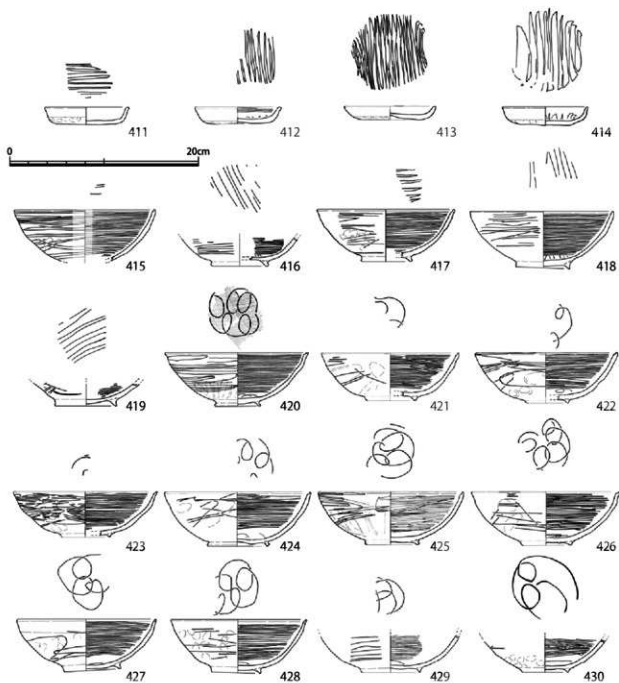


図 38 中層遺構 河道 4 層出土 土器② (S = 1/4)

をナデ消そうとしている。397 は平底で口縁部が直角に立ち上がる箱形である。398 は重ね焼きによる焼き斑が見られる。

399～402 は土師器である。399 は台部である。皿や壺の台であると考えられる。復元底部径約 8.4 cm を測るが、全体に歪みが大きく数値は不正確である。全体をナデ調整で仕上げる。400 は高環の坏部もしくは坏である。復元口径 13.1 cm を測る。外面下半に指頭痕が多く残る。401 は高環の脚部である。裾はラッパ状に開く。筒部は中空で、内面に絞り痕が明瞭に残る。外面は磨滅しているが細かな面取り状のケズリが確認できる。402 は高環の筒部である。外面は縦方向の面取りを行い、断面 10 角形を作り出す。筒部は棒状工具を軸として作られたと考えられ、内面は平滑である。

403～408 は須恵器である。403 は蓋環の蓋である。口径 12.2 cm、器高 4.3 cm を測る。頂部は平

坦である。肩部の稜は丸みを帯びた膨らみ状である。404 は坯もしくは高環の坯部の小片である。復元口径 10.7 cm を測る。端部は内傾して凹線が巡る。受部は外上方に開き、焼成時の蓋との剥離痕が一部に残る。405 は蓋環の身である。復元口径 10.6 cm を測る。内面に漆が付着している。406 は蓋環の身である。復元口径 13.8 cm、器高 4.3 cm を測る。底部は平底である。底部外面に自然軸が付着する。407 は環の底部である。断面形が台形の高台が付き、その復元径は 12.0 cm を測る。内外面とも回転ナデ調整で仕上げる。408 は東播系のこね鉢である。直線的に開く形状で、復元口径 36.3 cm を測る。口縁端部は厚みをもたせ外側に面を作り出す。内外面とも強い回転ナデ調整を施し、それに伴って器面に凹凸が生じている。一方で、外面にはナデ調整の隙間に粘土紐の接合痕も残る。色調は明灰色を呈するが、内面は一部が淡褐色に変色している。時期は 403～406 が古墳時代、407 が古代である。

409 は弥生土器製の底部である。底部中央は小さく窪む。内外面とも激しく磨滅しており、細かい調整は不明である。

410 は白磁の小壺である。底部径 3.1 cm を測る。釉薬は底部外面を除くほぼ全体に施され、内外面とも貫入が見られる。底部内面には渦巻き状にケズリが施される。

411～414 は瓦器皿である。口径 8.7～9.6 cm、器高 1.4～1.9 cm を測る。411 は口縁部が上方に立ち上がり、412～414 は開き気味に立ち上がる。底部外面は未調整で、指・掌圧痕が残る。413 は回転させながら掌で成形した跡が残り、底部中央が上方へ窪む。いずれも見込みにはジグザグ状暗文を施す。412 は内面の立ち上がり上半部に細かな圏線ミガキが施され、色調は他と比較して黒く燻し上げられている。

415～430 は大和型の瓦器碗である。口径 14.2～15.6 cm、器高 5.0～6.0 cm を測る。全体に体部が丸みを帯びる深い形状である。見込みはジグザク状暗文を描いた後に密な圏線ミガキを施すもの(415～419)と、連結輪状暗文を描いた後に密な圏線ミガキを施すもの(420～430)がある。外面のミガキは口縁から高台付近まで施すが、密度には差が見られる。高台は断面方形あるいは三角形のものを丁寧に貼り付ける。418 は見込みに大量の煤が付着する。421・428 は重ね焼きの影響か、内外面とも燻しが不十分で白色化している。427 も外面の 2/3 程度が同様の状態である。時期は 11 世紀後半～12 世紀前半と考えられる。

431 は円筒埴輪である。下から 2 段目に円形スカシを穿つ。上から下に向かって窄まる形状で、下端部はわずかに開く。突帯は断面形が台形で、裾幅 1.8 cm、上幅 1.0 cm、高さ 0.8 cm を測る。突帯は横ナデで丁寧に貼り付け、整形されている。外面は縦ハケ後に横ハケで仕上げる。最下段には横ハケの静止痕が確認できる。432～437 は埴輪の小片である。いずれもハケ調整を施すが、小片であるため方向が不明なものを含む。433 は内面の斜めハケが他より粗い。435・436 には黒斑が認められる。色調は 432～435 は淡橙色、436・437 はにぶい黄灰色を呈する。

438 は須恵器製の体部を転用したと考えられる碗である。甕の内面側を碗面として使用しており、溝状の刷り痕が存在する。内面には広く薄く墨が付着する。全体の形状は小判形であると推測され、断面形は碗面側を内側としてわずかに湾曲する。外面にはタキ痕と緑色の自然軸の付着が確認できる。

439 は木製の下駄である。残存長 13.8 cm、幅 5.6 cm、天板の厚さ 1.1 cm、高さ 2.2 cm を測る。一木造で、先端を欠くが三孔二歯の連歯下駄であると考えられる。後歯の減りが著しい。

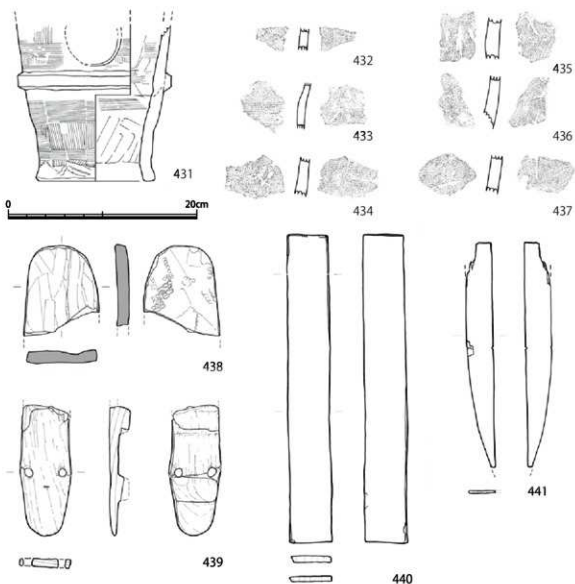


図39 中層遺構 河道4層出土 土製品・木製品 (S = 1/4)

440・441は木簡である(図版43)。440は長さ32.5cm、幅4.5cm、厚さ0.7cmを測る長方形の木簡である。完形品であると考えられる。両面に複数行の文字が記されており、重ね書きや同じ文字を繰り返し書いたような部分も見られる。文字自体は残りが悪く判別が困難である。両面ともに斜め方向に刃物が当たった痕跡が多数残る。441は片面に墨書した呪符木簡で、「尸」と「鬼」を組み合わせた符籙を縦に4つ記している。下端の符は位置が右に寄る。下端が尖る形状であると推測される。右辺が割れ、左辺の上部は一部が欠失している。残存法量は長さ23.7cm、幅2.6cm、厚さ0.2cmを測る。

SD140 (図40・41)

SD140は調査区西辺沿いに位置する区画溝であり、出土遺物は検出面に近い上層(図40)と遺構底面に近い下層(図41)に分けて取り上げを行っている。遺構の時期は土師器と瓦器から12世紀中頃～13世紀初頭頃であると考えられる。この中で出土遺物は下層のほうがやや古い傾向にあるが、上層からも12世紀後半の土器が一定量出土している。

SD140 上層 (図40)

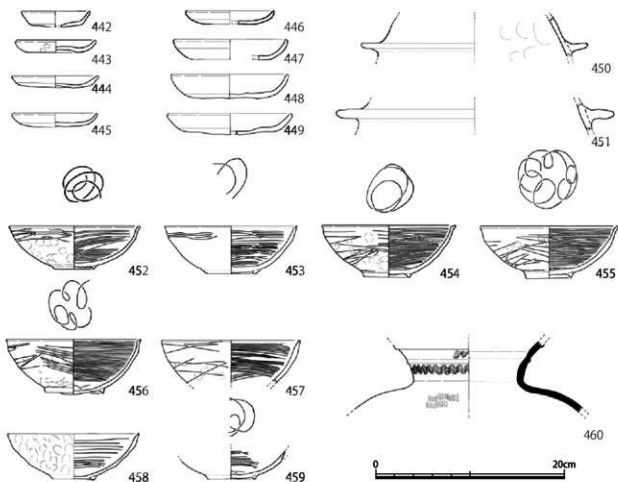


図40 中層遺構 SD140上層出土 土器 (S=1/4)

442～449は手づくね成形の土師器皿である。442～446は小皿で、復元口径7.1～9.2cm、器高1.3～1.6cmを測る。全体にナデ調整を施し、口縁端部は丸く収める。442は復元口径7.1cmと特に小型である。447～449は大皿で、復元口径11.7～12.8cm、器高2.1～2.5cmを測る。全体にナデ調整を施し、口縁端部は丸く収める。449は外面からの強い指押さえにより内面にも起伏が多く見られる。

450・451は土師器羽釜の罎周辺の破片である。450は罎の復元径23.8cmを測る。罎・体部ともに薄手の作りである。451は罎の復元径29.2cmを測る。罎の下面に煤が付着する。

452～459は大和型の瓦器碗である。口径13.6～14.4cm、器高4.5～5.8cmを測る。見込みは455・456が連結輪状暗文を施し、他は同心円状暗文を施す。圏線ミガキが密で外面のミガキも体部2/3程度に施されるもの(454・455・456・457)と、圏線ミガキにやや隙間が空き外面のミガキが口縁部付近に限られるもの(452・453・458)に分けられ、若干の時期差を見出せる。

460は須恵器壺である。口縁部は二条の稜が巡り、間に波状文を施す。体部の全体像は不明であるが肩部は大きく広がる。上部には自然軸が付着する。胎土には0.1cm未満の炭化物粒を多く含む。SD140下層(図41)

461～464は手づくね成形の土師器皿である。461～463は小皿で、復元口径8.7～9.3cm、器高1.4～1.7cmを測る。全体にナデ調整を施し、口縁端部は丸く収める。462は歪みが激しい。463は内面の口縁部裾に強いナデを巡らせることで底部中央が台状に高まる。464は復元口径13.5cm、器高2.6cmを測る大皿である。内外面ともナデ調整で仕上げ、口縁端部は丸く収める。外面に底部から口縁部

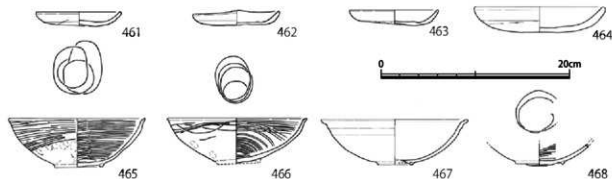


図 41 中層遺構 SD140 下層出土 土器 (S = 1/4)

にかけて斜めに走る粘土紐痕が存在する。内外面に黒斑が存在する。

465～468 は瓦器埵である。467 は口縁端部を丸く取る和泉型の瓦器埵である。口径 15.3 cm、器高 4.7 cm を測る。内外面ともに磨減の為、調整が確認できない。465・466・468 は大和型の瓦器埵で、口径 14.3～14.5 cm、器高 4.7～5.3 cm を測る。465 は内面の圏線ミガキが密で、外面は体部 2/3 程度にミガキを施す。466 は内面の圏線ミガキにやや隙間があり、下半は見込みの同心円状暗文の延長で施す。

SD145 (図 42～44)

区画溝 SD145 は遺構一括で遺物の取り上げが行われているが、遺構底面付近で出土した一部遺物を別に取り上げている (図 44)。また、遺構の項で述べた通り SD145 出土遺物の中には SD231 に属する遺物が含まれていると考えられる。

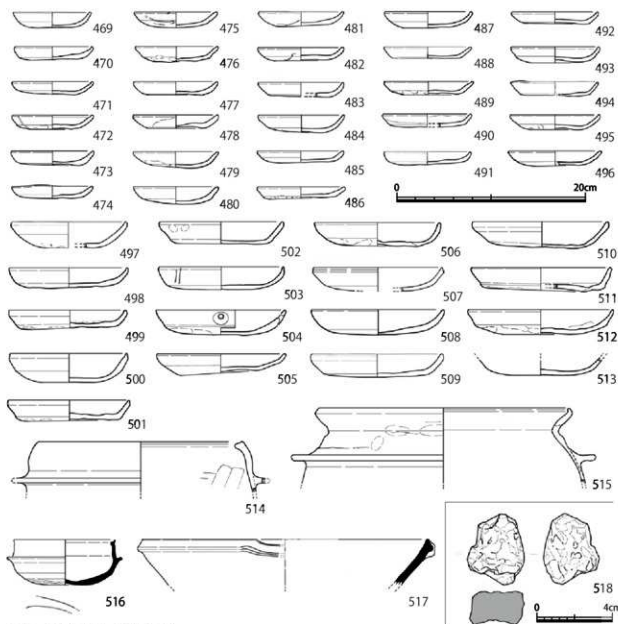
SD145 一括 (図 42・43)

469～496 は手づくね成形の土師器小皿である。復元口径 8.0～9.6 cm、器高 1.2～1.9 cm を測る。内外面ともにナデ調整を施す。底部との境に稜をもつもの (483・490・492・495・496) がある。口縁端部は丸く取るものが多く、他に面取りを施すもの (471・472・483・491)、上方に引き上げるもの (470・493) がある。472・475・495 は外面にヘラ状工具の静止痕が存在する。471・473・475・476・478～482 は底部から口縁部にかけて斜めに粘土紐痕が確認できる。色調は浅黄色を呈するものが全体の 2/3 を占め、他は黄灰色である。494 のみ淡赤灰色を呈する。

497～513 は土師器大皿である。復元口径 11.9～15.3 cm、器高 2.0～2.9 cm を測る。497～499・505 は黒斑が明瞭に存在する。501・502・512 は外面に強い指頭痕が多く残り、特に 501 は底面に大きな凹凸を生じさせている。503 は口縁端部に強い回転ナデを施し、幅 0.3 cm の面を外側に作り出す。504 は口縁端部から 0.4 cm 下の位置に直径 0.5 cm 大の円形孔を穿つ。511 は底部から直上方向に立ち上がり箱形を呈する。

514・515 は土師器羽釜である。514 は復元口径 21.4 cm を測る。口縁部は内湾する形状である。口縁端部は内側に肥厚させ上部の面には二条の凹線を巡らせる。515 は復元口径 26.4 cm を測る。口縁部はくの字形に屈曲させ、端部は内側に折り返す。内外面ともナデ調整で仕上げられるが、鈎上端には体部との接統痕が明瞭に残る。鈎下面以下の範囲に煤が付着する。

516 は須恵器蓋環の身である。口径 10.5 cm、器高 4.8 cm を測る。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内傾する。外面には底部中央付近を通る形で、二条の並行する直線ヘラ記号が描かれる。517



469～517：S=1/4、518：S=1/2

図42 中層遺構 SD145出土 土器①・鉄滓(S=1/4・1/2)

は須恵器片口鉢である。復元口径30.0cmを測るが小片であるため、若干前後する可能性もある。注ぎ口は浅く切られる。

518は鉄滓である。重量28.1gを測り、重量感がある。色調は緑色掛かった灰色を呈する。表面には0.5cm大の気泡と0.1cm大の気泡が混在する。

519～522は瓦器皿である。口径8.4～9.1cm、器高1.2～1.8cmを測る。口縁部は開き気味に立ち上がり、端部はやや外につまみ出す。底部は未調整で指・掌圧痕が残る。519・521・522は見込み面にジグザグ状暗文を施す。

523～547は大和型の瓦器甕である。体部が開き気味に立ち上がる形状が多い。口径13.3～14.7cm、器高4.1～5.0cmを測る。内面の圈線ミガキは隙間が空き、見込みには同心円状暗文を施す。外面のミガキは体部上半～口縁部付近にのみ施される。断面三角形の高台を雑に貼り付ける。高台は532・533・542・545のように底部中央よりも高い位置に貼り付けられることで機能を半ば果たしていな

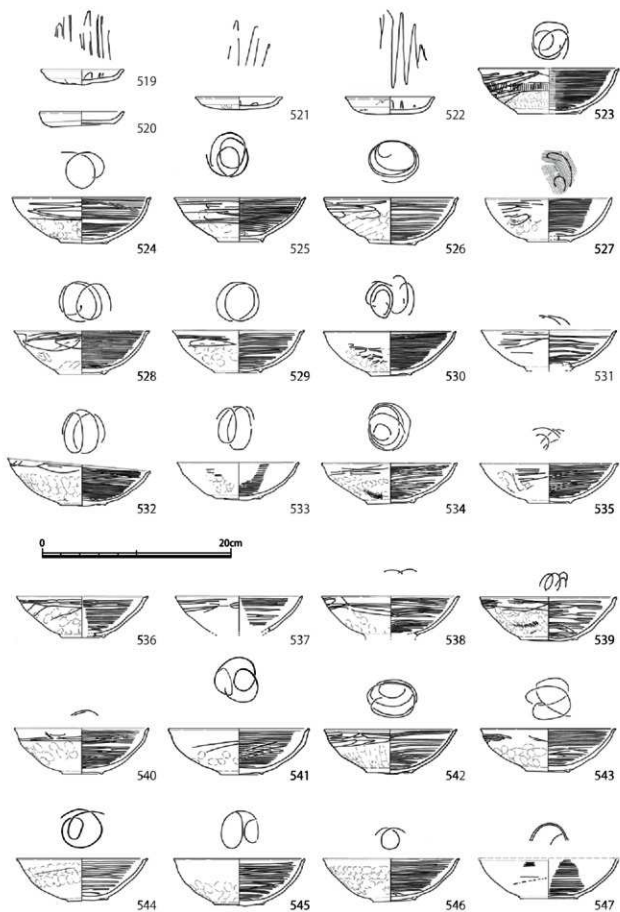


图 43 中層遺構 SD145 出土 土器② (S = 1/4)

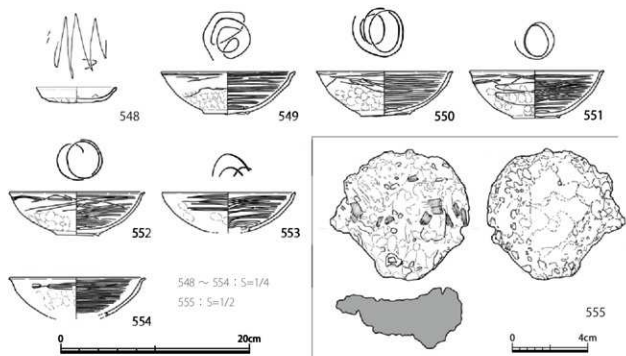


図44 中層遺構 SD145下層出土 土器・鉄滓 (S = 1/4・1/2)

いものもある。523は外面に成形時の粘土の燃れと思われる細かな縦皺が存在する。

SD145下層(図44)

548は瓦器皿である。口径8.3cm、器高1.6cmを測る。外面の口縁部付近にも強い指押さえの痕が残る。見込みにはジグザグ状暗文を施す

549～554は大和型の瓦器埴である。体部は開き気味に立ち上がる。口径13.8～15.3cm、器高4.5～5.0cmを測る。内面の圈線ミガキは隙間がやや空き、見込みには同心円状暗文を施す。外面は体部上半～口縁部付近を粗く磨く。断面三角形の小さな高台を貼り付ける。

555は鉄滓である。形状から埴形滓であると考えられる。重量136.7gを測る。下面には炭化木片が付着する。凹部中央付近を除いた全体に大小の気泡が多く存在する。

SD146(図45・46)

区画溝SD146はSD140と同様に上層(図45)と下層(図46)に分けて遺物の取り上げを行っている。時期は12世紀後半～13世紀初頭であり、下層からも新しい時期の遺物が出土するなど上層と下層で大きな差異は見られない。

SD146上層(図45)

556～574は手づくね成形の土師器皿である。

556～563は小皿で、復元口径8.4～9.1cm、器高1.2～1.7cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。底部との境に強い稜が存在するもの(556～558・563)がある。口縁端部は丸く取めるもの(556～561・563)と面取りを施すもの(562)がある。556・562・564には底部から口縁部に掛かる粘土紐痕が確認できる。

564～574は大皿である。復元口径11.8～14.6cm、器高1.8～3.2cmを測る。内外面ともナデ調整を施す。口縁端部は丸く取めるもの(564・565・569・570・572)、面取りを施すもの(566～

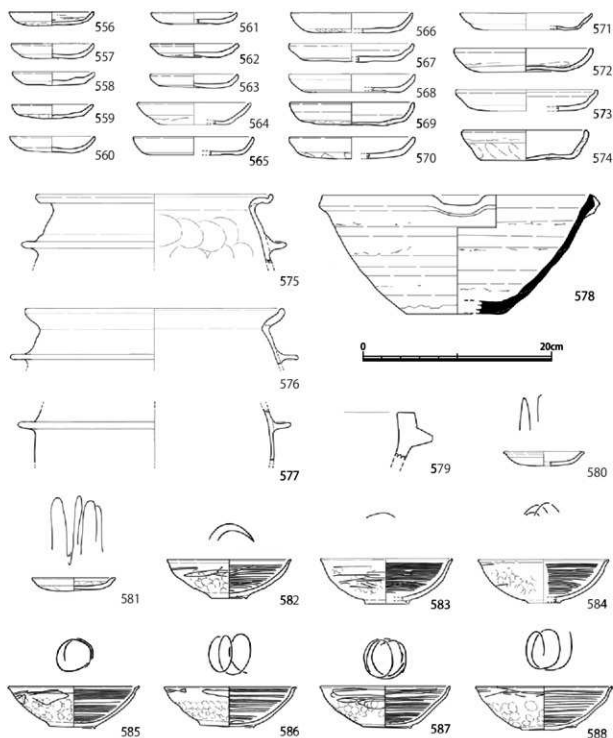


図45 中層遺構 SD146上層出土 土器 (S=1/4)

568・573・574) 上方に引き上げるもの(571)がある。572は底部の指押さえが強く、全体に凹凸が目立つ。565・568・569・574には粘土組痕が確認できる。574は器高が高く、坏に近い形状である。

575～577は土師器羽釜である。575は復元口径24.6cmを測る。口縁部は上端がほぼ水平になるまで外側に屈曲させ、端部は内側へ折り返して丸く収める。鐙は厚手である。遺存範囲に煤は付着していない。576は復元口径27.0cmを測る。口縁部はくの字形になだらかに屈曲させる。鐙は今回出土した羽釜の中で最も薄い。577は鐙の復元径28.7cmを測る。体部の形状は膨らみが小さいと考え

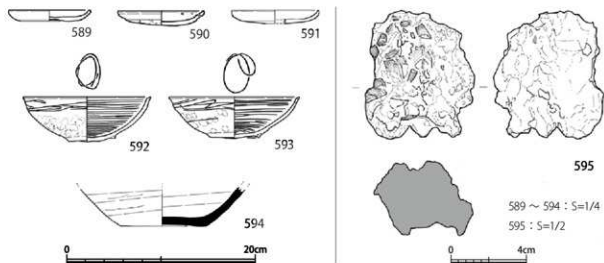


図46 中層遺構 SD146下層出土 土器・鉄滓 (S = 1/4・1/2)

られる。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げる。

578は須恵器片口鉢である。全体の約8割が遺存している。口径28.4cm、器高12.4cmを測る。直径10.2cmの平底から、やや内湾して立ち上がる形状である。口縁端部は外側に面を作り出す。注ぎ口は幅約5cmを測り、緩やかな屈曲を見せる。内外面とも回転ナデで仕上げられており、内面下半は胎土中の礫が抜け落ちた小孔が多く存在する。内面には約2cm大の緑色自然釉滴が二ヶ所に付着している。

579は滑石製の石鍋の小片である。外面には煤が付着する。

580・581は瓦器皿である。580は復元口径8.3cm、器高1.5cmを測る。口縁部は開き気味に立ち上がり、端部をわずかに外につまみだす。581は完形品で、口径8.7cm、器高1.4cmを測る。見込みに丸みの強いジグザグ状暗文を施す。

582～588は大和型の瓦器埴である。体部は開き気味に立ち上がり、浅い。口径13.0～14.0cm、器高4.1～4.7cmを測る。583以外は内面の圏線ミガキは隙間が目立つ。見込みに同心円状暗文を施す。外面は体部上半～口縁部付近のみを磨く。高台は断面三角形の小型である。

SD146下層(図46)

589～591は土師器皿である。いずれも手づくね成形の小皿である。589は口径8.5cm、器高1.2cmとやや小ぶりである。590は片側の口縁部に径1.5mm大の小孔が約1cm間隔で3ないし4つ穿たれている。外面は上半のナデ調整により、底部との境に稜が見られる。591は口径9.1cm、器高1.4cmを測り、口縁端部に面取りを施す。外面底部に線状の工具痕が残る。

592・593は瓦器埴である。592は口縁の一部のみを欠く準完形品で、口径13.3cm、器高4.6cmを測る。内面の圏線は、個々の線が細く隙間が空く。見込みに同心円状暗文を施す。高台は底部より高い位置に貼り付けられており、ほぼ高台としての機能を成さない。593も同様にほぼ完形品である。口径13.6cm、器高4.3cmを測る。内面の圏線は隙間が広く、線は太い。見込みに同心円状暗文を施す。断面三角形の高台を貼り付けるが、高さがほとんど無く機能を成さない。

594は須恵器鉢の底部である。底部は糸切りで粗雑に切り離されている。内外面ともやや粗いナデ調整を施す。破片状態となった後に被熱しており、内面と断面の一部が暗褐色に変色し、一部には煤も付着している。

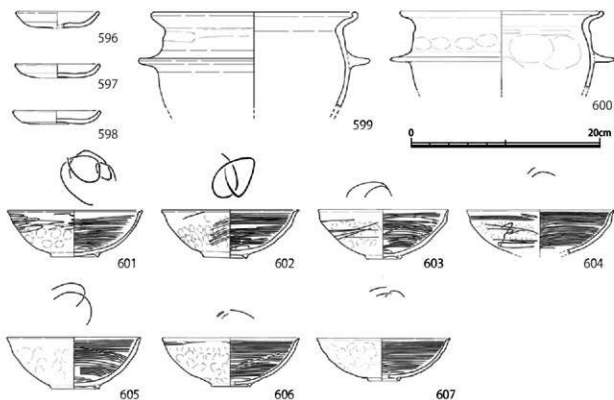


図 47 中層遺構 SD147 出土 土器 (S = 1/4)

595 は鉄滓である。重量 118.4g を測る。片面 (図の左) には多量の炭化木片が付着し気孔も多く、もう片面は鉄分の露出が多く黒褐色を呈する。

SD147 (図 47)

596～598 は手づくね成形の土師器小皿である。復元口径 8.4～9.0 cm、器高 1.4～1.7 cm を測る。内外面ともにナデ調整を施し、口縁端部は丸く取める。色調は浅黄色を呈する。596 は外面の底部との境に強い稜をもつ。

599・600 は土師器羽釜である。599 は口縁部がくの字形に屈曲し、口縁端部は内側に折り返して丸く取める。復元口径 21.8 cm を測る。全体にナデ調整で仕上げる。罫の下半以下の範囲に煤が付着する。600 は口縁部がくの字形に屈曲し、口縁端部は上方に折り返して丸く取める。復元口径 21.2 cm を測る。外面には罫を貼り付けた際の指頭痕が残る。罫の先端以下の範囲に煤が付着する。

601～607 は大和型瓦器碗である。体部は開き気味に立ち上がり浅いものが多い。口径 13.5～15.4 cm、器高 4.5～5.3 cm を測る。内面の圈線ミガキはやや隙間が空く。見込みには同心円状暗文を施す。外面は体部上半を磨くが、605・606 は磨滅により確認ができない。断面三角形の高台を貼り付ける。603・607 は高台の直径が他より小さい。

SD144 (図 48)

608・609 は手づくね成形の土師器皿である。608 は口径 9.0 cm、器高 1.3 cm を測る小皿である。口縁端部に面取りを施す。外面は口縁と底部との境に稜が見られる。内外面とも底部に粘土紐が確認できる。609 は復元口径 11.9 cm を測る。遺存範囲は全体にナデ調整を施す。

610は瓦器皿である。口径8.1cm、器高1.1cmを測る小皿である。見込みにはジグザグ状暗文を施す。口縁部は開き気味に立ちあがり、端部を小さくつまみ出す。底部外面は未調整で、指・掌の圧痕が残る。

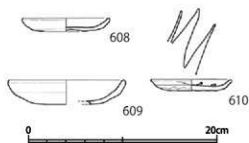


図48 中層遺構 SD144出土 土器 (S = 1/4)

SD251 (図49)

611は瓦器碗である。体部は丸みをもって立ち上がり、内面の圈線は密である。見込みには連結輪状暗文を施す。外面は下半にまでミガキを施す。高台は断面三角形が基本であるが部分的に台形を成す。時期は11世紀末～12世紀初め頃であると考えられる。

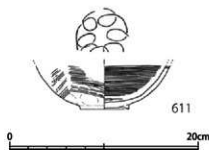


図49 中層遺構 SD251出土 土器 (S = 1/4)

SD230 (図50～52)

SD230は区画溝に伴う遺構群の前段階に位置付けられる遺構である。11世紀後半～12世紀前半の土器が出土しており、その時期の遺構であると考えられる。その

一方で、5～6世紀や8世紀頃の遺物も一定量出土している点も特徴的で、遺構の形成過程や周辺環境を考える手掛かりとなる。遺物の取り上げは上層と下層に分けて行っているが、遺構の項で述べた掘り直しの前・後と厳密な対応が取れているわけではない。

SD230 上層 (図50・51)

612は土師器環である。復元口径16.6cm、器高3.6cmを測る。全体にナデ調整を施す。口縁端部は内側に肥厚させて丸く取める。613は土師器皿である。復元口径21.4cm、器高2.2cmを測る。内面に放射状のミガキを施す。612・613はともに8世紀の遺物であると考えられる。

614は土師器高環である。脚部の裾はラッパ状に開く。筒部は中空である。脚部に一ヶ所のみ円形スカシを穿つ。615は土師器甕である。復元口径13.1cmを測る。体部外面にケズリに近い強いナデ調整を施す。616・617は甕の口縁部である。616は復元口径20.4cmを測る。617は復元口径28.0cmを測る。口縁部は短く直線的に外傾する。体部外面には格子状のタタキ後にハケ調整を施す。内面はナデ調整で仕上げるが、一部にハケ調整が残る。

618～625は土師器羽釜である。618は口径25.0cmを測る。鈔および口縁部が厚手の作りである。鈔の一部に焼成前に生じた変形が存在する。外面全体に煤が付着し、内面も体部には変色が見られる。619は口径27.8cmを測る。口縁部はくの字形で、口縁端部を内側に折り返して丸く取める。体部内面は強めのケズリを施し、口縁部との境の稜が明瞭である。鈔は肉厚で水平に伸びる。鈔の先端以下の範囲に煤が付着する。620は復元口径25.8cmを測る。口縁部は短く外側に折り返し、端部は上方につまみ上げる。鈔の先端以下の範囲に煤が付着しており、特に鈔下面に多い。621～623は鈔部分の破片で、それぞれ別個体である。復元鈔径は621が29.0cm、622が32.4cm、623が33.0cmを測る。621・622は鈔先端以下の範囲に、623は鈔下面以下の範囲に煤が付着する。624は鈔と頸部の破片で、口縁部は外側に折れるくの字形であると考えられる。鈔は下垂気味の形状である。復元鈔径37.1cmと最も大きい。625は口縁部である。復元口径24.6cmを測る。くの字形の口縁部で、端部は上方に

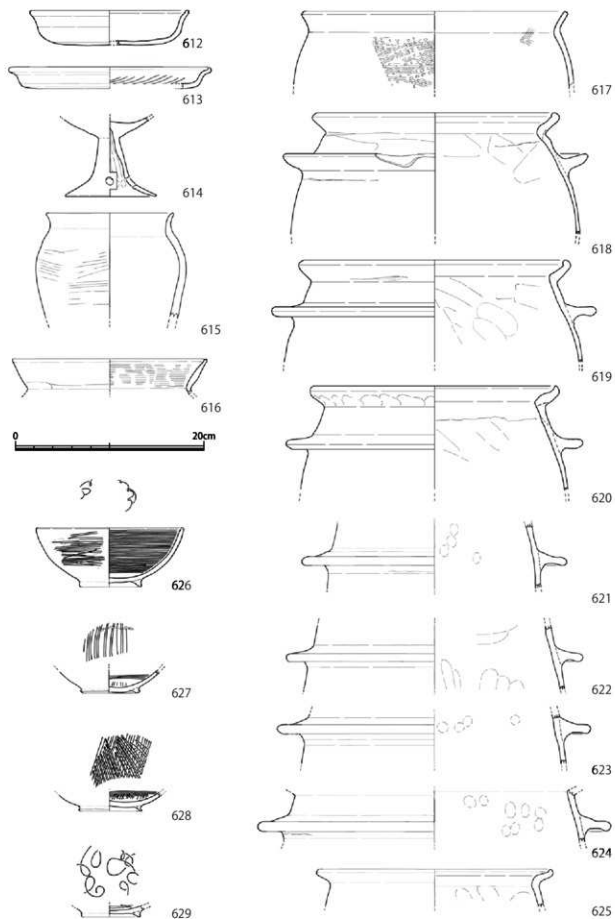


图 50 中層遺構 SD230 上層出土 土器① (S = 1/4)

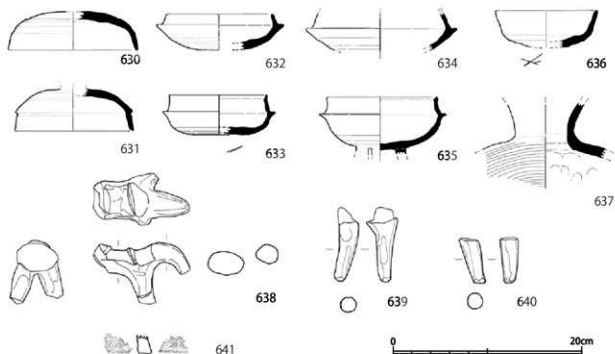


図 51 中層遺構 SD230 上層出土 土器②・土製品 (S = 1/4)

小さくつまみ上げる。

626～629は瓦器塊である。626は丸みをもって立ち上がる深い形状で、口径 15.3 cm、器高 6.2 cmを測る。内面の圏線は密で、個々の線も細い。見込みは連結輪状暗文である。外面は体部の 2/3 程度を磨く。高台は断面が三角形に近い台形状で、丁寧に貼り付けられている。627は底部の破片である。見込みにジグザグ状暗文を施した後に、密な圏線ミガキを施す。高台は底面の幅が広い台形である。全体が白色に変色している。見込みには重ね焼き時に付着したと考えられる帯状の粘土片が存在する。628は底部の破片である。見込みにジグザグ状暗文を二重に施し格子状にしている。その後、体部に圏線ミガキを施す。高台は外に開き気味の台形で、丁寧に貼り付けられている。629は底部の破片で、見込みに連結輪状暗文を施す。高台は上部が幅広の断面台形で、丁寧に貼り付けられている。

630～637は須恵器である。630は蓋環の蓋である。復元口径 13.6 cmを測る。肩部にはふい凹線が巡る。頂部の約半分の範囲にヘラケズリを施すが、その後、一部に粘土塊が付着している。631は高環の蓋で、嵌め込んだつまみ部分が落着いている。口縁端部はわずかに内傾し、沈線が巡る。632は蓋環の身で、復元口径 11.2 cm、器高 3.6 cmを測る。口縁部は短くやや内傾して立ち上がり、端部は丸く収める。633は蓋環の身である。復元口径 10.2 cm、器高 4.2 cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は内側に小さな稜をもつ。底部外面中央にヘラ記号の一部が残る。634は復元口径約 13 cmを測る、やや大型の環身なし高環の環部である。回転ナデ、ヘラケズリともに強い回転をもって施されたことがうかがえる。635は有蓋高環の上半部である。口径 11.4 cmを測る。脚部には3方向の透かしが存在する。色調は灰白色を呈する。焼成はやや不良で、断面は淡褐色を呈する。636は口径 10.5 cmを測る小型の環である。形状から小型の蓋である可能性も考えられたが、底部外面の仕上げが非常に粗く、内面は全体に丁寧なナデ調整を施していることから、環としている。底部外面には×字状のヘラ記号が存在する。637は提瓶である。体部外面の片面には同心円状のカキ目

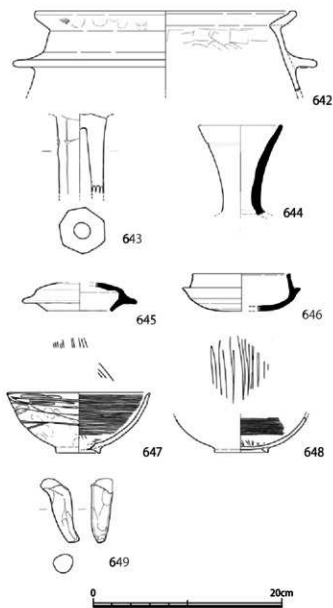


図52 中層遺構 SD230下層出土 土器・土製品 (S=1/4)

る。外面上方には一条の沈線を巡らせる。内外面全体に自然釉が付着しており、特に外面の一部は厚い。645は壺の蓋である。つまみが存在したと考えられる。口径6.7cmに対し鐳径は12.0cmと広い。頂部にはヘラケズリ、他の範囲には強めの回転ナデ調整を施す。646は蓋環の身である。復元口径10.2cm、器高3.9cmを測る。

647・648は瓦器である。647は丸みをもって立ち上がる形状で、口径15.0cm、器高6.3cmを測る。見込みにジグザク状暗文を施した後、体部に密な圏線ミガキを施す。外面のミガキは体部の上から2/3程度の範囲に施す。断面台形の高台を丁寧に貼りつける。648は下半部の破片である。見込みにジグザク状暗文を施した後、密な圏線ミガキを施す。高台は底部幅が広い断面台形で、丁寧に貼り付けられている。

649は土馬の脚である。全体にひねりの有る、立体的な造形である。全体にナデ調整で仕上げるが、一部にヘラの痕が残る。

を施す。体部内面には大きめの指頭圧痕が多数残る。外面には少量の煤が付着する。

638～640は土馬である。638は土馬の下半身である。後肢も先端は失われている。遺存部分の形状はナデで作り出されており、線刻や竹管による表現は見られない。上半身とは粘土の織ぎ目で剥離している。639・640は脚の破片であり、全体をナデ調整で仕上げている。639は胴体との粘土の織ぎ目で分離したと考えられる。

641は埴輪の円筒部の裾であると考えられる。黒斑が存在する。

SD230下層(図52)

642は土師器羽釜である。復元口径27.0cmを測る。口縁部はくの字形に短く折り返す。口縁部外面の一部に格子状の刻み目が存在する。体部内面には強めのケズリを施し、口縁部との境の稜は明瞭である。鐳の先端以下の範囲に煤が付着する。643は土師器高坏の筒部である。縦方向の面取りを施し、断面の形状は7角形である。

644～646は須恵器である。644は壺もしくは瓶類の口縁部である。外反して開く細長い口縁部で、口径8.8cmを測る。

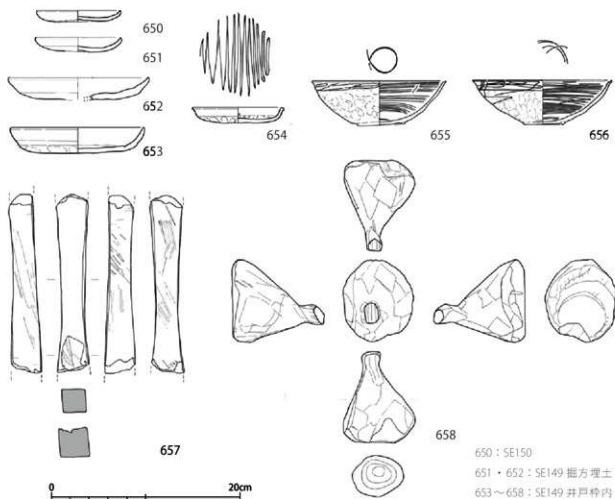


図 53 中層遺構 SE149・SE150 出土 土器・石製品・木製品 (S = 1/4)

SE149 (図 53)

SE149 の出土遺物は井戸の掘方埋土から出土したもの (651・652) と井戸枠内から出土したもの (653～658) に分かれる。後者はいずれも枠内でも上層からの出土であり、井戸の放棄時に捨て込まれたものと考えられる。

651～653 は土師器皿である。651 は手づくね成形の小皿で、復元口径 8.8 cm、器高 1.5 cm を測る。口縁端部は丸くおさめる。内面全体と口縁部外面にナデ調整を施す。底部外面は無調整である。652 は手づくね成形の大皿で、復元口径 14.7 cm、器高 2.3 cm を測る。口縁端部はやや尖り気味に取める。内面全体と口縁部外面に回転ナデ調整を施す。底部外面にもナデ調整を施して指頭痕をナデ消している。653 は完形品の手づくね成形の大皿である。口径 14.2 cm、器高 2.7 cm を測る。内面には口縁部裾を巡る形で粘土組痕が見られる。

654 は瓦器皿である。完形品で口径 9.6 cm、器高 1.6 cm を測る。見込みにはジグザグ状暗文を施す。口縁部は端部を外側に小さく折り返す。底部外面は未調整で、指・掌圧痕が多数残る。655・656 は瓦器碗である。655 は口径 14.0 cm、器高 4.7 cm を測る。体部は開き気味に立ち上がる。内面の圏線ミガキは隙間が空き、見込みは同心円状暗文を施す。外面は口縁部直下のみミガキを施す。低い断面三角形の高台を、底部より高い位置に雑に貼り付ける。656 は復元口径 14.6 cm、器高 4.5 cm を測

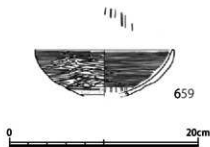


図 54 中層遺構 SK260 出土 土器 (S = 1/4)

る。体部は開き気味に立ち上がり、口縁端部をわずかにつまみ出す。見込みには同心円状暗文を施す。外面は上半部にミガキを施す。断面三角形の低い高台を貼りつける。

657 は砥石である。残存長 18.6 cm、厚さ 2.4 ~ 3.5 cm、重量 272.2g を測る。両端部がやや太くなる角柱状を呈し、両端部がわずかに欠けていると考えられる。全体に擦痕が認められ、棒状具を研いだと考えられる深さ最大 0.7 cm の溝も端部に存在する。

658 はフラスコ状の形をした木製品である。粘など糊の一種である可能性が考えられるが、把手に対応する部分はやや貧弱な作りである。底面は平坦で、本体は円錐状である。

SE150 (図 53)

650 は手づくね成形の土師器の小皿である。口径 8.8 cm、器高 1.2 cm を測る。口縁端部は上方に引き上げる。内面全体と口縁部外面をナデ調整で仕上げる。底部には指頭痕が多数残る。

SE150 からは他に土師器、瓦器、須恵器の細片が出土している。

SK260 (図 54)

659 は瓦器塊である。復元口径 14.5 cm を測る。体部は丸みをもって立ち上がり、内面の圏線ミガキは密である。見込みにはジグザグ状暗文を施す。外面は高台付近までを密に磨く。体部上半はやや厚手の作りである。

SK260 からは他に土師器の細片が出土している。

SX138 (図 55)

662~676 は手づくね成形の土師器小皿である。復元口径 8.0~9.2 cm、器高 1.2~1.9 cm を測る。内外面ともにナデ調整を施す。664・666・667 は底面との境に強い稜をもつ。口縁端部は丸く取めるものが主である。671 は面取りを施す。666・671 は底部から口縁部にかけて斜め方向に粘土組痕が存在する。671 は口縁部内面に強いナデを施した時に生じた粘土の歪みが認められる。671・672 には黒斑が存在する。色調は全体の 1/3 が浅黄色系、2/3 が橙色系である。

677 はほぼ完形の瓦器皿である。口径 8.2 cm、器高 1.5 cm を測る。口縁部は開き気味に立ち上がり、口縁端部をわずかにつまみ出す。外面底部は未調整で指・掌圧痕が残る。見込みは不規則なジグザグ状暗文を施す。

678~684 は大和型の瓦器塊である。体部は開き気味に立ち上がり、浅い。口径 13.5~14.1 cm、器高 4.1~4.5 cm を測る。内面の圏線ミガキはやや隙間が空き、見込みには同心円状暗文を施す。外面は体部上半~口縁部付近のみを粗く磨く。断面三角形の小さな高台を貼り付ける。681~683 は高台が底部中央より高い位置に貼り付けられている。

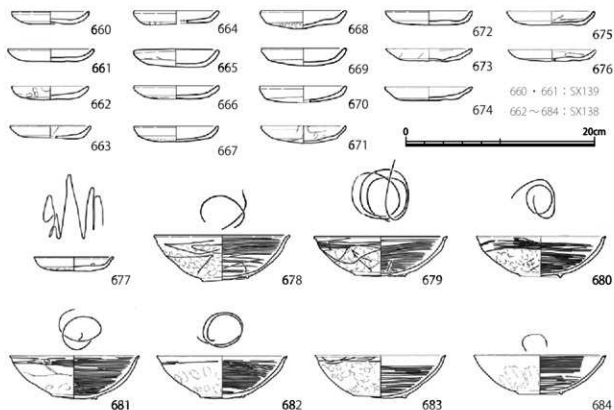


図 55 中層遺構 SX138・SX139 出土 土器 (S = 1/4)

SX139 (図 55)

660・661は土師器皿である。いずれも手づくね成形の小皿である。660は復元口径8.0cm、器高1.3cmを測る。口縁端部の外側に面取りを施し、凹線を巡らせる。661は復元口径8.9cm、器高1.3cmを測る。口縁端部は丸く取める。全体をナデ調整で仕上げるが、底部には指頭痕が若干残る。

この他に瓦器と土師器の細片が出土している。

SX141 (図 56)

685～688は手づくね成形の土師器皿である。685・686は小皿で、復元口径9.0cm、器高1.4～1.6cmを測る。内外面ともにナデ調整を施し、口縁端部は丸く取める。色調は橙色を呈する。687・688は大皿である。復元口径12.8～14.0cm、器高2.2～2.3cmを測る。687は口縁端部を上方に引き上げ、下半には指頭痕が多く残る。色調は浅黄色を呈する。688は口縁端部に面取りを施す。器壁はやや肥厚させる。色調は橙色を呈する。

689は土師器羽釜である。復元口径37.2cmを測る。全体をナデ調整で仕上げている。煤は付着していない。

690は瓦器皿である。口径8.2cm、器高1.5cmを測る。口縁部は開き気味に立ち上がり、口縁端部はわずかにつまみ出す。底部外面は未調整で指・掌圧痕が残る。見込みにはジグザグ状暗文を施す。

691～695は大和型の瓦器碗である。口径13.5～14.3cm、器高4.5～5.0cmを測る。内面の圏線ミガキはやや隙間が空き、見込みには同心円状暗文を施す。外面は口縁部付近のみを粗く磨く。いずれも断面三角形の高台を貼り付ける。694は高台が底部中央より高い位置に貼り付けられる。693は底部よりやや上に直径0.1cmの円形の穿孔が存在する。

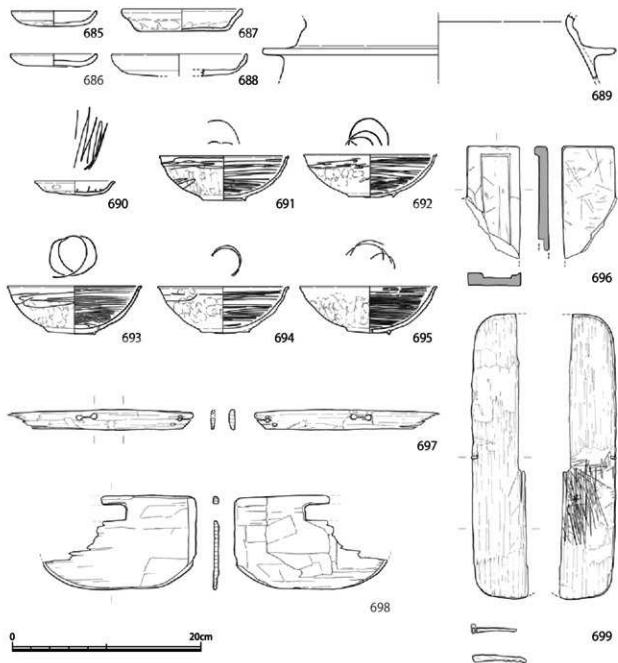


図 56 中層遺構 SX141 出土 土器・石製品・木製品 (S = 1/4)

696 は石製の硯である。残存長 11.8 cm、幅約 5.7 cm、厚さ 1.3 cm を測る。全体の形状は短冊状を呈すると考えられるが、側面に小さな突起も存在する。硯面の深さは約 0.2～0.3 cm を測り、部分的に墨が付着している。

697～699 は木製品である。697 は板状木製品である。残存長 19.6 cm、幅 2.1 cm、厚さ 0.6 cm を測る細長い形状である。中央部に直径 0.5 cm 大の円孔を 2ヶ所に、片側の端部付近に直径 0.4 cm 大の円孔を 3ヶ所に、それぞれ穿つ。柁目取りで、木目は長軸方向に通る。用途は不明であるが、紡績具などの可能性が考えられる。698 は一辺が丸みを帯びる長方形の板材である。一枚板の泥除けであると考えられるが、薄手の作りである。高さ 9.8 cm、幅 16.2 cm、厚さ 0.5 cm を測る。柁目取りで、木目は横方向に通る。柄孔は横長の長方形である。699 は板状の木製品で、遺存する角は丸い。長さ 0.1 cm、残存幅 5.7 cm、厚さ 0.7 cm を測る。長辺沿い中央に小孔があり、樹皮紐が通されている。片面の

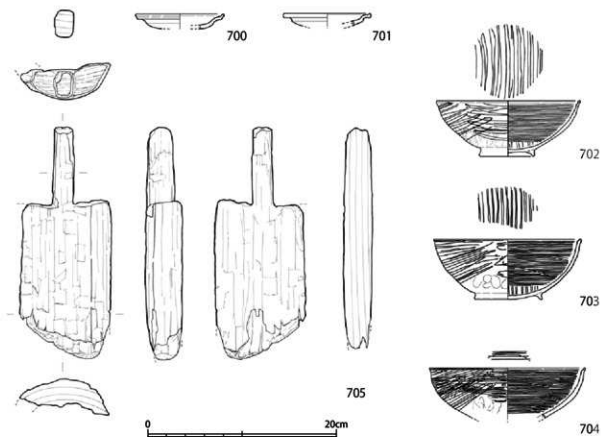


図 57 中層遺構 SX148 出土 土器・木製品 (S = 1/4)

一部には細かな切込みが多数存在し、まな板として転用されたと考えられる。板目取りである。この他に、拳大の石材が 4 点出土しており、その一部は被熱している。

SX148 (図 57)

SX148 から出土した土器の時期は 11 世紀後半にあたり、中層遺構でも古い時期の遺構と言える。

700・701 は土師器皿である。ての字状口縁の小皿である。700 は復元口径 9.5 cm、残存高 1.5 cm を測る。全体にナデ調整を施す。701 は復元口径 9.7 cm、残高 1.3 cm を測る。700 よりも口縁下面の抉り込みが強い。全体にナデ調整を施す。

702～704 は瓦器碗である。いずれも体部が丸みをもって立ち上がる形状である。702 は口径 14.9 cm、器高 5.9 cm を測る。内面の圏線ミガキは密である。見込みにはジグザグ状暗文を施す。内面は燻がよく、光沢がある。外面は口縁部から 2/3 の範囲にミガキを施す。底部幅のやや狭い断面方形の高台を貼り付ける。703 は復元口径 15.2 cm、器高 6.3 cm を測る深い形状である。内面の圏線ミガキは非常に密である。外面は口縁から 2/3 の範囲を三分割で磨く。高台は外反気味のしっかりした形状である。704 は口径 16.2 cm、残存高 5.2 cm を測り、底部を欠く。内面の圏線ミガキは密である。見込みはジグザグ状暗文であると考えられる。外面は三分割のミガキを施す。外面は燻がよく、ミガキ部分が黒光りしている。

705 は柄付の板材で、鋤や槌である可能性が考えられる。残存長 24.5 cm、幅 9.6 cm を測る。柄の断面形は長方形である。板状部分は断面が湾曲する形状である。木材の丸みを利用した形状であると

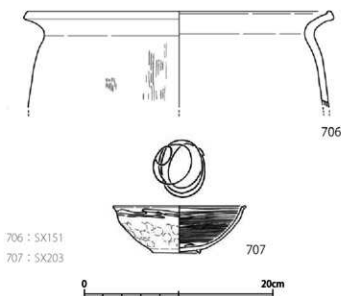


図 58 中層遺構 SX151・SX203 出土 土器 (S = 1/4)

SX203 (図 58)

707 は瓦器碗である。完形品が 3 点に割れた状態で出土している。口径 13.8 cm、器高 5.0 cm を測る。体部は開き気味に立ち上がり、内面の圏線ミガキはやや隙間が見られる。見込みは同心円状暗文を施す。外面は口縁部直下付近にミガキを施す。内外面に重ね焼きによる白色化が見られ、その範囲から乱雑に積まれたことが伺える。高台は断面三角形で、焼成前に付いた大きな傷が存在する。

この他に土師器の細片が出土している。

中層遺構 SP (図 59)

中層遺構の SP 群から出土した遺物をまとめて報告する。他の中層遺構と同様に、古代末～中世の遺物に混じて古代や古墳時代の遺物が一定量出土している。

708～712 は土師器皿である。708～710 は手づくね成形の小皿である。708 は復元口径 8.2 cm を測る。底部は平底で、口縁端部は丸く取める。709 は復元口径 9.0 cm を測る。全体をナデ調整で仕上げる。710 は完形品で、口径 8.6 cm、器高 1.6 cm を測る。全体をナデ調整で仕上げるが、内面には工具によると思われる線状痕が複数残る。711 は手づくね成形の大皿で、復元口径 14.6 cm、器高 2.3 cm を測る。全体をナデ調整で仕上げるが、底部に指頭痕も残る。胎土に 0.1～0.3 cm 大の赤色粒が多く含まれる。712 は古代の皿で、復元口径 20.0 cm、器高 3.3 cm を測る。広い平底の底部から外反気味に口縁部が立ち上がる。外面底部はケズリを施し、他はナデ調整で仕上げる。

713 は土師器羽釜である。復元口径 24.0 cm を測る。口縁部はくの字形に屈曲し、比較的短い。端部は内側に向かってつまみ上げる。外面全体に薄く煤が付着する。

714 は瓦器皿の完形品である。全体に歪みが大きく口径 8.3～9.2 cm、器高 1.2 cm を測る。見込みにジグザグ状暗文を施す。口縁部内面に 0.4 cm 大の礫の剥落痕が残る。

715・716 は瓦器碗である。715 は底部片で、見込みにジグザグ状暗文を施した後、体部に密な圏線ミガキを施す。高台は断面台形が高い。716 は外面の口縁部付近にのみミガキを施し、指頭痕が多く存在する。内外面に重ね焼きによる白色化が確認できる。

考えられる。

この他に図化の難しい白磁片が 1 点出土している。

SX151 (図 58)

706 は土師器甕の口縁部である。復元口径 32.0 cm を測る。口縁部は外反し、口縁端部は外側に面を持たせ、上部は丸くおさめる。体部外面にハケ調整を施す。

この他に図化の難しい土師器や瓦器の細片が出土している。

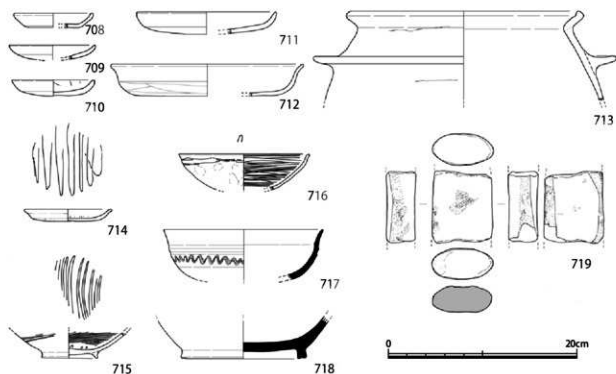


図 59 中層遺構 SP 群出土 土器・石製品 (S = 1/4)

717 は須恵器無蓋高坏の坏部である。口縁部中段には三段の稜が存在するが、いずれも鈍い。外面下半には波状文が巡る。見込みには自然釉が厚く付着する。718 は須恵器の壺や坏などの底部である。全体に厚さ 0.7~1.1 cm と厚手の作りである。高台は開き気味で、断面四角形である。内外面ともナデ調整を施す。

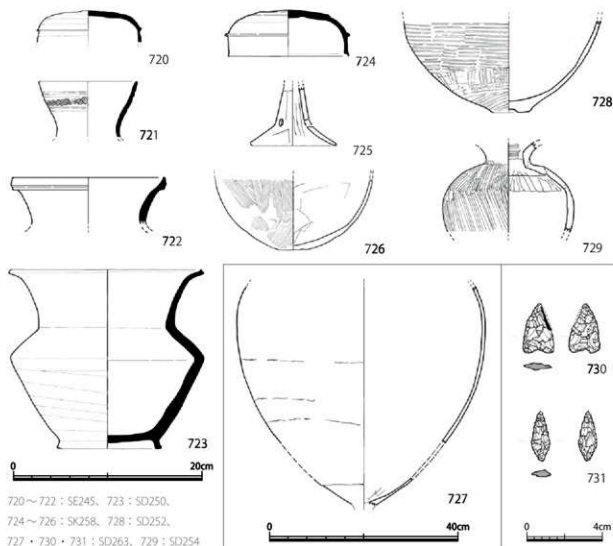
719 は敲石・擦石である。棒状の石器を再利用したものと考えられる。残存長 7.6 cm、幅 6.4 cm、厚さ 2.9 cm、重量 263.4 g を測る。片面および両側面に敲き痕が存在する。両断面の一部には被熱痕も認められる。

下層遺構 (図 60)

下層遺構は弥生時代、古墳時代、古代の遺構であり、今回の調査の中心的遺構群である中層遺構よりも古い時期の遺構を一括している。下層遺構に属す各時代の遺構の数は限られるが、遺物は中層遺構に混ざる形で出土したものと合わせて一定量が出土している。図 60 では、そのうち下層遺構から出土した遺物を示しており、それぞれ各遺構の時期を表わすものと考えられる。以下に、遺構の項で記した遺構順に詳細を述べる。

SD252 (図 60)

728 は弥生土器壺である。底部径 4.2 cm を測る平底で、体部下半は球形を呈する。外面は底部付近は縦・斜め方向のタタキ、その上部はやや左上がりの水平タタキを施す。内面はナデ調整を施す。底部外面に黒斑を有する。



720～722：SE245、723：SD250、

724～726：SK258、728：SD252、

727・730・731：SD263、729：SD254

720～726・728・729：S=1/4、727：S=1/8、730・731：S=1/2

図60 下層遺構出土 土器・石器 (S = 1/4・1/8・1/2)

SD254 (図60)

729は弥生土器壺である。最大径が上半に位置する体部に、根元から外反する細い頸部をもつ。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。体部外面には縦方向のミガキを施す。

SD263 (図60)

727は弥生土器甕の体部である。倒卵形の体部で、底部は平底であると考えられる。底部付近に黒斑が存在する。復元体部最大径52.2cmを測る。

730・731はサヌカイト製の石剣である。730は凹基式で、長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重量1.10gを測る。基部の扱りは控えめな山形である。731は長さ2.6cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、重量0.83gを測る。有茎式だが木の葉形に近い。表面の磨滅により定かではないが、先端および末端がわずかに欠けている可能性がある。

SE245 (図60)

720～722はSE245の掘方埋土から出土した須恵器である。720は蓋環の蓋である。復元口径

11.1 cmを測る。頂部は平坦であり、全体の約9割にヘラケズリを施す。肩部の稜は鋭く突出する。721は壺の口縁部である。復元口径 10.2 cmを測る。上半部に二条のふい凹線が巡り、その間に波状文を施す。色調はにぶい黒褐色を呈し、他の須恵器と雰囲気異なる。722は壺の口縁部である。口径 15.5 cmを測る。胎土には0.1~0.3 cm大の白色礫を多く含み、焼きはやや甘い。

SK258 (図60)

724は須恵器蓋環の蓋で、ほぼ完形品である。口径 12.6 cm、器高 4.8 cmを測る。頂部から肩部にかけての広い範囲に自然釉や窯体から落剥したと考えられる土塊が付着している。端部は内傾して明瞭な段をもつ。

725は土師器高環の脚部である。ラッパ状に開く形状で円形透かしが三方向に穿たれる。外面裾に逆V字状の線刻が存在する。726は土師器囊の下半部である。丸底で球形の体部であると考えられる。外面は細かなハケ調整、内面は板ナデ調整を施す。外面は被熱しており、その影響か直径 1 cm大の表面の剥がれが複数存在する。

SD250 (図60)

723は須恵器広口壺である。回転ナデで成形した後、外面上半と内面を強めの回転ナデ調整で仕上げる。断面台形のしっかりした高台が丁寧に貼り付けられている。底部には長さ 1.6 cm、幅 0.3 cmの小葉が一枚、焼成前に張り付いて剥がれた跡が存在する。

遺構面出土 (図61)

図61には遺構面検出作業や清掃作業時に出土した遺物を図示している。その為、本来は遺構に伴う遺物であった可能性のある遺物を含む。大半が中層遺構、一部は下層遺構に属す時期の遺物である。

732~753は手づくね成形の土師器皿である。

732~745は小皿である。復元口径 8.4~9.8 cm、器高 1.3~1.9 cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。740・742・744は底部との境に強い稜をもつ。口縁端部は丸く取めるものが大半を占めるが、740・742・744は面取りを施す。732は底面中央が窪む。737は底部の作りが粗く、器壁も全体に厚い。743は全体の歪みが大きく、楕円形を呈する。735・744は黒斑が存在する。色調は橙色と浅黄色を呈するものが半数程度ずつ存在する。

746~753は大皿である。復元口径 11.6~15.4 cm、器高 2.1~3.1 cmを測る。このうち746はやや小型であり、これを除いた場合は復元口径 12.6~15.4 cmとなる。いずれも内外面にナデ調整を施す。746・752は底部との境に強い稜をもつ。口縁端部は749が面取りを施し、他は丸く取める。747・750は底部外面からの指押さえが強く、内面側が盛り上がる。747は内外面に黒斑が存在する。752は底部に粘土片が複数付着する。色調は全体の2/3が浅黄色、1/3が橙色を呈する。

754は土師器羽釜である。復元口径 34.0 cmを測る。口縁部はくの字形に短く折り返す形状である。鈿はやや短く、上向きに付く。煤は付着していない。

755は須恵器器台の脚部上端である。最上段は三角透かしを三方向に穿つ。

756は土馬の脚である。ナデ調整を施しており、外側を向く面はやや平坦に仕上げられている。

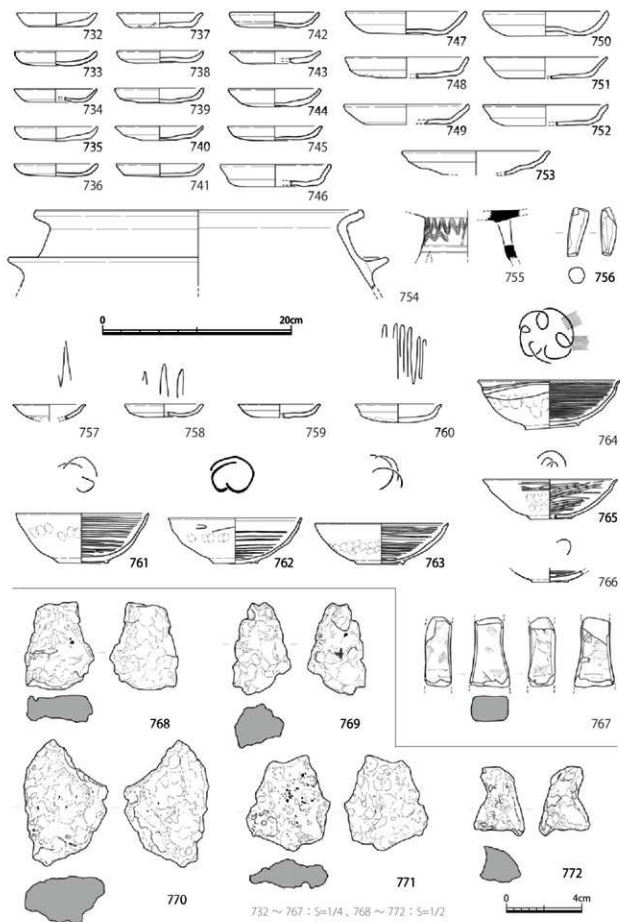


图 61 道溝面出土 土器・石製品・鉄滓 (S=1/4・1/2)

757～760は瓦器皿である。口径7.6～9.0 cm、器高1.4～2.0 cmを測る。757・759・760は口縁端部をわずかにつまみ出し、758は丸く収める。外面底部は未調整で指・掌圧痕が残る。757・758・760は見込みにジグザグ状暗文を施す。759は不明である。757は底部が丸底に近いと考えられる。760は全体の歪みが大きい。

761～766は瓦器埴である。761～763・765は口径14.0～14.2 cm、器高4.2～5.2 cmを測る。内面の圏線ミガキは大和型の隙間が空き、見込みに同心円状暗文を施す。外面のミガキは磨滅の為不明瞭であるが口縁部付近のみを磨くと考えられる。764は口径14.9 cm、器高5.3 cmを測る。内面の圏線ミガキは密で、見込には連結輪状暗文を施す。圏線や暗文の隙間から施文前のハケナデの痕が鮮明に確認できる。766は底部の破片で、低く径も小さい高台が貼り付けられている。

767は砥石である。両端が破損しており、本来は両側あるいは片側が太くなる棒状であったと推測される。残存長7.4 cm、幅2.7～4.2 cm、厚さ2.4 cm、重量113.8 gを測る。各面に使用痕があり、一ヶ所に棒状具を研いだと考えられる浅い溝も存在する。

768～772は鉄滓である。768は重量39.8 gを測る。気孔は少ない。769は重量35.4 gを測る。気孔は少なく、少量の炭化物が付着する。全体ににぶい赤褐色を呈する。770は重量78.8 gを測る。表面に鉄分の露出が多い。塊形滓の一部である可能性もある。771は重量31.0 gを測る。0.1 cm未満の小気孔が多数存在する。772は重量20.2 gを測る。0.5 cm大と0.1 cm大の気孔が混在する。

重機掘削時・排水溝掘削時(図62)

遺構面までの重機掘削作業や調査区排水溝の掘削時に出土した遺物である。

773～780は土師器皿である。

773～778は手づくね成形の小皿である。復元口径8.4～9.4 cm、器高1.2～1.9 cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。口縁端部は776が面取りを施し、他は丸く収める。777は底部との境に強い稜をもつ。776は粘土紐痕が確認できる。773は全体が黒斑化したような褐灰色を呈する。777は厚手の作りで、形状は歪みが大きい。

779はロクロ形成の小皿である。口径9.2 cm、器高1.9 cmを測る。器壁は全体に厚く、底部には右回転の糸切り痕が明瞭に残る。

780は手づくね成形の大皿で、復元口径13.0 cm、器高2.5 cmを測る。内外面ともにナデ調整を施し、外面の口縁部下に沈線を巡らす。底部外面にはスノコ状の敷物の痕が残る。

781～787は大和型の瓦器埴である。783は他よりやや大型で、口径14.7 cm、器高5.3 cmを測る。内面の圏線ミガキは密で、見込みに同心円状暗文を施す。781・782・784～787は口径13.0～14.4 cm、器高3.9～4.7 cmを測る。内面の圏線ミガキは隙間があり、特に786は隙間が大きい。見込みに同心円状暗文を施す。ただし782の暗文は連結輪状暗文に近い形状である。

788は瓦器の大型埴あるいは鉢である。底部を欠く。復元口径19.8 cmを測る。厚手の作りで、丸みをもって立ち上がる。口縁端部には強い横ナデを施す。内面はハケで成形した後、やや圏線ミガキを粗く施す。外面は口縁部付近のみにミガキを施し、以下の範囲は未調整で残す。和泉型の鉢である可能性がある。

789は須恵器蓋環の身である。復元口径11.0 cm、器高4.0 cmを測る。口縁部は短く内傾し、端部は丸く収める。外面の受部下面以下の範囲に自然軸が広く付着する。790は須恵器鉢の底部である。

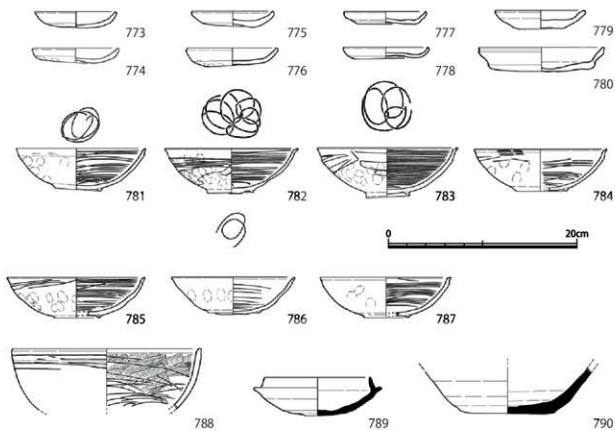


図 62 重機掘削時・排水溝掘削時出土 土器 (S = 1/4)

内外面ともナデ調整で仕上げるが、外面は粗く、ケズリの痕が残る。内面は使用により器面が滑らかになっており、色調もやや暗く変色している。

第IV章 総括

第1節 調査成果のまとめ

今回の発掘調査では弥生時代以降の各時代の遺構・遺物が存在することを確認している。Ⅲ章で述べたように便宜上、上層遺構・中層遺構・下層遺構に分けて調査・報告を行っている。上層遺構は13世紀以降の耕作活動に関する遺構群、中層遺構は平安時代後期から鎌倉時代前半（11世紀後半～13世紀前半）にかけての河道や区画溝を中心とする集落関係の遺構群、下層遺構は弥生時代から古代にかけての散発的な遺構を、それぞれ一括しており一定の時期幅を含む。なお、上・中・下層遺構はいずれも基本的に同一面（基本層序Ⅳ層上面）において検出される。ここでは時系列に沿って今回の調査における各時代の遺構・遺物の状況や変遷過程をまとめる。

調査地において最初に遺構・遺物が確認できる時期は弥生時代に遡る。最も古い時代の遺構としてSD254が挙げられ、土器と石籬が出土している。弥生時代終末期にはSD252・254が構築される。弥生時代の遺構は、いずれも小規模な溝で遺存状況も良くないため詳細な機能は不明である。この他にも中層遺構の河道等からも弥生時代の遺物が少量出土しており、周辺には他にも弥生時代の遺構が存在していた可能性は高い。調査区全体の約3/4の範囲を中層遺構の河道が占めており、古くはこの一帯に存在していた遺構が河の流れによって消失した可能性は高い。この点は次に述べる古墳時代や奈良時代の遺構についても同様である。

古墳時代の遺構としてはSE245とSK258がある。どちらも中期後半の遺構である。SK258は廃棄土坑であると考えられる。後の時代の遺構や上層包含層から出土している遺物の時期も中期後半が中心である。調査区北西部には時期不明のピットが多数あり、これらを便宜上中層遺構として扱っているが、古墳時代の遺構を含む可能性も残る。また、中層遺構の河道からは埴輪片が複数出土している。埴輪の中には黒斑が認められる破片もあり、上記遺構の時期よりも古い可能性が高い。

奈良時代の遺構としてSD250がある。SD250は遺存状況が悪く出土遺物の量も限られるが、周辺に位置する後世の遺構から奈良時代の遺物が一定量出土している。土師器と須恵器の他に土馬が複数出土している。

平安時代後期から鎌倉時代前半にかけて形成される遺構群（中層遺構）が今回の調査成果の中心である。11世紀後半に遺構・遺物が現れ、12世紀中頃～後半に複数の区画溝が構築されると遺構・遺物ともに量が増加する。その後、これらの遺構は13世紀前半にかけて継続するが13世紀初頭には数を減じ始めている。中層遺構の重要な要素として、河道の存在が挙げられる。河道は先述のとおり調査区の大部分の範囲を占めており、上記の遺構群は河道との関係の中で河岸に築かれた遺構と位置付けられる。河道からは多くの遺物が出土しており、出土遺物全体の約半数を占める。調査区内における河道は12世紀中頃から13世紀前半にかけて段階的に埋没していったことが確認できる（河道1～4層）。河道斜面からは階段状の足場ないし作業場として利用されたと考えられる木組遺構も検出されている。調査地一帯では河道の埋没とともに土地利用の在り方も変化したことが窺える。

11世紀後半に構築された遺構としてはSD230、SK256・257、SX148がある。SD230は中層遺構前半段階の中心的遺構である。南西～北東方向の溝で、南端は西側へ折れ曲がって河道に接続して

いた可能性がある。掘り直しを行いつつ 12 世紀前半まで継続利用される。この時期の遺物の他、古墳時代や奈良時代の遺物も多く出土しており、SD230 の周辺に古い遺構が存在していたことが窺える。SD230 の東側には、SD230 および河岸ラインと直交する幅約 0.2~0.4 m の溝が複数存在し (SD251 等)、これらは 12 世紀前半の遺構である可能性がある。

SD230 が埋没した後の 12 世紀中頃~後半になると区画溝 (SD140・145~147・213) が掘削される。区画溝は河岸沿いの空間を台形状に画し、区画の北側は調査区外へ続くと考えられる。同時期の遺構として井戸 (SE149・150) や土坑 (SX138・139・141・151 他) などがある。また、掘立柱建物 (SB268~271) と掘立柱塼 (SA266・267) も区画溝や河岸との位置関係から、この時期の遺構である可能性が高い。掘立柱建物のうち SB270 は総柱建物である。掘立柱建物は位置が重複しており、建て替えが行われたと考えられる。これらの遺構は区画溝の掘り直しを行うなどして 13 世紀初頭頃まで維持される。13 世紀初頭からは遺構が新たに構築されることが無くなり、13 世紀前半のうちに廃絶することとなる。遺物は土師器皿、瓦器壘・皿を中心とする多数の遺物が出土している。区画溝からも多くの土器が出土している。一般的な土師器・瓦器の他にいわゆる輸入磁器の破片も複数出土している点は注目に値し、調査地周辺を利用していた人々の経済的な優位性を見て取ることができる。土器の器種の点で見ると一般的な皿・壘の他に、土師器では羽釜、須恵器では摺り鉢が多く出土している点も調査地の性格を検討する上で興味深く、炊事作業との関連も想起される。河道からは木製人形 (烏帽子を被った男性の頭部)、石製温石、硯、呪符木簡などの特徴的な遺物も出土している。鉄滓や砥石といった鍛冶関連遺物も中層遺構に散らばる形で出土しているが、これらについては下層遺構に由来する遺物である可能性も考慮する必要がある。

13 世紀前半のうちに調査区内での河道は埋没し、河岸に構築されていた遺構群も廃絶する。その後、あまり時期を経ないうちに調査地は農地としての土地利用が中心へと変化しており、上層遺構として耕作溝群が検出されている。耕作溝群の中でも最も古い一群は、おそらくは調査地より東側においてまだ流れを保っていた河道との位置関係から、正方位と異なる斜方向の溝が掘られている。その後の耕作溝群は正方位へと変化していく。農地としての利用期間は、その具体的な時期を示す遺物が出土しないことから詳細を明確にしたいが、13 世紀以降、現代にいたるまで継続したと考えられる。

第 2 節 周辺の遺跡と環境

今回の調査で確認した遺構・遺物および遺跡全体に関わる評価について、周辺の環境や他の調査成果と合わせて述べる。

弥生時代の遺構・遺物については、調査地から南および北にやや離れた曲川遺跡や川西根成柿遺跡での成果が以前から注目されている。一方、新堂遺跡は比較的疎の地域であると捉えられるが、今回の成果も含めて検出例が少しずつ増えつつあり、今後も注意が必要な地域と言える。

ただし、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての時期は状況が異なり、新堂遺跡の中でも南側の地域において遺構が展開することが知られている。今回の調査でも弥生時代終末期の遺構・遺物の存在を確認している。調査地から西に位置する榎教委 2007 - 5・2008 - 2 次調査地では、庄内期の竪穴建物や大溝、河道などが確認されており、その河道対岸に位置する今回の調査地にも遺跡の広

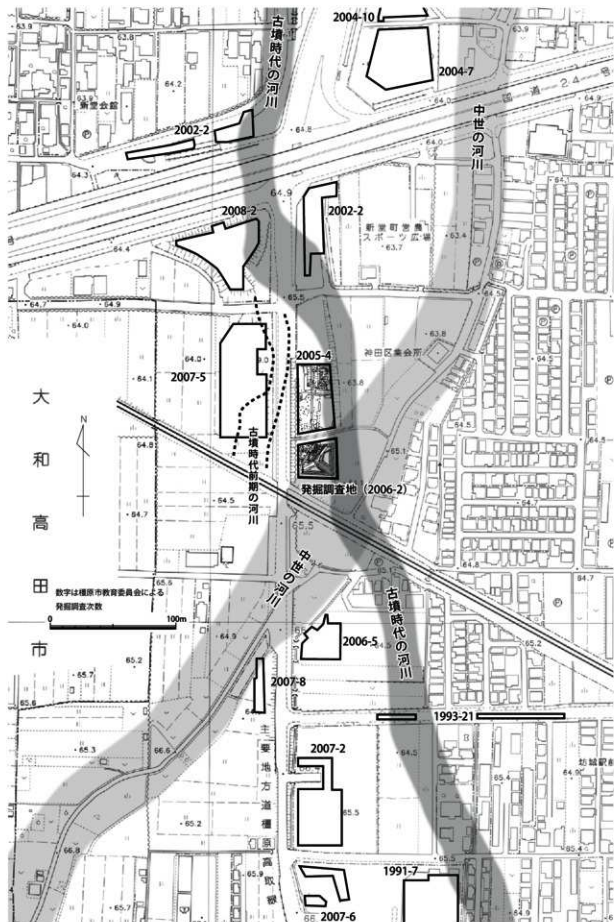


図 63 新堂遺跡・東坊城遺跡周辺の調査地と河道復元図 (S=1/3,000)

がりがあることが確認できたと言える。

古墳時代の中期は新堂遺跡の周辺を考える上で最も注目される時期である。今回の調査地の北隣に位置する榎教委 2002-2・2005-4 次調査（『新堂遺跡Ⅰ』・『新堂遺跡Ⅱ』）では、古墳時代の河道沿いから中期後半を中心とする時期の遺物が多量に出土している。その中には陶質土器や韓式系土器、多量の製塩土器、鍛冶関連遺物等といった特徴的な遺物も含まれる。今回の調査地も同一の古墳時代河道沿いに位置しており中期後半の遺構・遺物の存在が確認されている。ただし、調査区内の大部分が中世の河道上に位置するため、それ以前の遺跡が消失しており、遺構は部分的に残るだけに留まる。今回の調査では中世河道から埴輪片が複数出土しているが、調査地のすぐ近辺では古墳の存在は知られておらず、今後の成果に期待がされる。

今回の調査では、数が限られるものの奈良時代の遺構・遺物の存在が新たに確認されている。奈良時代については周辺の遺跡も含めて存在が希薄であるとされてきた時期であり、その空白を埋める貴重な資料と言える。

平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての時期は、新堂遺跡と曲川遺跡において遺跡の形成が活発化する時期にあたる。北隣の敷地で実施した榎教委 2005-4 次調査でも 11~13 世紀の遺構・遺物が確認されている。12 世紀代には大型の区画溝を伴う方形の屋敷地が営まれており、特に 12 世紀後半~末の時期に遺構・遺物量が增大する。今回の調査の中層遺構群も同様の時期的変遷を示しており、出土遺物の傾向（多量の皿・壺、輸入磁器の存在等）も近い特徴を示す。これらのことから両者を一連のものとして捉えて問題無いと考えられる。2005-4 次調査地では調査区北半部以北に屋敷地が展開し、南半は遺構がやや希薄になる。この空閑地を経て南側、より河道に近付いた今回の調査地点で再び遺構・遺物が増加するという空間的展開を見せる。ただし複数の大型建物や屋敷墓を含む屋敷地内と比較すると、遺構の構成は相対的に簡素と言え、これらの遺構群の中心は北の屋敷地側にあったと推測される。

その後、13 世紀代前半にこれらの遺構群は廃絶し、農地としての利用が中心へと変化する。隣接する河道も最終的な埋没時期はやや下る可能性があるものの、近い時期にほぼ埋没する。この河道跡は地割の乱れや堤防状の高台として現地形においても確認することができる。河道の埋没が周辺一帯の土地利用の在り方に大きな変化をもたらしたと考えられる。屋敷地を営んだ集団の行方については不明であるが、他にも中世の遺構・遺物の存在が確認されている新堂遺跡の北方や曲川遺跡に移った可能性も考えられる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんどうせき3 一けいなわじどうしやう「ごせくかん」けんせつこともなうはつつちようさほうこくしよー							
書名	新堂遺跡Ⅲ - 京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書一							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第15冊							
編著者名	橿原市教育委員会 石坂泰士							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 文化財課							
所在地	〒643-0826 奈良県橿原市川西町 858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦 2019年(令和元年)8月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどう 新堂遺跡	ならけん 奈良県 かしはらし 橿原市 しんどうちやう 新堂町	29205	14C545A	34° 29' 43"	135° 45' 41"	2006/7/3 ～ 2006/11/2	900 ㎡	京奈和 自動車 道建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新堂遺跡	集落	弥生時代		溝		弥生土器・石器		橿教委 2006-2 次調査
		古墳時代中期		井戸・土坑		土師器・須恵器・埴輪		
		奈良時代		溝		土師器・須恵器・土馬		
		平安時代後期 ～鎌倉時代前半		河道・区画溝・溝・ 井戸・掘立柱建物・塀		土師器・須恵器・瓦器・ 磁器・木製品・石製品・ 鉄滓ほか		
		中世以降		耕作溝		土師器・瓦器		
要約	<p>弥生時代以降の各時代の遺構・遺物が存在することを確認している。遺構は上層遺構：13世紀以降、中層遺構：平安時代後期～鎌倉時代前半（11世紀後半～13世紀前半）、下層遺構：弥生時代～奈良時代、に大きく分けられる。このうち中心となるのは中層遺構で、今回の調査における遺構・遺物の大部分を占める。</p> <p>中層遺構として、調査区の約3/4を占める広い範囲に河道が存在する。この河道は現在も条里地割の乱れとして調査区周辺で痕跡を確認できる。調査区の北西部にあたる河道沿いの一部に溝、井戸、掘立柱建物・塀などの遺構が展開する。遺構・遺物は中層遺構の中でも12世紀中頃～後半のものが最も多く、この時期には区画溝も構築される。これらの遺構は13世紀前半まで継続し、以後は農地としての利用が中心となる（＝上層遺構の耕作溝群）。その他に、区画溝に先行する11世紀～12世紀前半の溝・土坑などの遺構も存在する。中層遺構からは土器、木製品、石製品などの遺物が多く出土している。中層遺構は北隣の調査地（『新堂遺跡Ⅱ』）で確認されている屋敷地遺構群との関連が想定される。</p> <p>これらの遺構より古い遺構を一括して下層遺構としており、弥生時代の溝、古墳時代中期後半の井戸・土坑、奈良時代の溝がある。いずれの時期も遺構の数は限られるが、遺物は上層の遺構に巻き込まれる形で出土したものを含めると一定量が存在している。</p>							



調査地遠景 航空写真（南から。中央が調査地。下半の線路は近鉄南大阪線）



調査地遠景 航空写真（西から。奥やや右は欽傍山）

図版 2



調査地遠景 航空写真（東から。奥が葛城山・二上山方面だが天候不良で雲に覆われている）



調査区全景 航空写真（俯瞰。上が北。中層遺構調査途中）



調査地中景 航空写真(南西から)



調査地中景 航空写真(北東から)

図版 4



調査区全景 上層遺構検出状況（南西から）



調査区全景 上層遺構検出状況（北西から）



調査区全景 上層遺構検出状況（北から）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北から）

図版 6



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（南西から）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北西から）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北東から。奥は金剛山、葛城山）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（南東から。左奥は二上山）

図版 8



上層遺構 SE131 井戸枠・遺物出土状況（北から）



調査区全景 中層遺構完掘状況（北から。河道や溝など一部遺構は調査途中である。図版9～12も同様）



調査区全景 中層遺構完掘状況（北西から）



調査区全景 中層遺構完掘状況（北東から）



調査区全景 中層遺構完掘状況（南から）



調査区全景 中層遺構完掘状況（南西から）



調査区北西部 中層遺構 区画溝囲連遺構完掘状況（南から）



調査区北西部 中層遺構 区画溝囲連遺構完掘状況（南東から）



調査区北西部 中層遺構 区画溝間連遺構完掘状況（西から）



調査区北西部 中層遺構 区画溝間連遺構完掘状況（北東から）



SE150, SX138・139・148 検出状況（北から）



SX138・139 遺物出土状況（北西から。右手前がSX138）



調査区南東部 河道大畔土層断面（西から）



調査区中央部 河道岸壁 木組み遺構出土状況（南南東から）



河道 木桶東半部出土状況 (南東から)



河道 木製人形出土状況 (南西から)



河道 木桶東半部出土状況 (北東から)



河道下層 下駄出土状況 (北から)



SD145・146 南半 完掘状況 (東から)



SD146 遺物出土状況 (東から)



SD146 遺物出土状況（南西から）



SD145・146 遺物出土状況（南東から。手前がSD146）



SD145 東半部 遺物出土状況・土層断面（東北東から）



SD145・231 土層断面（東から）



SD145・146・147 土層断面（西から）



SD146 土層断面（東から）



SD145・146 屈曲部 土層断面（北東から）



SD145・河道 土層断面（北東から）



SD140 土層断面(南から)



SD144 完掘状況(北西から)



SD144 検出状況(北西から)



区画内東半部 溝・ピット群検出状況(北北東から。右はSD230)



区内東半部 溝・ピット群検出状況（北東から）



区内西半部 溝・ピット群検出状況（南東から）



SD230 検出状況（北から）



SD230 完掘状況（北東から）



調査区北西部 中層遺構完掘状況（南西から）



SD230 土層断面（北東から）



SD230・河道 土層断面（東から。調査区西壁）



SE149 検出状況（北東から）



SE149 枠内北半 土層断面（北東から）



SE149 埋戻土 完掘状況（北東から）



SE149 掘方 土層断面（北東から）



SE149 井戸枠出土状況（北から）



SE150 検出状況（北から）



SE150 土層断面（北東から）



SE150 完掘状況（北東から）



SK257 土層断面（北から）



SK260 土層断面（北から）



SX141 土層断面（西から）



SX141 完掘状況（東から）



SX151 土層断面（西から）



SX151 完掘状況（西から。SD230 束朽を検出）



SX203 土層断面（東から）



SX203 完掘状況（北から）



SD252 完掘状況（東から）



SD254 完掘状況（北東から）



SD254 完掘状況（南東から）



SD254 北東部 遺物出土状況（東から）



SK258 土層断面（北東から）



SE245 土層断面（北から）

図版 22



調査区北壁西端部 土層断面 (南から)



調査区北壁中央部 土層断面 (南から)



調査区西壁南端部 土層断面 (東から)



調査区西壁北半部 土層断面 (東から)



調査区全景 完掘状況 (南から)



調査区全景 完掘状況（北から）



調査区全景 完掘状況（北西から）

図版 24



調査区全景 完掘状況（北東から）



調査区全景 完掘状況（東から）



調査区全景 完掘状況(南西から)



調査区北部 完掘状況(北東から)



河道出土 木製人形 (231)



河道出土 温石 (229。左：凸面、右：凹面)



28



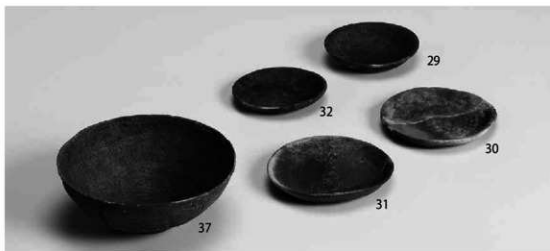
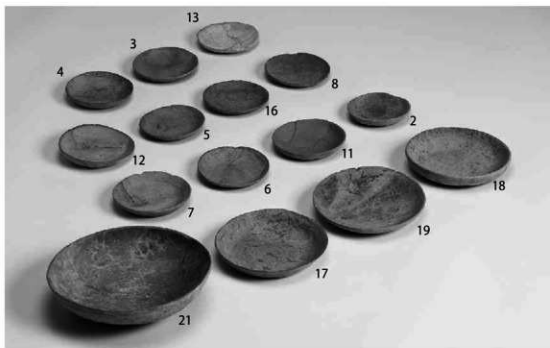
38



33

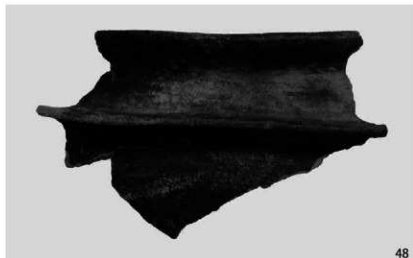
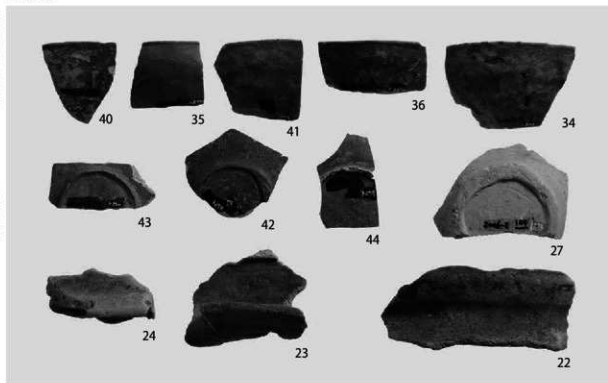


39



図版 28

上層遺構耕作溝・SE131出土土器





52



60



61



66



75



76



77



85



87



88



91



92



93



96



105



106



122



123



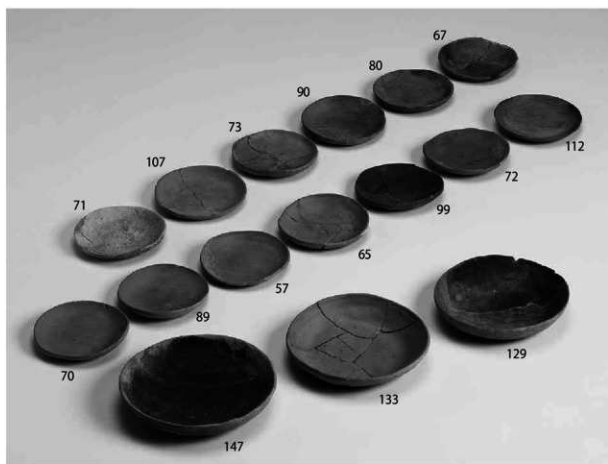
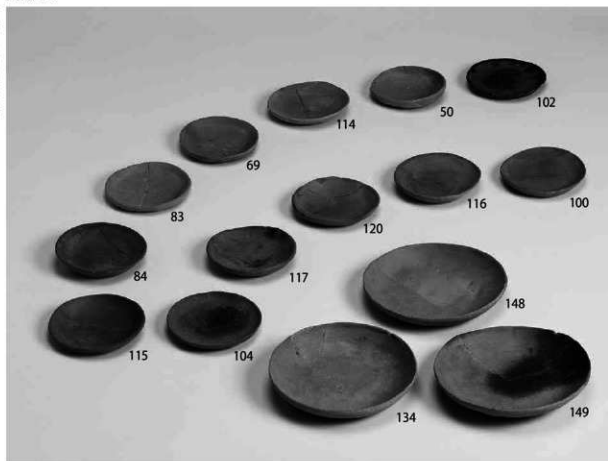
124

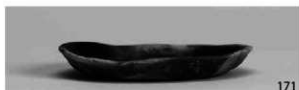
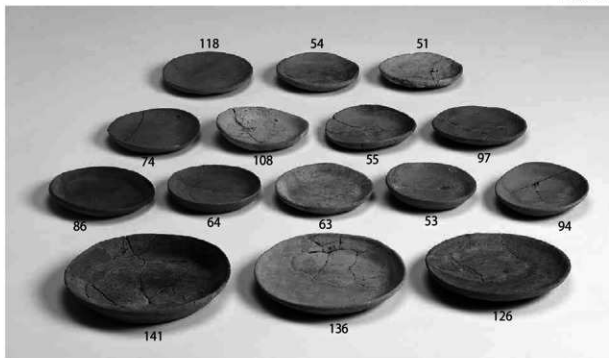


139

图版 30

河
道
一
層
田
十
十
器
十
十

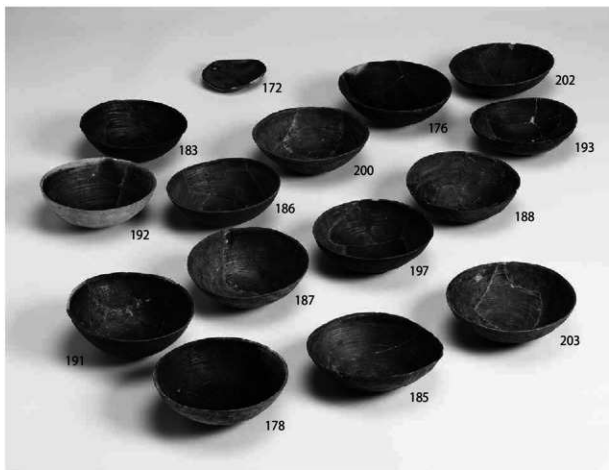
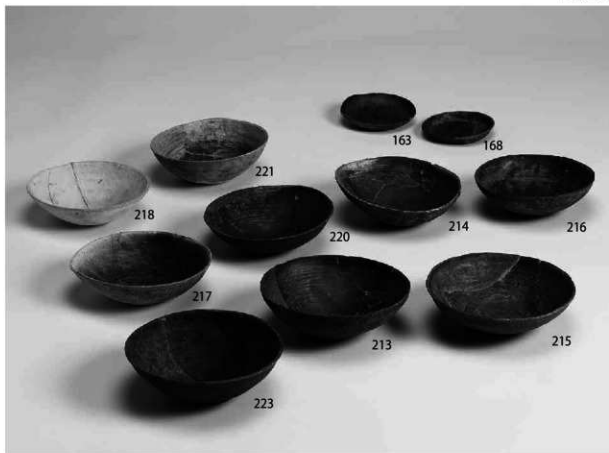




图版 32

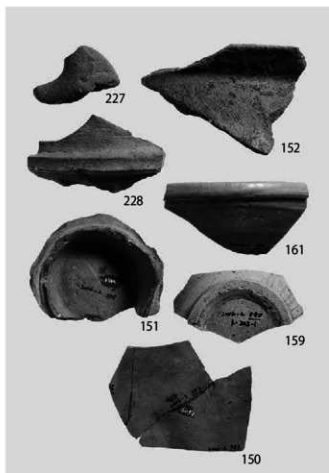
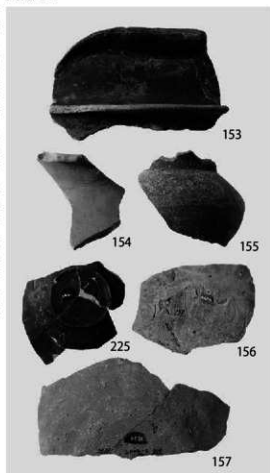
河
道
一
層
出
十
器





図版 34

河道1層出土土器・土製品・木製品・石製品・銅銭





231



242



243



247



255



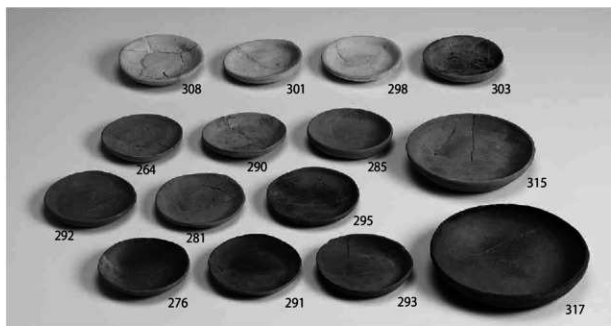
257



- 237
- 241
- 238
- 249
- 251
- 256
- 260
- 248
- 253
- 258
- 255
- 245
- 316

图版 36

河
道
3
層
土
器
十
五
器





313



314



318



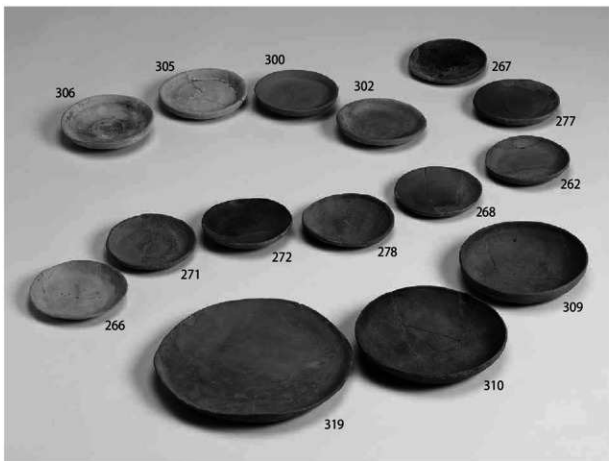
331



332



333



306

305

300

267

302

277

262

268

271

272

278

266

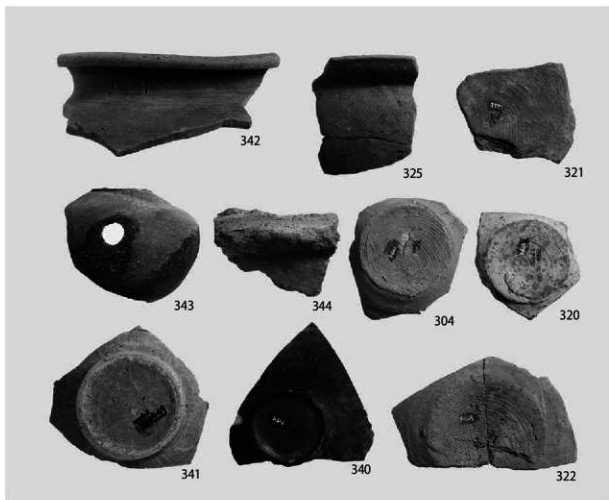
309

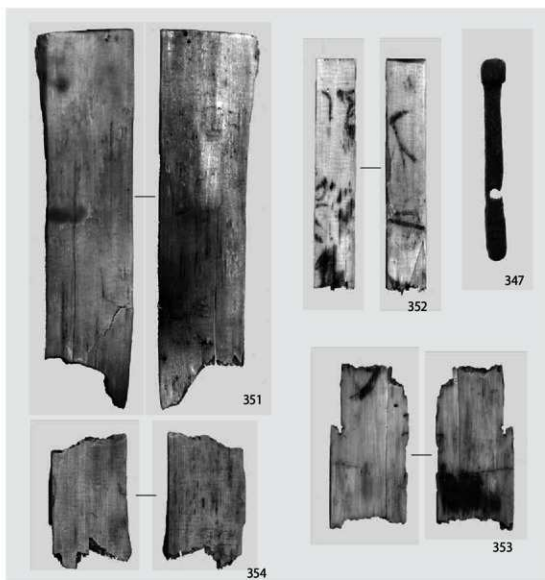
310

319

图版 38

河道3層出土土器





图版 40

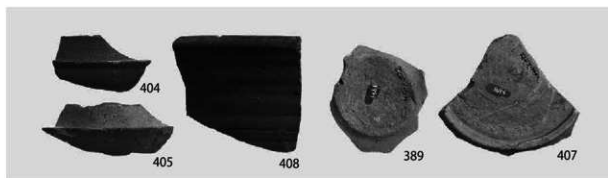
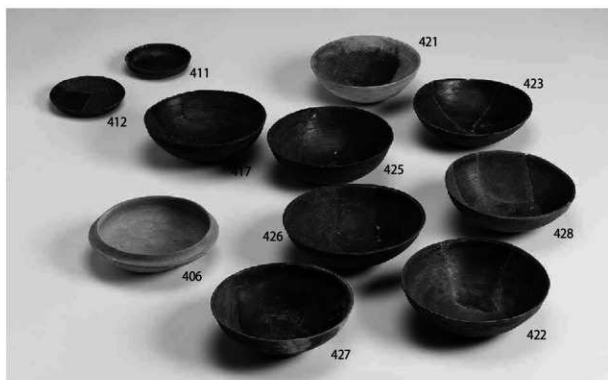
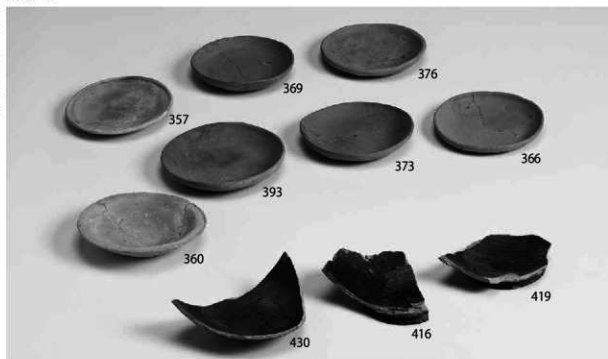
河道4層出土器





图版 42

河道4層出土土器





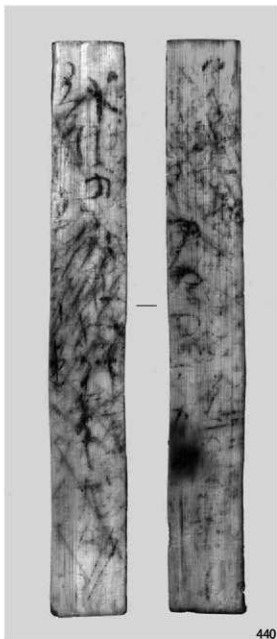
431



438



439



440

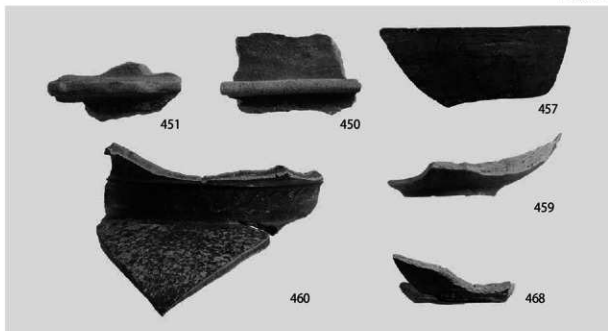


441

图版 44

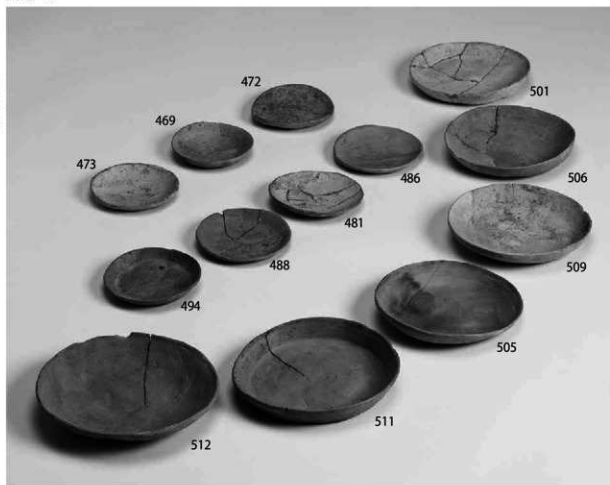
SD140出土器

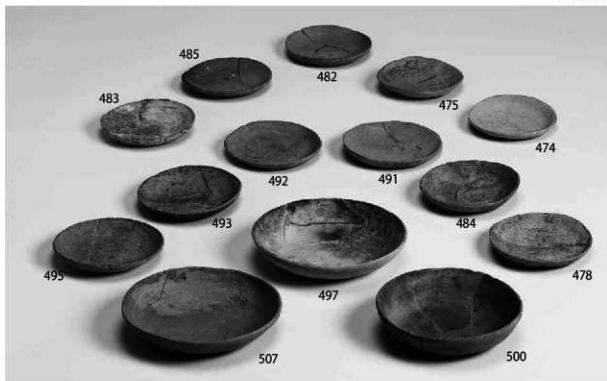




图版 46

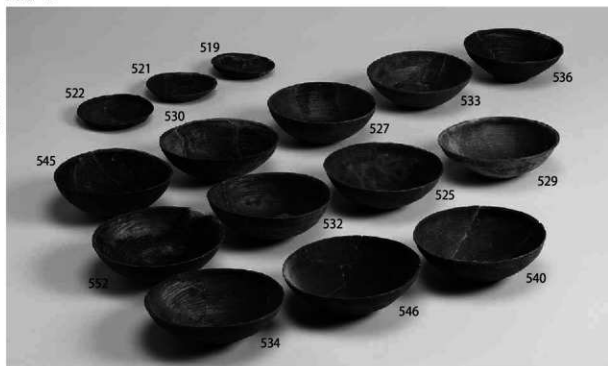
SD145出土器

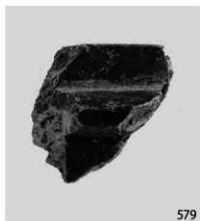




图版 48

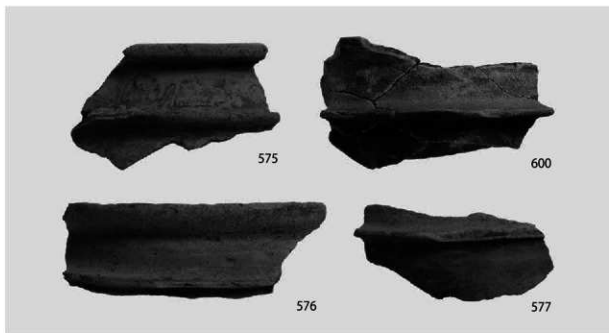
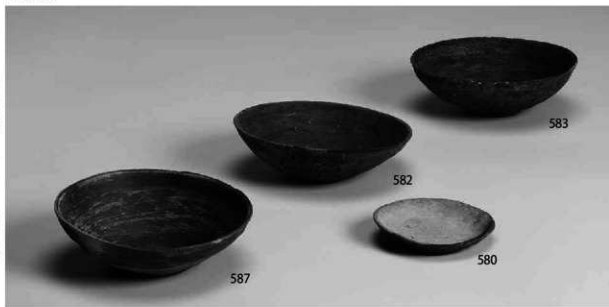
SD145出土器





图版 50

SD146出土器、SD147出土器





589



590



599



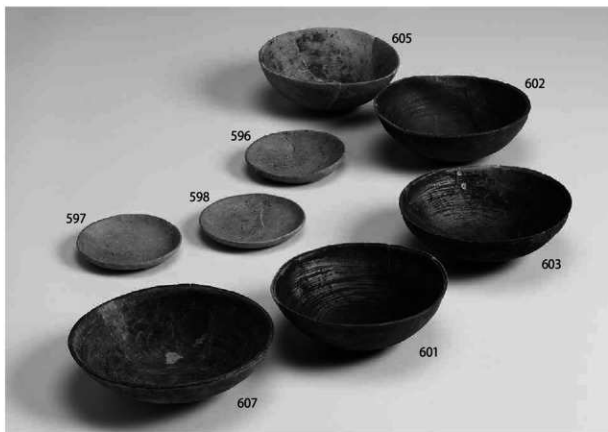
592



593



606



597

598

596

605

602

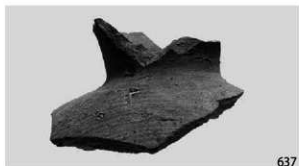
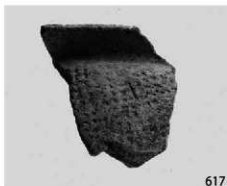
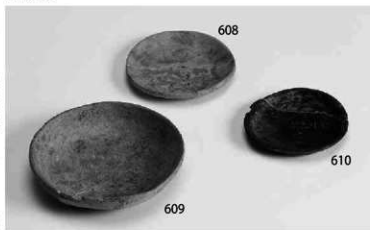
603

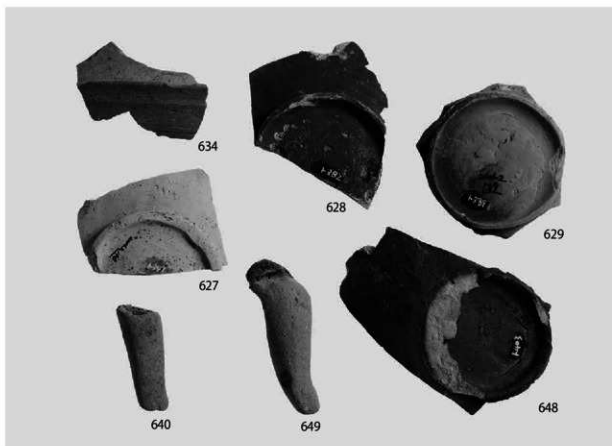
601

607

図版 52

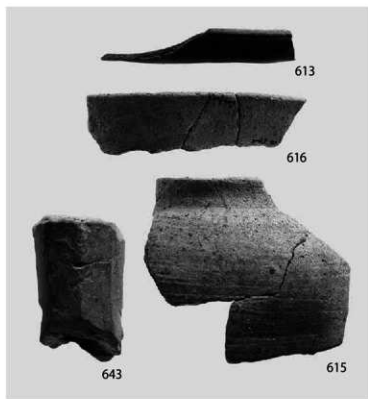
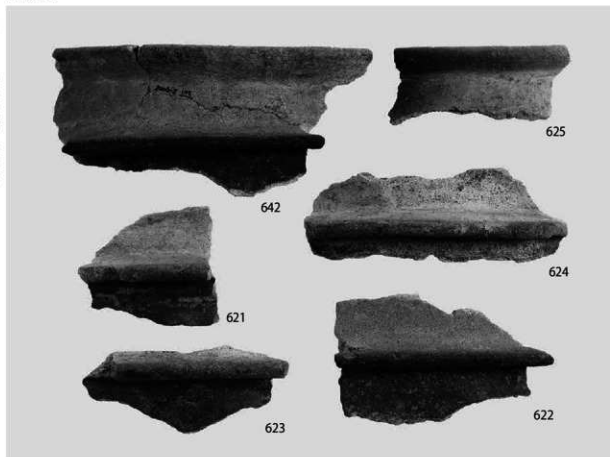
S D 1 4 4 出土器、S D 2 3 0 出土器・土製品

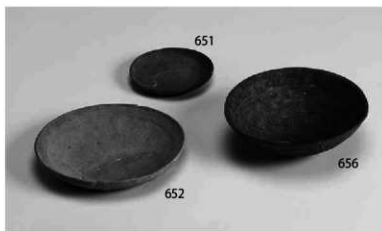




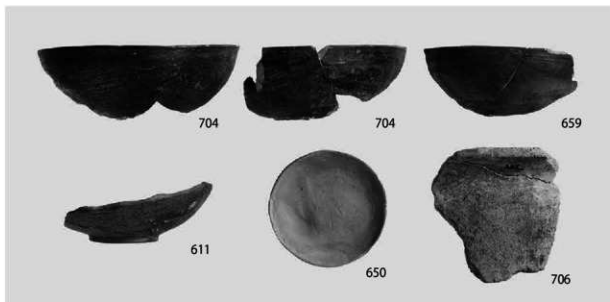
图版 54

SD230出土石器·土製品



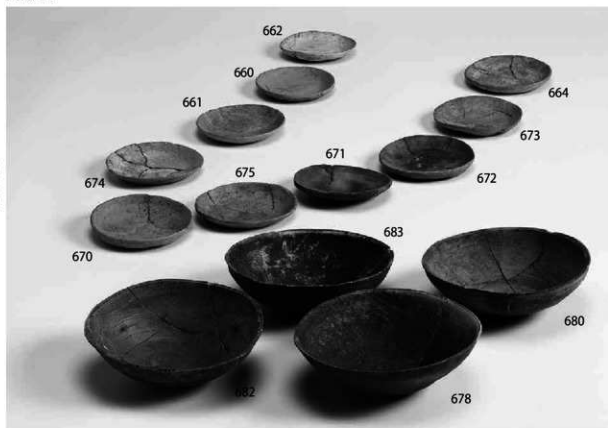


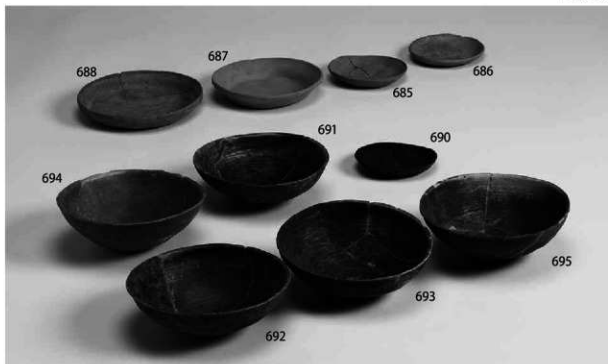
SE149出土土器・木製品
SE150・SX260・SX148・SX151・SD251出土土器



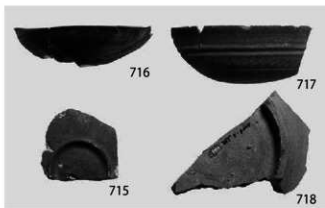
图版 56

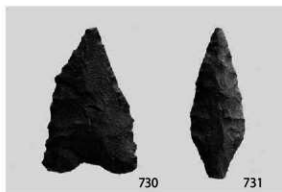
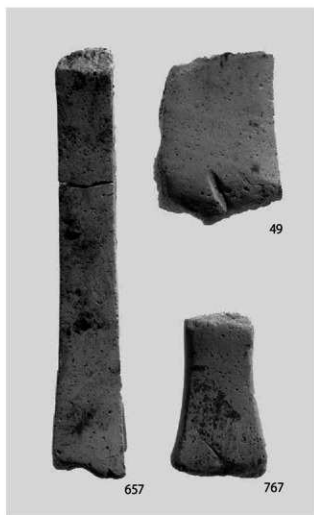
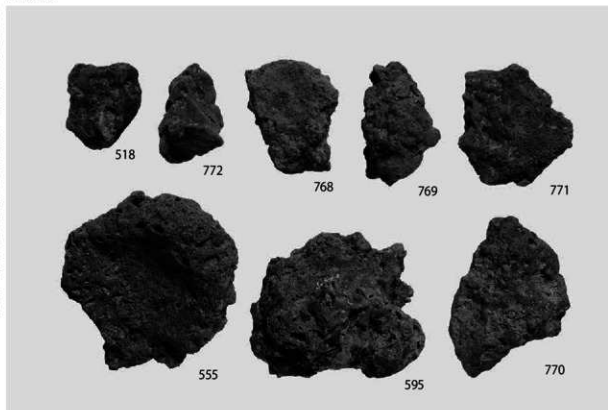
SX138·SX139
出土石器





SX141出土土器・石製品、SX148出土木製品、SX203出土土器、中層遺構SP群出土土器・石製品







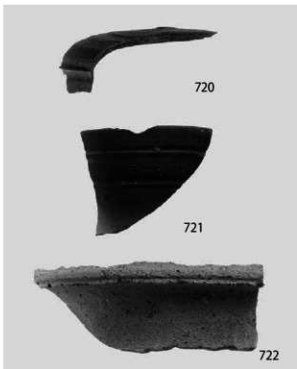
724



729



726



720

721

722



728



737

743

740

742

759

758

760

763

781

790

橿原市埋蔵文化財調査報告 第15冊

新堂遺跡Ⅲ

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 令和元（2019）年8月31日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会

印刷 株式会社明新社

奈良市南京終町3丁目464番地